

とあるシスコンの学園生活

Alps

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

佐天さんの兄である少年、それはすなわち最強の妹主義者《シスコン》だった・・・!?

A horizontal bar chart showing the distribution of values from 1 to 136. The x-axis is labeled with values 136, 129, 123, 115, 108, 100, 95, 90, 84, 75, 68, 63, 58, 52, 45, 38, 33, 26, 21, 16, 8, and 1. The y-axis has 18 unlabeled vertical tick marks. Each tick mark has a numerical value above it, representing the count of occurrences for that specific x-value.

x	Count
136	2
129	2
123	2
115	1
108	9
100	8
95	7
90	6
84	5
75	4
68	3
63	2
58	1
52	0
45	9
38	8
33	7
26	6
21	5
16	4
8	3
1	2

目次

『学園都市』

東京都西部を切り拓いて作られたこの都市では、”超能力開発”が学校のカリキュラムに組み込まれており、二百三十万の人口の実に八割を占める学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいる。

そんな異能力全盛の科学都市にて、一人の少年が猛烈な速度で移動をしている、その理由は一つ——愛ゆえに。



オツス、オレの名前は眞守。まもるって読むんで。そして姓は佐天、フルネームは佐天眞守。年齢は十五、高校一年生。

この中二全快、どこもかしこも異能バトルが起きてそうな『学園都市』には、その能力毎に階級的なものがあつて、レベル0からレベル5まで分けられてるってのは皆知つとる？

ま、厳密にはレベル6つてのもあるらしいけど、それは理論的に不可能というか、この都市最強の能力者が何かとある実験頑張つたら到達出来ますよー、というとてつも無いモンなんで除外しとくな。

因みにオレが開発を経て得た能力は『重力操作グラビティ・チャンジス』つつー、まあ読んで字の通り重力を変えるという何とまあ、便利な能力として、日々重宝させて貰つてます。

あ、そうそう。他にもこの世界、能力開発せずとも、生まれ育つた環境によつて芽生える希少価値マジ高い『原石』つてのもおりまして、オレ一応ソレにも該当するんすよね。

つまり、専門的に言うところの『デュアルスキル多重能力者』になるのかな？いや、でも二つの能力しか理論上は行使できないし『ツインスキル二重能力者』とも言つておこうか。

というか、思うんだけど・・・原石つつー希少な人間の頭を弄くつてまで、あつたらしい能力を開発するなんてこの都市めちゃんこ恐ろしい。

まあ、オレ自身が原石とか環境に因る後天的能力者なんて自覚があつた訳がなく、言われてから気付いたところもあるんすけど。

んな訳で、そんな希少な能力者であるオレは、普通はこの都市最高位に当たる超能力者^{レベル5}つてのに括られなきやいけないんだけど、諸事情でゴネまくつた結果。現在は大能力者^{レベル4}となつております。

そんなオレなんだけど、実は実に愛しい弟妹がいてだな……弟の方はこの都市に来ても居ないんだけど、妹は近隣の中学に属してゐるんですね。

その天使の名前は佐天涙子、黒髪ロングの正当派美少女で、とつても可愛いんだコレが。あ、口説こうとか考える不届きものは肅清な。オレの重力操作で宇宙までブツ飛ばしてやる。最後は無重力に包まれて死ね。

まあ、でもオレは寛大だから……好きとか可愛いとか思うのは許してやる。でも、邪な感情とか下心は抱いたら瞬間即殺な。

それは置いといて実は今、オレは妹の通う柵川中学校の前に張つてるんだけど……涙子ちゃんぜんぜん出てこねえ……

入学祝いの会でも近くのファミレスで開こうと思つたつてのに……とほほ……

少年の言葉が示す通り、いまの暦は春——四月真っ只中である。春とは言えど、未だ肌寒い事も多く、長く張り込みを続ける少年の手には暖を取る為の缶コーヒーが握られていた、しかしそれも既に冷めている。

そして、中学の前で張り込みを続ける不審な所作の高校生、当然周囲からの視線は痛い。

あれえ？ もしかしてすれ違ひ？ 実はオレ来る前に帰つちやつた？ おつかしいなあ……よし、ちょっと探しとつかん？ 言つてなかつたつけ？ オレの本来の能力は”シスコンガーディアン溺愛主義”。

この都市に居る愛する妹、涙子の居場所から何もかもを瞬時に察知出来る能力、そして——妹の身に危機が迫つた時、妹の事を考えている時、神をも凌駕する身体能力行使出来る異端な力。

「んつふふ、そうかそうか。そこか・・・」

涙子ちゃんハツケーン！　えーと、繁華街を抜けた先、友人の数は一人。

ぐつ、これ邪魔したら嫌われるパターンか・・・？ 友人との時間を邪魔されるつて・・・兄妹仲の拗れる案件第一位の気がするし・・・いやしかし・・・んー・・・

まあ、いい。とりあえず、追い掛けてから考えよう。あ、こらそこ、ストーカーって言うな！ 言うなれば、愛の守護者だバカ野郎！ カーデイガン的存在のガーディアンだ！

さつき説明した通り、オレの能力は重力操作。実はコレってかなり便利なんすよね。敵を地に伏せさせて頭を垂れさせる事も出来れば、今みたいに

「うおっ！」

「えつなに!? 人間口ケツト!?

重力の向きをオレンントコだけ横向きに変えてしまえば、かなりの速度で移動が出来る。理論として言えば、自然落下と同じなんだけど。慣れたらめちゃ便利。

あとほら、つまりさ。

飛べるんだよね、この能力。

重力を上向きに変えるだけ。

そんである程度の高さまで地面から離れたトコで、同じように横向きに変えちゃえば・・・あら不思議、空飛んでる。

まあ、目立つから日中は飛ばないけど、夜はたまゝに飛んでる。科学都市なのに、誰かに見られてたのか、とある本でUMA扱いされていたと知った時は少し笑っちゃった。

さてさて、涙子ちゃんはドコに・・・うわあ、ナンパしてる人いるよ。しかも相手は中学生・・・ロリコンかな？ チヤラチヤラした見た目のドヤンキーのロリコンとか、もう救いようないよコレ。

繁華街を抜けようと飛んで^落_下いる時、少し離れた前方にて一人の少女にベタベタと絡む男達の姿が見えた。

標的にされている少女の纏う制服は、近隣に存在するこの都市有数

の名門女子中学のものだった。

常盤台中学か。てか、あそこは凄い能力持ちしか入れないって聞くし、どう見ても不良の彼らでは勝てないんじゃないかな？

この都市では、落ちこぼれの粗雑な不良よりも、お高くとまつたエリートの方が力が強い。何故なら、能力があるからだ。学園都市と外部の都市とでは、その辺りの力関係が当然ながら逆転している。

「ヒューー、君可愛いね」

「オレらがエスコートしてやろつか？」

そういう訳で助けを入れなくとも大丈夫、そう思つたオレが彼らの近くを通りすぎようとした時、そんな声が聞こえてくる。

「あ・・・あの・・・」

しかし、思つてゐる展開とは違う流れが進んでいる。常盤台の女性なのにおかしいな、そう考えたオレ。

あつ、新入生か！？

この春入学したばかりでは、能力主義の派閥ガチガチのあの恐ろしい女の国に染まつてないのは仕方無い。お嬢様が多い学校だ、男慣れもしていないんだろう、顔を恐怖と戸惑いで真つ赤にしているのが見える。

オレは飲み終えた手元の空き缶を彼らの一人に投げ付けた。

カコーン！ 甲高い音を立てて頭に着弾したのを確認、ナイスコントロール！ ストライイイイイイクツッ！！

「いでツ!? 何しやがるテメエ！」

頭を押さえた男、そして二人、つまり三人組の男がオレの方へと詰め寄ってきた。

えー、コイツらこの見た目で口リコン？ ちょっと、引くぞオレ：：間近で見ると、本当にもう正当な不良、柄悪い。付け狙う相手が女子中学生、しかも一年生だろ？ 引くわあ・・・

「ああ・・・スマン。てつきり、ゴミ箱かと思つちまつたよ」

「んだとコラ!!」

つかつか、ロリコンで中一スキーッてこたあアレだろ？ 涙子ちゃんもストライクゾーンだろコイツら。コレは許されませんぜ。ここ

で肅清して、悪い芽は摘んでおかないと・・・

「テメエ！　ぶつ飛ばし「おい、待て!!」　あ、何だよ？」

一人の男が腕を振りかぶろうとした途端、後ろの一人がオレを指差すのが見えた。んん、ホント何だよ？

「コイツ・・・最強の大能力者だッ!!」

「なッ！」

「しつ、失礼しましたッ!!」

・・・えー、終わりい？

一変した状況と顔を青くした三人はオレの前で何度も頭を下げ、蜘蛛の子を散らすように遠ざかっていく。

その場にオレと少女が取り残された。

「・・・まあ、イイヤ。大丈夫だつたか？」

ガシガシ、毒気を抜かれたオレは頭を搔き乱し、ナンパをされたいた少女に視線を向ける。

「あつ・・・あの・・・はい・・・」

良かつた良かつた、大丈夫だつたらしい。ま、これでトラウマでも残されたら可哀想だもんね。繁華街は本来は物凄い楽しいトコだし。それにしても、顔赤いな。本当に大丈夫か？　つて、やべ。涙子ちゃんにいつもしてゐみたいに撫でちまつた。年齢一緒だし、何かほつとけないなー・・・つか、さつきよりも赤くなつてる？

「・・・ッ!!　あ、あの・・・その、ありがとうござい・・・「ちよつと、アンタ！　白昼堂々とウチのコに手を出すつもり？　イイご身分ねー？」

「・・・げっ!?　御坂・・・」

「げっ!?　とは何よ？　アンタ、私が化け物にでも見えてるワケ？」

この都市でオレ的一番会いたくないランキング堂々の第一位『御坂美琴』

その理由は単純明快、血の氣の多い、猪突猛進の電撃娘だからだ。

喧嘩を売られた回数は数え切れず、その度にドローで切り抜けてきた。何故つて？　勝つても負けても、何か悪いことが起きそうだからだよアホ。

「……」で会つたが百年目！　今日こそ決着つけさせて貰うわよ！」

「百年目もあるか！　まだ一年目だ！　ていうか、こんな娘がいるトコで暴れようとするんなバカ!!」

「バカとは何よ!?　あつたまキタ!!　黒焦げにしてやるんだから!!」

』

不味い、電気鰻より取り扱い難しいんだよこの娘。もうバチバチきてるからね、髪の毛逆立つてるからね、オレの。御坂の手なんて雷パンチ撃てそุดからね。

「……御坂、オレは今日やることあるんだなコレ。てことで……この娘よろしく！　送つてつてやれよ……先輩!!」

忍法変わり身の術。

オレは目にも止まらぬ速度で身体を翻し、少女の背後に回り込んではその両肩を掴み、グイツテ御坂の前へと差し出すように押した。

「……えつ？　……あの……」

まだ困惑しているらしい少女、目まぐるしく変わる状況に付いていけていない。きよろきよろとオレと御坂の方を交互に見て、もじもじと身体を縮めている。

「なつ!?　アンタ逃げる気!?　つーか、何で私が!!」

「その娘、また変な男に絡まれるか分からないからな……護衛だよ護衛。御坂がいりやあ、まともな常人ならノコノコ突つかかっていいだろうし！　そんじゃ、アデュー!!」

「人を魔除けみたいに言うな！　ちよつ、待ちなさいつて!!」

言うやいなや、オレは逃げるよう繁華街の通りを全速力で突き抜ける。超落下！

「……つぶねえ……御坂に絡まれたら一日潰れちまうトコだつた……よし、心機一転！　待つてろ涙子ちゃん！」

通行人にはぶつからないように器用に避けつつ、オレは涙子レーダーの信号を頼りに進んでいく。

そしてぽつんと立ち尽くす二人。

「……それじゃ、行く……？」

「……は、はい……」

ぎこちなく会話をしながらも、少年に言われた通り、常盤台へと二人歩く少女の姿があつた。

繁華街を抜け、人の通りが少なくなつた街道を銃弾のように真つ直ぐに突つ切つていると、オレの目には見慣れた愛しき天使の背中が見えた。

よし、この距離を保てオレ。バレたら危ない。何てつたつて、涙子ちゃんは今楽しそうに隣に歩く女の子と話している。状況をよく観察しろ、お邪魔して良さそうな時に乱入するんだ！

ササツ！ 綺麗に並列するビル群、建物の影へと足早に隠れ、オレは顔だけを恐る恐る出して二人を見る。

あれ？ そういうや・・・あの娘はオレ知らんna？ 涙子ちゃんの友達といいやあ、アケミちゃんにむーちゃんにマコチンちゃんつて三人組だつたよな？ それじや、中学からの、親友ならぬ新友つて奴か。

ん？ ・・・んー？ なーんか、あの娘見たことあるぞ・・・？ あの頭・・・花、フシギバナじやなくて・・・どつかで・・・

何ヵ月か前か？ いやでも、何かホント気持ち悪いくらい喉元まで出かかるのに・・・んー？ あと一步、思い出せんna・・・「初春っ！ 公園にアイスの屋台が来てるらしいよ、行こつ！」

「ええつ!? 佐天さん、寄り道しないで帰るつて言つたじやないですか!？」

うんうん、涙子ちゃんは今日も天真爛漫でイイな。というか、やつぱり見たことがあるんだよなあ・・・あの花頭・・・まつ、思い出せないならソレまでの記憶だな。よし、追い掛けよつと。

手を繋ぎ、というか花頭ちゃんの手首を掴んで強引に連れて走る涙子ちゃん、すかさずオレも後を追つて適切な距離を保ちながら走る。ひそひそ、辺りを歩く通行人がオレを指差し、携帯なども取り出そうとしている人も見える。何だ？ もしかしてチャック下りてる？ いや、そんなことねえよな。うん、ねえな。

周辺の人々の目には、うら若き少女二人を追い掛ける不審な少年として映つており、言うなれば完全なストーカー。

しかも、顔は緩んでいてだらしないし、時折もう一人の髪の短い少女の頭を見て考え込むように眉を潜めているのだから、怪しさ満点である。

少年と二人の少女だけは気付いていない。

「ちよつと・・・アレ見て」

「風紀委員呼ぶか?」

「いや、それより警備員のほうがいいんじゃないの?」

どうやら付近に不審者がいるらしいぞ。何てこつた、学園都市の治安は酷いなオイ。ナンパする口リコンはいるし、誰かは知らんがやばそうな不審者もいるなんて。

「す、すいません! 不審なストーカーらしき人がいるんですが・・・」

どうやら一人は通報までしたらしい。これは本格的にやばいストーカーに違いないな。つたく、涙子ちゃんを標的にでもしてみろ・・・欠片すら残してやらんからな。

「・・・はい、・・・はい・・・繁華街から少し離れた道で・・・」
ほへえ、それってこの近くじゃないか? どれ、涙子ちゃんに仇なす未来の悪の芽を摘んでおこうか。

どこだ? ・・・ん、何で皆こつち見てんの? もしかして、後ろにいるのか? 居ないじyan。それじゃ、横か! 上か! はたまた下か!?

「ひいつ!?

「うわ、こつち見たぞ!」

「は、早く来てください! ストーカーが不審な動きを!!」

まさか、オレには見えない透明人間? そんな能力者がいるとは聞いた事が無いんだけどなあ・・・あれ? 花畠の娘も電話してる? 通報?

「ええー!? ふ、不審人物が近くにいるんですか!? む、無理ですよ!

私、白井さんみたいに出来ません!」

何だ何だ? 涙子ちゃんはワクワクした顔してるけど、刑事ドラマみたいな展開? んー、オレが捕まえてやりてえけど・・・まずその

ストーカーが分からぬからなあ・・・

「うう・・・分かりましたよ・・・私が一番近いんですもんね・・・」
ガツクリ、肩を落として携帯を仕舞う花畠ちゃん。そして、何かを取り出すと腕に巻くのが見える。緑と白の色彩、盾の紋章。

確かに・・・風紀委員の腕章だつけ? 懐かしいな、オレも昔は入るまでしつこく勧誘されたつけ。面倒なんだよな、書類とか、何か訓練的なの。あと仕事。

ん? というか、こっち見てない? あれ、バレた? つか、涙子ちゃんはあちやう・・・つて頭抱えるし。

ストーカー、皆見えてるのか? あ、オレの前まで来た。てか、凄い緊張してない?
ジャッジメント「じゃ、風紀委員です! あなたをストーカー容疑の現行犯として拘束させて貰います!」

んん・・・いま、何つった? というか、容疑の現行犯って何? 現行犯ならそれもう、ストーカーとしてみなしでない?

つか、オレ違うからね? アレか? やっぱりオレの後ろにいたり・・・上に下にも横にも、前にはこの娘がいるし・・・え、オレ?
「お、大人しくして貰えれば・・・手荒にはしませんから・・・私もそつちのほうが嬉しいですし・・・」

いやいや、待つてくださいよ旦那。急に何を言われるかと思えばストーカー? 名誉毀損甚だしいぞコレ。オレはただ単に、マイエンジエルの守護をしてただけで一切つきまといのストーカーなんてした記憶は無いんだが。

「いや、タイム。ちょっと待つてくれないか? これは冤罪だとオレ思うんだ。ストーカーなんてそんな訳無い! オレは涙子ちゃんを見守つてただけだ!!」

「グレーが確実な黒に変わりましたよ! さ、佐天さん! 気を付けてください! この人は佐天さんを狙っているらしいです!!」

涙子ちゃんが苦笑いを浮かべながら、近付いてくる。

何てことを言うんだこの花は、許さん。涙子ちゃんの中のオレの頼りがいのあるナイスなお兄ちゃんイメージが崩れてしまつたら、お前

なんて花としか呼んでやらんからな！

「……あー、えーと……初春……言いにくんだけどさ……一応、その人あたしのお兄ちゃんなんだ……あはは……」

「……えつ!? ほ、本当ですかソレ!?」

本當ですか？ とは何だこの花！ オレが涙子ちゃんの兄じやダメか!? くー、重力使つてその辺の鉢植えにでも沈めて……ごほん、植えてやろうかしら、コラ。

「というかさ……まも兄がなんでここにいるの!? あたし知らないよ!?」

「それはつまり、愛ゆえに！」

「……はあ、まも兄さあ……そろそろ、うつとおしいよ」

「はうつ!?

日本刀より研ぎ澄まされ、切れ味抜群の言葉の斬撃がオレの心を切り裂いた。瞬間、オレの身体は糸の切られた操り人形のように、くたりと一切の力を奪われ道に突っ伏す。

オレもう死ぬ。死ぬ、墓掘つて埋まる。宇宙葬にでもなるのもいいな、そんで惑星になつて涙子ちゃん星を作るんだ……

「あのー、佐天さん? 大丈夫なんでしょうか……アレ……」

「あー……大丈夫大丈夫。まも兄はああでも言わなきや、止まつてくれないからねえ……」

暫く、ずっと突つ伏していると、やがて他の少女の声が聞こえてくる。風紀委員の増援だろうか。何か、聞いたことあるような。

「風紀委員ですの！ 初春、犯人はどこに……あら、これは何ですの？」

「あつ、白井さん。これは……えーと、不審ですけど……ストーカーでは無かつたです」

はは、今なら拘束しても構わないぞ……無期懲役でも何でも甘んじて受け止めてやらあ、アツハツハ

『ちよつ、初春！ あの人知り合い!? 常盤台の制服着てんじやない!!』

『へつ!? ええと、あの人は白井さんと言つて……風紀委員の関係

の人で・・・』

オレも常盤台に入つとけばなあ・・・性別が変えられたらなあ・・・きつと涙子ちゃんに尊敬されるお姉ちゃんになれたんだけどなあ・・・「・・・どうかしたんですの? それよりも、こちらの対処をしませんと」

「あつ! すいません! ほら、まも兄起きて!! 起きたらさつきの無かつたことに対するから!」

「ふつかーつ!! つて、アレ? 白石どうしたこんなトコで?」

一人増えていた少女、オレはそいつに見覚えがある。オレ的一番会いたくない人ランキング第二位『白井黒子』

御坂とツートップを誇る常盤台の悪魔だ。オレはこの二人にイイ思い出が一切無い。恐ろしいほどに無い。

というか、御坂と白井でこのランキング独占できると思う。まだこの二人はタッグを組んでは来ていないが、なんかオレの勘が未来の悪夢を想定させる。

何か、四月の終わりには白井は御坂と行動を共にしてるんじゃないだろうか? まあ、無いか。白井はともかく、御坂はアイツ生糰のぼつちだし。

「わたくしは白井ですの! 全く・・・久しぶりに見ましたわねあなた。てつぎり、どこぞでくたばつたのかと思つていましたわ」

「あれ、白井さんの知り合いでしたか?」

「ええ、あまり知られたく無い知り合いですわ」

「おお奇遇だな? オレもだ」

バチバチ、御坂の電撃とは違う火花がオレと白井の間で弾け、その険悪さを周囲にも分かりやすく現している。いやホント、御坂とコイツは馬が合わない。だつて、二人とも馬と鹿だもん。突つかかる猪馬鹿だもん。

「うわー・・・」

数十秒、みつちりとメンチを切り合つたオレ達、どちらが先かも分からぬほほ同じタイミングでそっぽを向き合う。

「というより初春、あなたもこの男に一度は必ず会つてゐるはずです

わよ・・・？

「え・・・本当ですか白井さん？」

「・・・フシギソウ・・・」

「あっ!! あの時の!!」

うんざりとした様子の白井、いやオレがその顔側だからね? つか、ん? 何て言つた? 何を伝えた? 花畠ちゃん何か思い出したみたいだぞ、指差してきただぞ。

「あの! 郵便局の時です! あの時は助けていただいてありがとうございました!!」

郵便局う? あー、何かそんなことあつたような・・・涙子ちゃんが第七学区の中学に進学するから、オレも第七学区にある校則緩そな高校を下見しに行つたなあ。

そん時、強盗事件が起こつたような・・・フシギソウみたいな女の子が泣いて助けを求めてたつけ? そうそうこんな顔の・・・えつ!? 「進化したのかフシギソウ! あんときや、まだ左の頭にしか生えてなかつたろ? おー、立派にフシギバナになつて・・・」

驚愕だよ驚愕! いまは頭一面花畠だぜ!? 数カ月でこうも茂るか? 花にも成長期があるんだな、きっと。

「あれ? まも兄も初春と知り合いだつたの?」

「ま、色々とあつてな。涙子ちゃんと同じ学区で生活する為にお兄ちゃん頑張つてたのよ一時期。そこら中走り回つてたな」

てか、待てよ・・・? つまり、このフシギバナの花畠のせいでの: 「こんなにやろ! お前のせいでなー! お前のせいでなー! オレは毎日毎日怒れるピカチュウに追い掛け回されることになつてんだぞフシギバナ!! 経験値稼ぎをしようとしてくるんだ!!」

そう。強盗事件には、御坂も控えめに関わつていたのだ。この二人は知らないとは思うが。

あん時ド派手に救出活動したせいで、アイツに目を付けられたんだからな! 八つ当たりだが許せん!

「な、何ですかー!? 良く分からぬですけどごめんなさい! ごめんなさい!」

フシギバナの頭を掴んで、前後にガクガクと揺らし続ける。オレの怒りを知れ！

「まも兄、そんくらいにしといてね？ 初春、目を回してるし」

「当たり前さ、涙子ちゃんの友人を傷付けるわけないだろ？」

ハツハツハ、そうだった。フシギバナはポケモンじやなくて友人だつたな。すまん、ちつと暴れピカチュウの恨みを込めすぎた。

「ううー、佐天さん！」

「はいはい、いい子だねえー初春」

仲良きことは美しきことかな。

てか、白井の視線が痛いんだけど、何？ 聞きたいことでもあるの？ それとも暴言でも考えてんの？ それなら、オレは八百万を超える暴言のマシンガンで返してやるからな。

「あちらがあなたがうざつたいほど良く話題にする妹の方ですか？ ・・・あなたとは似なくて良かつたですわね」

「まあな。でも、オレの妹は・・・白井みたいな高慢ちきの性格にもならなくて良かつたと思うわ、ホント。反面教師つてか反面教授とかだよな、お前。世の中の小学生、人格の形成中の全人のお手本になつて欲しいぜ。あ、勿論反面の」

いやー、もうホントね。オレ、コイツのせいでツインテール嫌いになつてきてるからねマジ。世の女子全てのツインテール、リボンを外して天使の黒髪ロングに統一したいレベル6。

あ、このレベル6つてのは、最大級に統一したいという気持ちを表す言葉な。

「・・・あら、おかしいですわね。わたくし、猿が日本語を話してるのが見えますわ。疲れているんでしようか？」

「ああ、おかしいな？ 今日の天氣は学園都市全域が雲一つ無い快晴つて聞いたけど・・・樹形図の設計者もミスをするらしい。赤い雨が降るぞ、この場所だけ」

ゴゴゴゴ、暴風雨を幻視するのは二人の近くにいた少女達、目をクシクシと擦り、また見つめはグリグリと強めに擦つている。

「う、初春・・・あれ、どうなると思う？」

「あわわわわ・・・わ、分かりません」

そして二人はぶつかり合い、学園都市の一部を全壊させる激戦へと
変わり、そのバトルは三日三晩休憩無しで続いた。いや

「あなた達、何をしているの？」

真っ赤な嘘だ、そんなに激戦は続かない。

「ど、どうしてここのおらつしやるのでしようか・・・？」

「こ、固法さん・・・？」

背後には眼鏡を掛けた女性がいた。猛烈な重圧を感じる、ああ、ダメぞコレ・・・

敢えなく、オレと白井は開戦前に終戦を遂げた。世界一短い喧嘩
は、第三者の介入で終わつたのだ。

「あー……最悪だ。今日と言う日はオレが涙子ちゃんに出会えた日の
中で、一番ハッピーじゃない日に認定しよう……」

「あなたのせいで散々な目に合いましたの。これからはもう、わたく
しの目の前には現れないと助かりますわ」

いまオレが出てきたのは風紀委員の数ある支部の内の一つである
第一七七支部つてトコだ。フシギバナもこの所属らしい。

というかマジで酷い目に遭った、因みに突然声を掛けてきたのは風
紀委員である固法美偉さんな。

あの後は大変だった。凄い怖い顔で詰め寄つてくるんだぜ？ そ
のまま連行されるわ、何時間も拘束されるわ、おまけにそこには説教
プラスコースだつたし……涙子ちゃんは無関係だからつてすぐ帰宅
させられてたけど。

フシギバナもいつの間にか帰つてるし、夕暮れてきてるし、そのせ
いで白井と二人きりだし、踏んだり蹴つたりどころか、刺されて撃た
れて焼かれてるだろコレ、火葬までしつかり入つてるだろコレ。

てかに、何でこの道は一本道なの？ 凄い気まずいんだけど、漏
らした後のバスの雰囲気くらいには気まずいんだけど？ ……あ、良
かつたあ。T字路キタ、これで終演だな。

「それでは、わたくしはこちらから帰りますので。ついてこないでく
ださいまし」

うわあ、最後まで可愛くねえヤツ。ま、好都合なことにこつからの
オレの最短帰宅ルートと白井は真逆だし、これ以上何か言わわれはしな
いだろ。帰ろ帰ろ。

あー、空が暗くなつてる。だけどオレの心は青空さ。何たつて、あ
の性悪ツインテールから解放されたんだからな。

「すいませーん。いま工事中でーす。あちらの方からご帰宅願えます
か？」

・・・・・

え、嘘だろ？ え、何その運？ 今日の占い最下位？ いや、むし

ろ逆に強運すぎるだろ・・・つか、この道封鎖されてたら向こうの道しか使えないじやん、白井の背中見えてるし絶対無理なんだけど？

アイツの事だから「ストーカーですの？」拘束して二度とシャバには出てこれないようにしてあげますわ。二度と」とか言うよアイツ。シャバとか絶対お嬢様に似合わないヤバいこと言うよアイツは。

・・・能力使うか？でも、わざわざ空飛んでまで帰ろうとするほどの気力が今は無いんだよなあ・・・

・・・はあ・・・決めた、向こうから帰ろう。距離さえ取つとけば、どうにかなるだろ多分。

にしても、アイツは歩く姿すら憎らしく可愛くないな。白井黒子じゃなくて、黒井腹黒子に改名した方がイイんじゃない？

ほら、ツインテールが毒蛇みたいに揺れてるし、オレがスリザリンで蛇語でも喋れたら、『ここから去れ！』とか伝えてやりたいぜ。ていうかさ、話変わるけど学園都市つて口リコン率高いの？女子中学生ナンパしてる不良多くないか？あんなザ・ヤンキーみたいな見た目しといて、幼い女好きが多いよな。涙子ちゃんの暮らす都市としては最悪だ。

後さ、第七学区に住んで分かつたんだけど、特に常盤台中学は狙われすぎだとオレ思う。あの御坂すらナンパされてたからね？命知らずもあそこまで行くと、尊敬もんだよホント。

ん？何で急にこんな話をしたかって？いやほら

「なあなあ、お嬢ちゃん。俺らとこれからお茶でもしなーい？」

アイツも例に漏れず絡まれてるし。趣味悪すぎんだろうヤツら。

まあ、狙われるのも分からなくは無いけどな。いや、ルックスとかじやなくて・・・風紀委員としてああいった男を取り締まってるから、逆恨みを多数から受けててもおかしくはないってコト。

風紀委員狩りとか、前起きてる地区もあつたしな。憂き晴らしもそこまで行くとダサいぜマジ。でも、あれはそれ関係無さそうだな。「邪魔ですの。汚い手で触れようとしないでくれます？」類人猿、いえ・・・あなた方は猿すら冠するに値しませんわね

言葉のナイフ、口撃えげつないなアイツ。煽りスキル極めすぎだ

ろ、煽りレベル6だろ。あーあ、やつぱ怒らせたし。このまま素通り出来ないかな？ この道少し狭いんだよ。通つたらバレそうなんだよ。

「このアマ！ ちつとばかし可愛いからつて、調子に乗つてんじやねえぞ！」

「ブツ飛ばした後に犯してやるよ！」

ひーふーみー・・・六人か、一人のナンパに六人とか総力戦極めるな。

てか、柄悪すぎない？ 看過できないこと言つてるよアイツら。お、だけど弱い。もう三人くたばつてるし。

「暴行未遂の現行犯で拘束しますの。大人しくするようにお願いしますわ」

瞬間移動つてチートだよな。あの、チョークみたいな矢？ 服に力カンツ、て拘束するヤツ、あれ少しでもミスつたら体内入つて激痛やばそう。流石は常盤台つて手際か。

「くつそ！ ・・・ テメエ！ うぎやつ！」

あれよあれよとあと二人、オイオイ・・・悔しいからつて刃物は駄目だろ？ しかも背後から、それは見過ごせないよな。ほら、伏せとけアホ。アスファルトの一部にしてやろうか。

うわ、白井がひでえ顔で見てきやがる。手間が省けて良かつたら、全く。

「・・・手伝えなんて一言も言つてませんわ。礼を言う気なんてありますせんから」

「別に、んなこたあ求めてねえし。ルール違反だから気に食わなかつた、それだけ」

「イデゴデゴデゴデゴデツ!!」

あ、悪い。やり過ぎた。地球人は重力五倍くらいでもツラいよな。サイヤ人は三百倍くらいで訓練してつから、気付かなかつた。

「んじゃ、他の奴らが来るまで頑張れ。オレは足早に帰宅して、あつたかい家であつたかいご飯と風呂と布団に入るから」

呼び止められることも無く、オレはスタスタと現場を通り過ぎて自

宅の寮へと歩いていく。

にしても、学園都市の治安はどうにかならないモンかね？ 人間だけじゃ犯罪の対処が間に合わないし、ロボット兵とかもつと実用するやイイのに。

でも、暴れ出したら困るな・・・高度すぎるロボットが人間に反抗する可能性も有るし、よし、やっぱ今の無し。

あ、また強引なナンパ。犬も歩けばナンパに当たるかよ。片手間に対処、全員地面を布団に眠らせてやつた。この間、實に一秒未満。そいつらの方からメキメキ、ミシミシと音が聞こえる。

「・・・!? ・・・ツ！」

被害者だった少女は何がどうなったのか分からず、辺りを見渡した後にその場から逃げるよう走り出した。

そういうや、涙子ちゃんはナンパされないよな。可愛くないってコトか？ だとしたら、ヤンキー滅ぼす。いや、ナンパされても困るけど・・・オレが見守つてる日は全くそんなコト無かつたし。逆に不自然。あんな可愛いのに。

「今日、向こうのスーパーはセールだつたらしいよ」

「えつ、 そななの？ まだやつてる？」

「ううん、もう終わつてるよ」

あれ・・・そういう、最近買い物したつけ・・・？ 寄つてくか・・・近くのスーパーって言えばあそこだよな。はー、面倒。弁当で済ませるか？ 惣菜とか残つてればイイけど・・・あれ、あのツンツン頭は・・・

「はあ・・・不幸だ。なんで、毎度毎度財布を落とすんですかね・・・」

「

うお、負のオーラ全開かよ。仕方無い・・・同級のよしみとして、話くらいは聞いておこうか。

「よつ、上条。今日も何かあつたのか？ 例えば・・・そう、財布を落としたとか」

「・・・ああ、佐天か？ いや実はですね・・・つて何でソレを!?」

「いや、声に出てたから」

このウニとも言えるツンツン頭の負のオーラ全開、そんな優男の名前は上条当麻。様々なトラブルに巻き込まれる主人公体质、そして無自覚モテ男だ。

「財布の一つや二つ、落としたって人生は変わらねえよ。ただ、かなり・・・かなり不便になるってだけで

「それは困るだろ!?」 というか、一つや一つどころか・・・余裕で二桁入つてんだ・・・」

そうとも言う。というか、そんなに紛失する不幸体质なら、財布を持ち歩くのを止めるべきだな。うん。代替案は思い付かんが。

「しかし今日のお前は不吉じゃないぜ。何たつて、オレと出会つたらかな。流石に放置も夢見が悪くなりそうだし・・・奢つてやるよ、弁当」

「ほ、ほ、本当にせうか!? 佐天！ お前が女神だつたんだな！ 助かるぜ！」

「女じやねえけどな。ほれ、行くぞ。オレは早く帰りてえ」

こういう奴にやあ、恩を売つとくのがベスト。好感が持てる男だしな。オレの知り合いに、コイツ好きなヤツ居るし・・・

「佐天！ 本当ありがとな！」

でもま、それ抜きにしても感謝されるのは悪くないな。さてと何を食おう？ カツ丼、焼き肉弁当、天丼。今考えたらオレ、米炊くの忘れてたからね。何の弁当、買つてこうか？



その頃、白井黒子は

「去り際まで頭に来る男ですね・・・ですけど、腐り切つてはいないのが・・・評価に困りますの、まつたく・・・」

六人の男を拘束しつつ、顎先に指を添えて考え込んでいた。

「うへへへむ・・・」

その悩み、いつまで続くのだろう。

白井の頭からは蒸気が出ていた。

オレの学校つて当然ながら第七学区にあるんだけどさ、常盤台みたいな名門と違つて極一般的平々凡々なんだよね。

この学園都市、異能力を開発する街とは言つても、学生の半数以上は無能力者なんだ。レベル3以上となるとその数は格段に少ないんですよ。

そういうわけでココみたいな普通の学校には、実用レベルに値する能力持ちの人間つてかなり希少でさあ・・・名門校以外の学校つて、ほぼほぼ外部と変わらないんすよねえ・・・常識人ばっかだし。

というか、もし強めの能力者が間違つて入学したとか、在学中に実用レベルまで強度を上げちやつたとしても、そいつは他のもつとカリキュラムの優れた学校へと転校させられるつてのが普通。

そんなわけで、この学校は落ちこぼれとか無関係な外野がほざく時もあるが、オレにとつては一番心地イイ。

いや・・・本当に緩くてこの学校、入学したばつかだけどもう好きやねん。この都市の名門校は堅苦しくていけないね。つか、学校なのに騒がしくないとか有り得なくない？

生徒の人間性は上に行けば行くほど酷くなるし、皆自尊心高すぎ。プライド高すぎ、いつか虎になるぞアイツら。

説明聞けば能力開発能力開発、もう学校じゃなくて実験施設だつづーの・・・これはオレにご執心の長点上機のコトね。

いやほら、自慢に聞こえるかもだけどオレつて一応エリートじやん？ 中学ん時は、勧誘と言うか高校側からモノすげえ数のパンフレットが来るわけ。しかも、ガチの名門からは任意という名の強制的な学園案内に拉致されんだよ拉致、今更ながら警備員に通報しようかしら、ゴラ。

情報情報は殆ど非公開だしあつこ。生徒すら機密扱いかよバカ。モルモットにされそうで拒否しまくりましたよ。能力全開ボイコットしたのはオレの記憶に新しいな。あの頃は若かつた。一年経つてないけど。

でも、一番の理由は学区の違いね。涙子ちゃんに気軽に愛に行けないじやん？ あ？” 字が違う？ 会いより愛だよマジ。

てかね、言つとくと十八学区つて怖いの。整然としてるというか、何か作り物のプラスチックの街みたいな？ 生活感が皆無でねえ…：学校は名門ばっかだけど、オレに言わせりや大人の贅沢な玩具箱だよあそこは…はあ、忌々しい。学園都市の闇は深いからな。オレだって昔、研究所を転々とさせられてたし。

まあ、んな関係無いこたあその辺に置いといて。そんなこんなで頑張つて頑張りまくつて、特例でこの高校に入るのが許されたつてコトだ、以上。

「そんなんずーっと窓の外なんか見て、どうしたんだにやー？」

「…ああ、いや…ゆとりがあるつて素晴らしいなー…つて

」

おつと、いつの間にかH Rが終わつてたらしい。ちっこい先生も居なくなつてる。てか、今日もグラサン決まつてるなこの男。つか、口調も特徴的だしキヤラ立ち過ぎだわ。絶対、ただの一般人じやないつてコイツ。

何たつて苗字が土御門、下の名前は元春。これはどう考へても脇役では無いだろ？ ほら、陰陽師とかでそんな名前無かつた？

ま、冗談だけど…だつてそんなん有り得ないもんなく。

「何を言つてるんだにやー。まもりんは、変な男だぜい」

「…はあ、その呼び方変えてくれよ。何か、女みたいじやん。まもるんにしようぜ」

何だよまもりんつて、どつかの漫画のヒロインに居そだなオイ。てか、この男は変なあだ名をつけすぎ。上条はカミやんだし、いつたいそのヤンはどつから来たんだよ。元春略して元やんつて呼んでやろうか、あん？

「まもるんよりまもりんの方が言いやすいからにやー。一文字しか変わらないことなんだから、多目に見るぜよ」

「まあ、言つても変わらないとは思つてたし、別にイイんだけどさー。釈然としないよな。青髪ピアスよりはマシだけど」

土御門の一部を取つてミカちゃんと呼ぶか……うん、やつぱやめとこ。オレの心の中だけでそう呼ぶことにしよう。

「ん？ 何や、ボクのこと話してるん？」

にしても、青ピコイツも絶対強キヤラだよな。糸目とサングラスキヤラは、モブとは一線を画す存在つて相場で決まつとるし。あとは目のクマが濃いとかも強キヤラの証。ん？ 何かそんな人どつかにいたような……

「ねえねえ何話してるん？ ボクの好みの女の子のことなら幾らでも話すでえ？ 義姉義妹義母義娘双子未亡人センパ——むぐつ!?」
だーつてろ！ 何なん？ 放課後でもない教室でお前のそんな性癖とか嗜好を聞きたくないからな？ いや、妹属性はイイものだけどね。実妹も義妹も、兄貴なら可愛がるのが当然さ。
・・・まあ、つつても恐れ多くも涙子ちゃんに邪な感情なぞオレは抱きはしないけどね。

ほら、ミロのヴィーナスしかり、ギリシャの古代彫刻、芸術である女像なんかには性欲湧かないだろ？ それと一緒に。

「まもりん、ソレ大丈夫ぜよ？ 青ピのやつ白目向いて泡吹いちやつてるにやー」

「・・・ハッ!? 大丈夫か！ 傷は浅いぞ!!」

「あかん・・・あかんて・・・」

やつてしまつた、忘れてた。涙子ちゃんのコト考えると駄目だな。てかホント大丈夫か？ うわあ、どこその猫型ロボットみたいな顔色になつてるけど……

「ボクあ・・・女の子の暴力ならバッチコイなんよ・・・でも、男のは無理や・・・まもりんがそういう趣味だとしたら・・・ごぶつ!!」

あーらら、間違えて机の角に青ピの頭をぶつけてしまつた。それも三度。まあ、二度あることは三度あるつて言うし・・・おつとと、もう一発やつちまつたぜ。

四度目だとなんつーんだろう？ でも、四度あることも五度はあるんじゃないかな？ うん、二度あることは三度あるなら・・・五度でも六度でも同じ理論で大丈夫だろ。

「あはんっ！　あふんっ！」

「…その辺でやめておいた方がいいぜよ。周りの目が痛いにやー…：流石のオレも公開プレイは守備範囲外ですたい」

え？　うわ、ドン引いた目線とか久々に味わった…あ、昨日もドン引かれてたつけ？　ま、いいか。悪い悪い。青ピ、お前はもう自分の席に座つとけ。そろそろ一時間目だぞ。ほら、な？

「あふんっ！」

「椅子に向かつてダンクショートなんて…・まもりんは恐ろしいぜよ…」

「…あれ？　そういうや上条は？」

そう言えば何か足りないな。ウニ頭の上条クンが居ないぞ？ んー、何かあつたのか？

確かに…朝に見たときは水道管の故障か何かで、道にいる人の中で唯一アイツが水にぶつかかって…びしょ濡れになつてたくらいだしな、分からん。遅刻の理由はいつたい何だ？　皆目見当がつかないぞ？

「…はあ、…不幸だ」

とか言つてるうちに来たな、上条。学ランびしょ濡れ、ツンツン頭も心なしか元気が無いな。てつきり家で着替えてきたのかと思つたのに。

あつ、あと本日最初のワン不幸だ入りました。トゥー不幸だはこの後すぐ、お楽しみに。

え？　何で分かるかつて？　そりや、考えてみろよ。上条の不幸体质、濡れた服、入り口前に転がつている誰かのシャーペン、そして近くに一人の女子。奥さん、こんなん火を見るより明らかですって。「お、噂をすれば…どうかしたのか、カミyan？　プールにでも入つてきただにやー？」

「それがだな、聞いてく…うおつ！」

ほらな？　見事な前のめり、あれは転ぶと言う行為のお手本になるぜ。そしてその目的地は、クツシヨン代わりとなる胸。うん、グツバイ上条。骨は拾つてやる。

「・・・ん、なんでせうか？ この柔らかな感触は・・・？」

「上条・・・貴様あ・・・!!」

「ふ、吹寄・・・？ これはですね・・・不幸だーーっ!!」

「すげえ音が聞こえるけど、あれ大丈夫？ 上条は死ぬんじやないか？ あんな見事な右ストレート初めて見たぞオレ。あーあー、ラツキースケベつてのもイイコトばつかじやないんだな。

「土御門、一時間目つて何だつけ？」

「今ソレ聞くか？ ・・・ 数学ぜよ」

さて、授業の準備準備。オレは関係無いしな。わざわざ數をつついて蛇を出すのもアホらしい。つか、數からリヴィアイアサンだもんアレ。触らぬ神に祟りなし。くわばらくわばら。

あー、今日もイイ感じの涙子ちゃん観察日和だなあ、実際に清々しい。

え？ 学校はどうなつたか？ もう終わつたよ、今は放課後。上条の顔が今日一日中愉快だつたぜ。思い出すだけで笑いそう。そりやあんな殴られたら腫れるわな、ドントマインド。

だから今は一人で歩いてるわけですが、先に行くところが一つあるんですね。それはどこかと言いますと……ここ！ コンビイイイイニ！

なんでコンビニ？ そう思つた人もいるだろう、しかし、これには理由がある。見ろ！ この棚を！ 缶コーヒーがたんまりあるだろう？

「うわっ！ なんだアイツ！」

「みるみるうちに棚のコーヒーが消えていくわ！」

「10・・・20・・・なに・・・!? まだ上がるのか・・・!?」

うげ、すげえ重いカゴ。塵も積もれば山となるとは良く言つたもんだな・・・エベレスト級になつたぞコレ。

まあいい、お目当ての商品は確保したからな。見よ、このすっからかんなブラックコーヒーのコーナー！ 達成感！

「ふつふくん・・・♪」

目的達成。簡単すぎて鼻唄まで口ずさんじまつたぜ。後はレジに行つて、一本持つたら他の家に保管。

そして涙子ちゃんの中学の前で、張り込むつて言う完璧なスケジュール運び。

「・・・うわ、何だよ・・・コーヒー買いすぎだろ・・・コーヒー馬鹿かよ・・・」

なんか聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ、あくん？ 思うのは構わねえが、口に出すとは許せんなあ？ あん？ ほら、オレの方見てもつかい言つてみろよ？

「ひつ！ ・・・」ちら42点で5166円になります・・・」

おつと、大人げなかつたか。平静で冷静、クールになれ佐天眞守！
ふう、ふう・・・よしつ！ オーケー。

・・・というかさ、毎日毎日出費が重なるなあ。まあ、こう見えて
お金はたんまりと支給されるんで、全然困ってはないんだけど。

つーか、この程度じや口座の貯金は増えてくだけなんだよな。
いつそマンションでも建物ごと買うか？ 涙子ちゃんとオレの家。
ぐへへ・・・悪くねえ。

「・・・ありがとうございましたー・・・」

ふう、毎度思うんだけど重力つて便利。重いはずの袋も軽い軽い。
ティッシュ一枚と同じくらいの重き。つまり、ほぼ持つてないと同じ
だな。

さてさて、どうしてオレがこんなに買ったか分かるか？ オレの好
物？ ノンノン。ブラックコーヒーは強いて言うなら苦手だ。舌が
ボルボルするからな。

その理由は・・・ほれ、今に分かるよ。あそこに頭がブツ飛んでそ
うな白髪頭がいるだろ？ ほら、今コンビニ入つてつたね。数秒でも
待つててごらん、そしたらやがて

「何でいつも行く先々で無いんですかねエッ!! テメエ、ンな舐め
た仕入れしてンのは俺に喧嘩売つてるつてコトだよなア!! あア!!!?め

」

コンビニのガラスが割れ、怒号と共に世にも恐ろしいコトが世に恐
ろしい顔したヤツによつて起きるから。

あー、怖いね怖い。最近の若者はカルシウムが足りてねえ。だか
ら、あんなモヤシになつちまうんだろうな。コーヒーより牛乳飲めよ
マジ。アイツがホントのコーヒーマ鹿だわ。

「なになに？」

「誰か暴れてるらしいよ」

「えー、こわーい！」

「昨日もどこかで強盗なかつたつけ？」

状況が状況とは言え、命知らずの野次馬集合。ま、オレが居る限り
は被害を出すつもりは無いし・・・流石のクソツタレの第一位サマも

公共の場で殺人はしないだろう。多分。

というか、いつも無いの分かつてゐるなら来る時間変えるか、他のコンビニ使えよなあ。まあ、でもこれで何件目だつけ？ オレが意図的に邪魔してつからキレるのも仕方無いか。

昨日のコンビニも、その前も。強いては自販機までアイツがコーヒー補給で使うやつを事前に調べ倒し、先回りして買い占めてるし。そのせいでオレの家はコーヒーの城みたいになつてるけどな。まあ、ボルボルするのを我慢して飲むし……先生や友達に差し入れするし、一切捨てては無いからね？

「フザけてンじゃねエぞゴラアア!!」

やべえ、そこら中に商品がブツ飛んでる。ガラスの破片は誰にも当たらないようにしてるけど、人が増えると負担も増えるからちょっと疲れちゃうよオレ。

「……ちつ、つたく……シラける真似しやがつて、命乞いのひとつもせずに任務を全うする人形がいるつてエのによオ」

・・・やーつと終わつたか？ はあ、良かつた良かつた。よし、今日もノルマの嫌がらせコーヒー作戦大成功。悪いね、学園都市中のコーヒー売る店で働く善良な店員さん。

とある時期までの辛抱なんで、それまでアイツの被害を受けててください。オレはオレで早めにうんたらかんたら、あるコトをスピード解決させられるよう努力してるんでね。

「ほン・・・あー、つまんねエ」

ほら、はよいけいけ。そのまま最果てにでも行つて二度と学園都市から出てけってんだ。つたく。

さて・・・居なくなつたし、涙子ちゃんに会いに行こう。癒しが欲しくなるね、やっぱり。

ああいうヤバい奴を見た後は・・・キュートで天使の、和みます涙子ちゃんウォッキングに限りますわ。

あつはつは。

コーヒー片手に全力落下、人の目線は気にしない。まずは寮に帰つてコレ置いて、そこで涙子ちゃんの中学にゴートウーヘブン。

「あれが噂の人間口ケツトか!?」

「写真撮つとこつと！」

何その見世物、オレはいつの間に有名スポット的扱いになつてゐるんだ？ やめて、肖像権の侵害だ！ いや、気にしないけどさあ・・・「うおっ!? 何だ!? って、・・・佐天か。どうしたんだ？ そんな急いで」

「それは勿論、
愛ゆえに！」

少しもすれば寮に着き、歩いている上条の横を通り抜ける。オレの部屋はコイツの部屋の二つ隣。そして、部屋に入ってしまえばコーヒーのたんまり入った袋を机上、中から一本拝借してそれを片手に猛烈落下！ 部屋のドアが壊れそう？ そんなん知るか！

そんなこんなで柵川中学の校門に到着、帰宅中の生徒の姿がほつほつと見えるな。ん？ てか、少なくない？

・・・あつ、かなり時間過ぎてる!? くつ、許さんぞ白モヤシ。

の恨み、いずれ晴らす！

「不審者」

「ちよつとそこの君。来て貰おうか」

「オレは愛のガーディアン！」不審から最も遠い位置に存在する、誠

実な守護者！ 例え銃弾の雨、核、地球を壊す巨大隕石からも夕々守り続ける愛の守護者なり！」

バーン！

キマつた。完璧だ。ボーリズも何もかも完璧！
これは先生の心にも刺さつたろう。どれどれ？

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

あれ？ ちょっと視線ヤバない？ その目、ゴキブリ見る目だよ？

人間を見る目じゃないよ？ 人に向けていい目じゃないよ？

「……これは、警備員を呼んだ方がいいな……先生達ではどうにもならないだろう」

だーーーーっ!! 違うつちゅーに！ もう駄目だ、あの目は話合いを放棄した者の目だ！ オレが何を言つても変わらん！ ここは戦略的撤退をするしか……ん？

「あれ、佐天さんの……」

コイツは、フシギバナじやんかよ。コレは好都合。普通なら涙子ちゃんじやねえじやん！ つて一蹴したトコだけど、今の状況なら別だ。さあ、オレの冤罪を示せ、示したまえ！

「……何だ、君の知り合いか？ ……その、生徒の友人関係に口を挟むのは無粋だとは思うが……何と言うか……控えた方がいいと思うぞ？」

「……はい、すみません……」

何だよ、反論どころか言いくるめられてないか？ 謝罪してるよオイ。もうさあ、仮のオレもムカつくぞコラ。

愛の守護者を変態の不審者扱いとか……月とすっぽんより格差あるだろ。涙子ちゃんと御坂＆白井レベル。勿論、涙子ちゃんが太陽で後者はミジンコな。

って、誰がミジンコだゴラー!! オレは愛の守護者じゃー!!

「……はい……はい、すみません。私の方で対処しておきますから……」

「……ああ、分かつた。宜しく頼んだよ」

話し合いは取り敢えず一件落着を迎えたらしい？ フシギバナが残つて、他に残るのは多少の帰宅中の生徒の日線くらいだ。何だよ、オレは不審者じやねーぞ。

「ふう……それで、佐天さんのお兄さんが、こんな所でどうしたんですか？」

「はあ、お前なあ……佐天さんのお兄さんがこんなトコでどうしたんですかって、逆にどうしたんだと思う？ そんなの単純明快で簡単に分かるこつたる？」

愚問だな、愚問。これで風紀委員が務まるのか？ 察しが悪いぜ。
オレなんて、もうお前の状態を分かつてのによ。

「大体は分かるんですけど……あんまり、分かりたくないですね」

「よし、そこに直れ。肃正してやる」

「あうー！ やめてくださいいー！」

その花全部引っこ抜いて更地にしてやつてもいいんだぞコラ。オ
ラオラ食らえ、妹大好神拳の奥義の一つ——のうてんボコげきあく脳天凹撃握！

「ちよつ、あそこ……」

「DV？ 痴情のもつれ？」

「あれが亭主闐白なのね……」

外野の言葉は無視無視、相手にするだけ無駄だ。あ、でも流石に校
門前でこの学校の生徒の頭にアイアンクローラをキメてるのはオレの
名誉に傷がつくなあ。しゃーない離したる。

「……うう、ひどい目に合いました……」

「さて、本題に移ろう。涙子ちゃんはドコだ？」

「ん？ 何でわざわざ聞くかって？ 能力を使えば丸分かりなのに
？ アホ、君はアホかね？ あの能力は、よほどでも無いよほどの事が無い限り使わ
ない。涙子ちゃんレーダーは封印してるんだよ。

理由はこれまた単純明快。前に話したら「うげ……あたし、超能
力者つて何でもカツコいいのかと思つてたけど……まも兄のソレは
流石に気持ち悪い」つて……明確な不快感アリティを表してたんだよ。
アレ、オレノトラウマ。オレのパーソナルリアリティ自分が大分乱されました
よ、ええ。

「佐天さんならずいぶん前に帰りましたよ？ もうそろそろ寮に着い
てる時間なんじゃないですか？」

「くつ……不覚！ 付いて来いバナード！ どうせ風紀委員は非番の
日だろ？」

「ど、どうしてそれを？ というよりも私が付いていく意味あるんで
すか！」

「付いていく意味？ 意味が無けりや連れてくなんて提案しねえよ。
だつてほら

「お前が居れば、バレた時も安心。何てつたって、涙子ちゃんのオ・ト・モ・ダ・チだもんない？」

クツクツク、共犯者に仕立てあげれば、昨日みたいなコトにやならんだろう。それに「あ、初春と遊んでたんだ？ あたしも混ぜてつ！」

「みたいな展開もあるね、きっと。

やはり、学園都市有数の能力者であるオレの脳は……天才だ。自分が恐ろしい。

「さあ、行くぞ！ 思い立ったが吉日、明日やることは今日やる！ いつやるかは今でしょ、行動は早い方がいいんだ！」

「ちよつ、ちよつと待つてくださいーい！！ きやああああ！！ 誰かく！！」

初心者には刺激が強いんだよな、この落下。まあ、普通は慣れないモンだから仕方無いけど……オレが誘拐犯みたいになつてるから、静かにしてくんねえかね。
……やれやれ。

涙子ちゃんレーダー、発動!!

まあまあ、みなまで言わないでも分かるさ。よほどの事が無い限り使わない、そう言つたよ。何開幕から使つてんの？ そう言いたいんだろ？

逆に考えろ、今がよほどの事なんだ!!

むしろ、これは誤差だから殆ど使つてないようなもんだし、もんだし。まもるくん皆が何言つてるかワカンナイ。

さて、そんなわけで涙子ちゃんが居る位置、周りの生体反応、動悸や呼吸の乱れを調べた結果、一つの事が分かつた：涙子ちゃん誰ゴミ糞屑野郎かに絡まれてんだけど！ だけど！ ガチでよほどの事だつたんだけど！

昔つから好奇心は強いもんなー、路地裏の探検とかしててもおかしくないよなあ～・・・・・ああ、キレちまつた。ドコのどいつだ？もし涙子ちゃんの心にトラウマを植え付け、好奇心とかその他諸々を無くしてくれたら・・・テメエ、塵の欠片どころか一邊も残さず消してヤル。

「何がどうしたんですか!? 何でまた早くなるんですか～!?」

「ちょっと黙つてて！ 舌噛むから！ ホント、噛んじやうから静かにしてて!!」

あと数百メートル、百メートル、五十メートル、あん？ 一人反応が増えた・・・つて、コレは・・・

「風紀委員です。恫喝、及び暴行未遂の現行犯で拘束しますの」「あっ！ き、昨日の!!」

「チツ、風紀委員？ こんなガキに何が出来るつてんだ？」

やつぱりな、白井か。まあ、コレに関しては、通報した有識ある善人・・・あと白井にもナイスと誉めてやる。

「なつ!? がつ!?」

オレも直々にアイツらをこてんぱんのこてんぱんの灰塵にしてやらあ・・・じやなくて、助けに行くとしますか！

「はあはあ・・・うう、どうして私だけこんな目に・・・あれは白井さんには佐天さん!? つて、どうしたんですか!?」

「ドゥシたもこウしたもアルかア? ドコからドウ見てモ、オレは助太刀二入ルだけダろうガ?」

何言つてんだこのフシギバナ。バナードはもっと賢かつたぞ。てかナニ、ナンで止めるの? 袖摑むのやめて。

「いやいやどう考えてもそれだけじゃ済みませんよね!? 口調おかしくなつてますし、血走つた危険人物の目をしてますから!?」

「いやいや大丈夫だつテ、ちよツト重力ノ渦に巻いテ身体を圧縮圧縮、ミクロン単位マで縮めるダけだかラ。塵くらイは残スようニまもるクン心掛けるカラ」

「それ安心できる要素ありませんよ!!」

うるせえ、行こう! オレは涙子ちゃんを颯爽と助けるんやー!! あれ、良く見たらもう終わつてる!?

ウツソ・・・アイツら弱すぎ問題発生・・・? オレの引き立て役のジャンプ台にすらなれないのかよ! 涙子ちゃんの好感度のK点突破出来ないじyan! 着地失敗どころじやないよ!

「これで終わりですの。大丈夫ですか?」

「・・・かつこいいー・・・はつ! あつ、はい!! 大丈夫です!!」
嘘だるおお・・・オレ出るタイミング逃しちやつたじyan。路地裏覗くだけの存在になつてるじyan。最早不審者じyan。

あと何か白井の好感度だけ鰻登りしてないか? 涙子ちゃんの目えキラキラしてるよ? かつこいいとかオレが言われたの随分前だよ! おのれ白井・・・キサマがK点突破しやがつたなーー!! 「あ、無事に終わつたみたいですね・・・良かつたあ・・・」

「どの辺が良かつたんだ? オレの目にはタチ悪い悪人がまゝだ涙子ちゃんに絡んでるようになつてしか見えねえぞ? あん? あ”? やつぱその花畠更地にしてやろうか? 生態系ガタガタに変えたろか? 先駆植物一個も生えてこないくらいに、まつ更のガタガタにしてやろうかあ?」

「ひつ!? いだだだだ!!」

グリグリ。そんな悪いコトを言う女の子は修正が必要だぜ、つたくよお。

あー、涙子ちゃんは白井に詰め寄ってるし、手を掴んでブンブン振り回してるし、やっぱ天使だけどさあ・・・！ こうさあ！ ねえ？ 分かるでしょ？ オレの気持ちい！！

「す、凄いかっこ良かつたです!! こう、ぱーってしゅんつて！ 白井さんつて呼んでいいですか？！」

「え、ええ・・・勿論、大丈夫ですわよ？」

あーうー!! あー!! あーいーうーえーおー!! カーキーーーろーこーぶつ飛ばすー!! 何ちょうど、ぐいぐい来すぎて対処困るみたいな顔してんの!? 代われ！ 場所代われバカ!!

「いだだだだだだ!!! 痛いです!! 頭が割れちゃいますから!!!」

くそつ、乱入しようにもやっぱりタイミングが無い。あの状態の涙子ちゃんの邪魔をしたら本気で口を利用してくれなくなる可能性もあるし・・・八方塞がりとはこのコトか!!

どうすればいい？ 何て羨ましい！ 白井黒子、貴様がオレの壁となるのか!! チックショー!!

フシギバナを送り込むしかない!!

いけつ、バナード!!

ケーシイにソーラービーム!!

つて思つたら、こつちも何かやべえコトになつてる!? アツ、力込めすぎた！

瀕死状態だ！

「・・・うう、何かこんなのがっかり・・・」

「悪かつた。これやるから元気出せ、冷めたコーヒー・・・の空き缶」
わりいわりい、クールになろうぜ佐天眞守。そしてすまなかつたな
バナード。せめてものお詫びだ、受け取れ。すごいきずぐすりだ。

「いりません！ ただのゴミじゃないですか!!」

「空き缶が好きそうな顔してたから」

「してませんよ!! どんな顔ですかそれ!? というかいつの間に飲んでたんですか？！」

「それはほら、飛んでるときに飲んでたんだよ。うん」

チツ、どさくさ紛れに押し付けられると思つたんだが、無理か。

はあ…涙子ちゃんは憎き白井に食い気味に話し掛けてるし、まあ、白井のあんな困つた顔はあんまり見れるもんじやないからその辺はイイけどさ。

「やっぱり、常盤台に通うような人は凄いんですね。あたしなんか…」

「…実際はそんなに良いもんでもありませんわ。派閥なんて下らしいものを作つてている方々、プライドがめっぽう高い世間知らずの歪んだ人もいますので。あなたのような人の方がよっぽど、わたくしは好感が持てますわ」

「…え、何、口説いてるの？ アイツはオレのエンジエルを口説いてるの？ 確かに、不埒な男は許さんって態度で接してくるオレだけ、女同士も許容するの難しいよ？」

「え、そなんですか？ …でも、白井さんはそんなこと全然無いですから！ すつごくカッコ良かつたです！」

「はい、すつごく入りましたー…うあああ!! どうするオレ!? いや…どうするもこうするもどうも出来ないやい!! 無力、圧倒的無力ッ!! どんな強い能力者でも、レベルなんてあつても意味が無いんだ！」

ちくしょう…かくなる上は…アレしか無いのか…？

オレが白井に代わるには…！

「あつ、ちょっとどこに行くんですか!?」

「ヘブン!!」

超スピード、速度規制なんて関係無しだ、車と違つてガチガチに決められていない。オレが向かう先は一つ、あの大きな建物。

そこは——病院

ほぼ暴落状態で駆け込む、そして受付へ直行。オレが知つてゐる最上の名医、あの人にしか頼めない！

「医者を！ 医者を呼んでくれ！」

「ちよ、何ですか急に？ 急患ですか？ それでしたら……」

「急患だよ急患！ コトは一刻を争うよ!! むしろ絶賛戦争中だよ!! はよしなきや世界大戦にまで発展しちゃうよ!! この病院に空襲きちゃうよ!?」

「はよ、はよ！ はよハリアップ!! オレは急がなきやならない！ 何故つて、そりや

「そんなに急いでどうかしたのかい？ 見たところ今の君の身体の何処にも、異常は無いように見えるんだけどね」

「おつと、お出ましか……」

『冥土^{ヘブン}帰^キし』

この学園都市、オレの知る最上の名医というか多分、いや絶対に世界最高の医者に違いない。治せない病気は無いんじゃないかと思うし、怪我も何もかも完治させる凄腕だからこそ、この医者はオレ的学園都市重要人物ランキング第一位だ。顔はカエルに似てるけど。

「先生、お願いします！ オレの……オレの！ ぐつ……！」

オレに押し寄せる万感の思い、そのシリアルスな雰囲気に先生も呑まれてやがる。だがしかし、オレは言つてやる！

白井に勝つためには、オレが！ オレ自身が!!

——チ○コを取ってくれ!!

J Cになるコトだ！ そして常盤台、入学というか、転入してかつこいいつて言わせてやるぜ!! 今日からお兄ちゃんじやなくてお姉ちゃんじやー!!

オレには一つ癖がある。癖と言つては何だが、寝起きが悪い。なぜそんなことを言つたかつつーと、いまオレの目の前にはベッドがある。

天井じやなくてベッド。むしろ、天井はオレの背中とハグしてゐるところだし。

重力操作つて能力は便利んだけどさ、こう寝てるときとかたまに誤作動起こしてさあゝ・・・浮いちやうんすよ。つまるところ、皆にイメージしやすくするとオレは天井で寝てるつて感じだな。

「はあー・・・ねつみい・・・涙子成分が足りてねえ・・・足りてねえよお・・・・・」

昨日はなんやかんやで涙子ちゃんに全然会えなかつた。十数年付き添つてきた股間のマイサンも依然として絶賛健在中でもある。

まあ、率直に結論だけを言うと、女の子になれなかつたし、常磐台生にもなれなかつたし、JCはおろかJKにも、JSにもなれなかつた。

何十分にも渡る舌戦をあのカエル顔の医者と繰り広げ、満身創痍の状態で路地裏に戻ると、既にバナードも腹黒ツインテールもおらず、愛しの涙子ちゃんの残り香すら無かつた。オレはひとり泣いた。

『君が何を考えているのか、全くもつて僕にはわからないよ』

『頭の治療を優先するべきなんじゃないかな?』

『チ○コは男の魂。侍の刀と同じだと僕は思うけどね。それを無くしたら、君は君じやなくなるよ』

頭ん中では、昨日のことがまるで昨日のことのように思い出せる。ん? おかしいな? 文章的におかしい。まあ、そう冷静にいられないくらい、昨日の病院イベントは酷いもんだつた。

何故つて? そりや、あれだ。病院の受付で、チ○コについて声

高々に語り合うなんて、思い返せばアホすぎた。危うく前科ものになるとこだつたかもしだねえし。オレもあつちも。

だけどそれでも、涙子ちゃんの愛を思えばオレは、前科がつこうが

女になろうと思えた。しかし、あるくだりがオレを突き動かした。

『実の兄が突然性転換してたら、思春期の女の子には厳しいものがあるんじやないかな。まあ、素直に言うと気持ち悪がられるよね』

『きもち・・・わるがら・・・れる・・・?!』

『いやなんで君は、そんなに驚いているのかな？ 普通に考えられる、というよりも避けられないことだよね？』

想像してみた。涙子ちゃんが女になつたオレを見た瞬間を。思い返した。涙子ちゃんはオレの能力を聞いただけで、もう引くくらいドン引いた。考えてみた。能力と性転換、どつちがより涙子ちゃんが引くのか。

結論を出した。

これ、確実に嫌われる案件だ。聞いたことがある。兄妹仲拗れる案件第二位は、兄が姉になつた時だ。友達との時間を邪魔されるのの次に悪辣な行為だつたんだ！

そしてオレはその場に崩れ落ち。泣いた。男泣きだ。バスケがしたい男並みに、泣いた。

『先生・・・!! 涙子ちゃんに・・・すつごくカッコ良いって・・・言われたいです・・・ただ、それだけなんです・・・!!』

ただ慟哭を、ただひたすらに、ただ一人の妹を思つて、俺は病院でしゃくり上げた。思い出すだけで、目頭が熱くなる。涙子ちゃんに会いてえ・・・！

先生はそんなオレを見て、こう言つた。

『妹が兄を嫌う理由は大抵、生理的なものか、力で支配されたか。でも君を見る限り後者は違う。ジヤイニアズムを使うには見えないしね。むしろ、オレのものは妹のもの、とでも考えていいそうだ』

『・・・どういうことですか・・・？ それならオレは該当しない！

涙子ちゃんのものを奪うなんてしてないし、ましてや暴力なんて！

ただ毎日成長を見守つているだけで！ すくすく育つのを見ていたいだけで！ 観察日記とかつけちゃつてるだけで！ それだけのありふれた兄です!!』

『うん、生理的なものだね』

『えつ？』

『いやなんで、そんなに不思議そうな顔をするんだい？ 考えうる限り、唯一世界中の人都が同じ結論を下せるだろう、議題だよね？』

『えつ？』

『いやだからね？ 考えてみてごらん。もし君が近しい人間に、プライベートが筒抜けにされていたら、日記のネタにされていたら、どう思う？』

『それが涙子ちゃんならオッケーです。むしろウエルカムです』
『やつぱり頭の治療を先にするべきなんじやないかな？』

『だからね、まず君は兄としての…………』

そしてオレは長々と授業を受けた。いわく、妹とは適度な距離を保つべし。いわく、触れすぎると花は散る。いわくいわくいわくいわくいわくいわく!!!!

蛙の説法は、どんな攻撃よりも強かつた。オレはもうボロボロだった。物理的にダメージは受けていないはずなのに、服がよれよれになるレベル。

そして前述の通り、路地裏にふらつきながら向かったが涙子ちゃんはおらず、気付けば家で寝ていたらしい。

手が震える。別に隠された封印が解けそうとか、そんなことは無い。ただ俺的レベル6、涙子ちゃんの絶対能力、禁断物質ルイコニウムの接種が足りてないだけだ。

「ヒデエ顔してるな……オレ」

鏡に手をつく。歯を磨きに来たオレの顔はどんよりとした、曇り空だつた。鏡にくつきりと紅葉の痕が刻まれる。

「今日は休み……か」

カレンダーを眺めた。歯磨き粉がいやに甘い。机の上の日記帳。昨日の分は、書かれていなかつた。

カーテンを開くと満点の青空。満天じやなくて、満点だ。綺麗な青空だつた。だけどオレの心は雨模様。雨のち、台風。台風のち、隕石だ。ハルマゲドンだ。ハゲドン。

ルイコニウムを一日適量接種できないだけで、オレの身体は持たな

いらっしゃい。ああ・・・目が霞むぜ。クツ、これはもうダメだ。日光を浴びよう。ただでさえ暗いのが、さらに暗くなつちまう。

歯磨きを終え、服を着替え、時計を見るともう正午を迎えていた。随分と長く眠つてたもんだな。

玄関から出る。春の日差しは心地好く、夏や冬に比べると爽やかでオレは結構好きだ。

さあて、今日も愛しの涙子ちゃんウォッキングを・・・あ、控えろだ？ なーに言つてやがる？ そんなことで控えられるほどオレの愛は、歯磨き粉のように甘くはねえ・・・ツ!!

繁華街は今日も賑わっていた。まあ休みだから仕方無いか。飛ぶのは控え、歩くオレ。すれ違う人を眺め、そしてため息をつく。

涙子ちゃんの探索をした結果。いまは寮にいるらしい。流石のオレも、寮への突撃は不味いくらい知つている。女子寮だしな。いや別に？ 共同の寮なら突撃したとか、無いですし？ てか、男女同寮とか許しませんし？ うん、他意はない。

そしてするべき事がない。暇だ。退屈だ。だからといつて別に御坂とか白井に、会いたいわけでは無い。あれはもう災難だから。

飯でも食べに行こう。オレはそうすることにした。こんなことなら上条とか、土御門とか、青ピを誘つておくべきだったなあ・・・休日の学園都市、カツプルの多いこと、多いこと。彼女を欲しいとは思わないが、心にクルものはある。そしてそう感じているのはオレだけでは当然無く、その為に必死に女子に声をかけ、彼女作りに励む男も多い。

繁華街とはつまりは、青春のデパートなのかもしれないな。カツプル、一人身、野郎の集団、などなど様々な人種がいる。

そしてオレはその中で一人寂しく、妹にも会えずに、孤独にハンバーガーを貪るんだ。ひもじいよお・・・涙子ちゃん・・・春の陽気に包まれてゐるのに、長袖まで着てるつつーのに、寒いぜ・・・そんな孤独で悲痛な背中をしていたオレの背後から、声が聞こえた。

「あ・・・あ、・・・あのつ・・・！」

聞き覚えがあるようで、ほとんど無い。か細い声だった。オレじゃなきや聞き逃しちゃうね。

なんだなんだ？ カツアゲか？ 今のオレは虫の居所が悪いぞ？ ヘラクレスがチ○コを挟もうとしてるくらいだぞ？ きっと、たぶん。

「……ん？ ……ああ、えーっと？」

振り返った先には、見覚えのある制服に身を包んだ少女がいた。その制服にオレは好感を持ってない。つーか、血気盛んな女のイメージしか出てこねえ、主に二人のせいで。

本体の少女の方には見覚えが無い。わけでは無いのかもしない。どこかで見たような気もするし、違う人に呼び掛けたのにオレが間違えて振り返った可能性もある。半々だ。

「……先日は……そのつ！ お、お世話になりました……お助けいただき……本当にあ、ありがとうございます……っ！」

声が裏返っていた。深々と下げた頭から、唯一見える耳も真っ赤だ。

オレ、何かしたつけ？ 先日？ ここ最近は涙子ちゃんを見て、涙子ちゃんを見守り、涙子ちゃんを陰ながらサポートしていた、それだけのは……あっ！ 思い出した！ 御坂の身代わりとなつて貰つた、ロリコンクソヤンキーに絡まれてた女の子か！

「あー、あの時の。あの後、大丈夫だつたか？ 御坂に因縁つけられなかつたか？ いきなり電撃ぶつ放して来たり、喧嘩売られたりは？」

「いつ、いえそのようなことは……御坂様もどても優しく……」

「優しく？ 恐ろしくじやなくて？」

「……はつ……はい……わたくしのようなものにも……とても優しくしてくださいさつて……」

御坂が優しいって、明日は雷が降るんじやねえの？ いやもう文字通り。

「わ、わたくし……あの時はお礼もしつかりと言えず……申し訳ありませんでした……」

「ああ、気にしなくていいよ。オレもあの後急ぎの用があつたから
涙子ちゃんウォッチングという、ビッグな用事がな！」

「（）用事……あのつ、本日は……お時間がありますでしょうか……
？」

「悪い。あいにくこれから、あそこに飯を食い行くトコでさ」

恐る恐るといった様子でオレを見つめ、いや体格的に上目で見つめてくる少女。オレは世界的に有名なバーガーショップを指差す。

「わ、わたくしも（）一緒に……よ、よろしいでしようか……？!
差し出がましいとは……分かっています……だ、ダメ……
ですか……？」

花粉症か？ 目が潤んでるぞ？ 目薬いるか？ あ、持つてねえ
や。しかし、なんだ？ 別にハンバーガーを食べるくらいでそんな、
必死に。

あれか？ お嬢様に見えて、ジャンクなフードが好きなのか？ 意外だ。断る道理も無いし、てか何か放つとけない感じもするしな、イイぜ。

「あ、ありがとうございます……！」

「にしても……好きなんだな

「……つ?! ……ひ、一目惚れは、はしたないと……思います
か……？」

ハンバーガーに一目惚れ？ 女なのにそんなに食べてはしたないとか、女なのに食い過ぎだろ、とかオレは別に思わないけどな。良く食べる女の子は可愛いよな、なあ？

「いや、オレなら嬉しいな

自分の作った料理にそこまで熱を持つてくれたら、そりや嬉しいだろうさ。昔、まだ幼かつた涙子ちゃんにオレの作ったものを食べて貰つたときは、そりやあ嬉しかった。クク、思い出しだけで頬が緩むぜ。笑顔が止まんねえ！

「つ……?! そ、うですか……」

あれ、さつきよりこの娘顔赤くね？ もう紅くね？ 紅じやん。マグマ？ あれか？ ハンバーガーが食べなくて仕方無いのか？

しゃーないなあ。ほら、行こつか。急がば回れ、善は急げつつーだろ？

手を引いてオレは、バーガーショップへと走つた。風より早く。

ハンバーガー好きな少女の名前、湾内絹保さんと言うらしい。わんないきぬほ、だ。だからオレは彼女を湾内さんと呼ぶことにした。それは良いんだけど、湾内さんはオレのことと佐天様と呼ぶことに決めたらしい。

いや、様つて。様つて！ オレはどこのお偉いさんだよ！ そういうプレイとかつて思われるかもしんねえじやん！

やめてくれと必死に伝えたんだが、これだけは譲れないと湾内さんは食い下がつた。

何で？ 常盤台って生徒の降り幅大きすぎない？ 様付けしてくれる娘もいれば類人猿とか、オレを罵倒するやつもいるんだけど。出会い頭に雷パンチかまそうとするやつとか、電気ショックどころか十万ボルトキメてくるやつとかな。二人だけなんだけども。

いやー、やつぱり。常盤台はお嬢様学校なんだな。あの二人のせいで、野蛮な女しか居ない学校つてイメージになりかけてたけど、大半はきっと湾内さんみたいにおしとやかで、こう大和撫子つてえの？

そういう女の子が多いに違いないな。

あ、てかさ？ 大和撫子よりも、佐天涙子のほうが良くない？ そつちのほうが褒め言葉じゃね？ 世界三大美人とか、あんなん余裕で完封出来る涙子ちゃんのほうが、大和撫子より凄いし。つまり、涙子ちゃんは天使。辞書に載せろよ。義務教育だろ、義務教育。

「あの・・・佐天様？」

おっと、思考に耽り過ぎたな。湾内さんがオレを心配そうに見てる。ごめんごめん、世界の常識について考えてたんだ。

「ああ、何でもないよ。ちよつと考え方をだな」

「そなんですか？ 佐天様もお悩みになることがあるんですね」

何だよ、オレが悩みなしの能天氣野郎とでも言いたいのか？ 常に悩んでるつてーのに。涙子ちゃんのこととか、妹のこととか、エンジエルのこととか。

ん、てか待てよ・・・？ も、つてことは、湾内さんは何か悩んで

るんだろうか？

「湾内さんは何が、悩み事でもあんの？ 注文方法とか？」

そうそう、湾内さんなんだけどハンバーガー好きな割に、注文する時とかわたわた慌ててさ。あれか？ チェーン店は来ないタイプなのか？ 見る限り箱入り娘っぽいし、こう・・黒毛和牛100%の一つ何千円とか、何万とかする最高級のハンバーガーとか食べてたりするんだろうな。考えただけでうまそう。

「……っ！ いついえ、そのようなことは……一つも無いとは…………言い切れません……ですが……」

あわあわと狼狽えている湾内さん。あつちもこつちにも目をやつて、目に見えて動搖してる、テンパってるな。しまいには下向いちやつたし。チラチラってオレのほうを見てくるけど。

まあここは人生の先輩として、オレが悩める少女の悩みを聞いてあげよう。思春期つて苦悩する時期だしな。

「案外さ。人の悩みつづーのは一人で溜め込むには大きすぎるし、他人に話すにはちつぽけすぎるもんなのさ。前から見てるだけじや、その壁の厚さってのは分からぬだろ？ 上から見たらすっげえ薄い壁かもしけねえのに」

こう、かつよく頬杖をついたオレ。大勢の学生が歩く雑踏を眺める。

ああ、言い忘れてた。オレと湾内さんは窓を目の前にした、カウンター席な。テーブル席満員だつた。休日昼間のバーガーショップつて、人が蟻の群れみたいに溢れかえつててさ、春なのに夏かと思つたよ。暑すぎ。

「……お、お友だちとはどのようになるの、でしようか……！」

あー、なるほど。そうだよな、入学したてつて、友人作りが一番のミッショングだもんな。湾内さんつて積極的なタイプには見えないし、悩むのも分かる。それにしても友人じやなくてお友だちつて言う所の辺り、必死さが見て取れんな。

「友達があ・・・どのようについて言われても、難しい問題だよな。だつてオレと湾内さんは友だちになつたのに、どうやつてなつたのかは上

手く説明できねえし」

話し掛ければ出来るんじゃね？ 何て身も蓋も無いアドバイスはオレはしない。アドバイスつつーのは、相手に合わせた的確なものを出すもの。それがアドバイスなんだ。

「ではどうすれば・・・」

「いいか、湾内さん。友だちは、会話か遊びから出来るもんなんだ」

「遊び・・・ですか？」

「そう。よく知らない子が混じってる鬼ごっことかでも、気づけば仲良くなつてたりするだろ？」

「・・・鬼ごつことはなんでしょうか？」

「おいおい、マジか？ 鬼ごつこ知らないの？ 仕方無い・・・仕込むか。学園都市最強のアソビストと言われてるオレが、直々に湾内さんをコミュ力MAXの人脈人間にしてやるぜ！」

「鬼とは・・・いつたいどのようないい遊びなんでしょう・・・想像もつきません・・・」

「鬼ごつこつてのはな。一人が鬼になつてだな、捕まつた愚鈍なやつは・・・」

「捕まつてしまつた方は・・・」

「鬼になつてしまふんだ！」

「ひつ！ 鬼になつてしまふのですか？」

「そうだよ。鬼になつて、人間を捕まえるだけの血に飢えた怪物になり下がるんだ」

「ひいいつ！ そんな恐ろしいものが存在するなんて・・・！」

「・・・やばい面白い。純粹すぎる。普通にルール説明しようとしたのに、そんな息の詰まつた顔されたら、なあ？ 虐めたくなるよな、オレ悪くない。」

「まあ、冗談はさておき」

「・・・ほつ・・・じよ、冗談なんですね。良かつたです・・・」

「流石に常盤台に通うような御高く留まつたエリート中学生たちが、校庭でこの指止まれつたつて乗つてくるわけが無いから鬼ごつこはボツ」

てか、もしかしたら鬼ごっこを越えた阿修羅ごっこ、魔王ごっこ、みたいになるかもしれないし。捕まるためにフルで能力ブツパピカチュウみたいな。容易に想像できる。逃げるやつを嬉々として焦がす悪魔ピカチュウが。怖すぎ。

「ここはやつぱり、身近な人から仲良くなるのが友人作りの近道だな。隣の席とか。同じクラス、部活、その辺り中心に攻めてこう」

「な、なるほど！ 勉強になります！」

共通の話題があるのが一番いいんだけど、それを今は期待しないどくとして。じゃあ、どうするか。やっぱこれでしょ。

「湾内さん、指出して」

「指・・・ですか？ こうでしようか？」

「違う違う、人差し指だけ。こうやつて」

「こ、こうでしようか？」

「あつ・・・・・・・・」

オレと湾内さんは両手の人差し指を、互いに差し合うように突き出す。そう、足し算だ。いや、この遊びの名称は全国で違うらしいけど。

「これはいつたい・・・・？」

「これで、こう」

「あつ・・・・・・・・」

オレの人差し指が湾内さんの人差し指をダイレクトアタック。つて、めっちゃ顔赤くなってる?! 店に入った時も思つたけど、もしかして接触NG!?

「・・・あの・・・・?」

「こうしたら、こう」

くつ、だがしかし。口頭での説明つてムズいんだ。習うより慣れろつて言うし。だからオレは背に腹はかえられんと、湾内さんの手を取る。オレが叩いた方の手、人差し指を伸ばしている手、その手の中指をしつかりと開かせる。まあ、簡単に言うとピースみたいな感じ。

「・・・はう、・・・・あ」

何だかこう、押し殺すような声が聞こえるんだけど。あれか、殺意を持たれてるのか？ 顔上げたら、オレを射殺さんとばかりにガン付けられてたりするのか？

ほつ・・・手え離して顔上げたけど、どうにかそんなことは無かつたぜ。ただただ顔が赤いだけだ。ちよつと涙目になつてる気がするけど、氣のせいだな！ 気のせい！ あんまり深く考えると傷付きそ
うだから、やめておく。

「だからだな、つまりは・・・一本の指で叩かれたら、一つ。こうやつて二本の指で叩かれたら、二つ。その本数プラスするつてことだな

」

あまり触れないように颯爽と、見本を見せるように、湾内さんの指でオレの指を叩いた。そして二本の指で叩かれたオレの手を、湾内さんに見せ付けるように、中指、薬指、と順に開かせる。

「これを繰り返して、相手の指をパーにした方の勝ち。三で三を叩いてもオーバーキルにはならずに、一つに戻るからそこは気をつけてな

」

自分の手で追加の説明。デモンストレーションつてやつだな。

「は、はい！ わかりました！」

「これを隣の席の子とやれば、仲良くなれるの確実さ。もう一時間で親友、つて感じになれるぞ」

「す、凄いです！」

ちよつと言ひ過ぎた感はあるけど、そんくらい効果があると思つてた方が湾内さんも友人作り目的で話し掛けるのに、躊躇する可能性も低くなるだろうし。双方どちらかが積極的にいかなきや、友人は作れない。

さて、これにてオレの仕事は終わりだな。残ったハンバーガーを食べてつ・・・、終わり。解散。

一口サイズのバーガー片手に席を立ち上がるとしたオレ。不意に窓の外に見えたのは、見慣れたエンジエルだつた。そう、涙子ちゃんだ。左右に花と性悪ツインテがいるようにも思えたが、そこは見ないでおこう。花は百歩譲るとしても。

あれ、何か涙子ちゃん驚いてね？ ビツクリ仰天つて顔してね？ うお、何か凄いイイ顔になつたし・・・あゝ超可愛い！ 純度100%の可愛さ！ 100%果汁のオレンジジュースより濃いぞ！

食つてたハンバーガーが黒毛和牛なんて目じやくなくなつた！ もはや涙子ちゃんバーガー！ ワンコインどころかアタツシユケース満杯の札束でも買えない価値！

「ん？ なんだ？ 何を伝えたいんだ？」 涙子ちゃん？ グッジョブ？ サムズアップ？ ハツ・・・そーゆーことか！」

「いつせーの、せ・・・つか！ 確かに、その遊びもなかなか友だち作りに便利だ！」 流石、涙子ちゃん！

「よし、オレからいくぜ！」 いつせーの、せつ！」

「・・・」

「あれ、違うのか!?」 涙子ちゃん？ 何そのあからさまなガツ

カリ顔？！ お兄ちゃん何か間違えた？！」

「・・・あの、どうかいたしましたか？」

慌てふためくオレの耳に聞こえたのは、隣の湾内さんの声。窓の外に向けて親指を上げているオレを、凄い不思議そうな顔で見ていた。しかし、オレはそれを気にしない！ 今は涙子ちゃんを優先しなけれ

れ・・・ば・・・？ 何か、凄い怒髪天？！ 怒つてらっしゃる？！

「なんで？！ くつ、分からない！」 湾内さん、涙子ちゃんと同世代の君なら・・・つて、ん？ 何だ？ 湾内さんと・・・話をしてる・・・？」

涙子ちゃんは、オレが隣を向いた時にだけ満面の笑みを浮かべ、こくこくと頷いている。その天使の隣で、凄いドン引いた顔、苦虫を噛み締めてつてか、苦虫を舌で味わつてるような顔でオレを見る性悪ツインテが居る気がするが、これは無視。

「佐天様・・・？」

オレは観念した。涙子ちゃんを怒らせたくは無い。席に座り直す。隣を向いた。親指を立てた。仕方無い。もう一つの遊びを教えよう。「これはだな、指の本数を当てる・・・」

そしてオレは湾内さんに長い時間、友だち作りのための遊びを教えた。無論、休日が潰れた。オーマイゴッド。オーマイエンジエー。



【涙子ちゃんサイド】

「うわっ！ まも兄!?」

「どうしたんですか？」

「佐天さん？」

「いやほら、あれつ！ あれつ！ あれまも兄だよね?!」

「あー・・・ そう、ですね」

「どうかしたんですの？」

「あつ、白井さん！ あれ、あれですあれ！」

「うげつ・・・ 非番の日にあんな男を見ることになるなんて・・・ 今日は12位ですわね・・・」

「あはは・・・ でも、まさかまも兄がデートしてるなんてねえ・・・ フアイトつ！」

「あれ、佐天さん。こつちに気付いたみたいですよ?」

「うわ、まも兄なにやつてんの・・・?」

「気持ち悪いですわ」

「あつ、白井さん！ あの隣の人、白井さんと同じ常盤台の人じやないですか？」

「・・・ わ、わたくしのクラスメイトだつた気がしますの・・・ 話し掛けるのは、控えた方が良いみたいですね・・・」

「ちよつ、まも兄！ デリカシーどこいつてんの?! あたしの方ばつか見てないで、隣見てなよ！」

「・・・ 佐天さんの声、聞こえてるんですけどね？」

「はあ、・・・ もう行きますの。あんな男見てるだけ、馬鹿になりますわ」

「そ、そうですね。佐天さん、行きましょうか」

「うー・・・ 憎い心配だけど、・・・ そうだね・・・ 信じたくないけど、まも兄を信じて・・・ 行こつか」

「で・・・ どうしますの？」

「あつ、白井さん！ あつちの方に新しく出来たお店があつて・・・」

「」

最近の世論では、高齢化、少子化、などの子どもが少なくなつていて、国の未来は危ういなんて、そんなことを語つている訳であるんだけど、ここ学園都市では学園と言う名の通り、国全体の少子化の波に逆らつて、子どもの数がとても多い。

近くに幼稚園、保育園を作らないで、と言う爺ちゃん婆ちゃん、その他大人もいなけりや、危険なのでキヤツチボール、ボール遊びは止めましよう、なんつー遊び場である公園に不釣り合いな警告文も出されちゃいない。

そんな子ども天国な学園都市。人口全体の平均年齢は二十に満たないんじやないか？ そんな都市だからこそ、公園は常に小学生たちが闊歩する、活気に溢れた昭和の風貌だ。

そしてオレこと佐天眞守は今現在、そんなキヤーキヤーと喧しい公園で遊んでいた。一回りほど年齢の離れた、ガキどもと遊んでいた。正確には、まとわり付かれているんだけど・・・

「まもる！ つぎ！ つぎはおにぎっこしようぜ！」

「だめ！ おにーちゃんはわたしとおままごとをするの!!」

「まもる、おんぶ・・・」

「順番に言え、順番に」

全方位から服を引っ張られ、全方位から甲高い声を聞かされ、高校生のオレとは違つて無尽蔵のスタミナがあるんじやねえかつて、子どものバイタリティ。昼から遊び始めてもう恐らく二時間程度は経っているはずなのに、全く疲れた様子がねえ。無敵か！ お前ら無敵か！ レベル6か！

こうなつている理由は幾つかある。まあ、オレつて言うほど子どもは嫌いじやない。て言うか、好きなほう。一番上のお兄ちゃんつてどこもあるしな。だから、良く近所のやつらと遊んでやつたりするんだけど、今日はいつもより少しやんちゃなメンバーだった。以上。うわ、凄い単純な理由。しかも簡潔。幾つかって言つたくせに、一つしかないし。

「おいまもる、きいてんのか？」

「……おにーちゃん？」

「まもる、おんぶ・・・おんぶ・・・」

「まもる、おんぶ・・・おんぶ・・・」
氣付けば、また服を引っ張っていた。引っ張るってか、引き千切
ろうとしてんじゃね？　つてくらいの強さだけども。あーやめろや
めろ、服が伸びちゃうだろ！」

「スーパーアルティメット、ハイパーアルティメットウルトラサイ
キ————ツツツツツク!!!!」

「どぶつ？」

そんなこんなで取り囲むガキたちに悪戦苦闘をしていたオレ、一際
後ろの方から大きい声が聞こえたんだけど、これが不穏な掛け声で
さ。アルティメット二回言つてるし。いや確かに小学生にはありが
ちなネーミングだけさ。キックかよ！　避けれなかつたし！　い
てえ！

「つー・・・な、なんだよ・・・」

「キマッター！　レッドのサイキーツク!!　かいじんまもるに
ひやくまんのダメージ!!　まさになにはじぬアルティメットお!!」

顔面から地面に激突。めちゃいてえ。砂ぼこりやばい。服めつ
ちや汚れた。それを払いながら起き上がると、キメポーズらしき謎の
立ち方でドヤ顔を浮かべる、小学生の姿。レッドと呼ばなきや拗ね
る、特撮好きのガキだ。本当の名前はえつと確か・・・

「おつ、ゆうこ！　おそかつたな！　いつしょにまもるをおすぞ！」

「まかせとけ！　つてちがう、レエエエエッド!!」

「そうそう、ゆうこ。確かにいつ身体強化系の能力者だろ？　キック
の威力がそちらのスキルアウト以上だよ、ホントこの街異常だわ。い
てえ・・・

「げっ！　かいじん、しつこいぞ！　まだいきてたのか!!　このフタ
ヤロー!!」

「勝手に殺すな。てか誰が怪人だ。あとタフな、タフ」

「こそ、なんつー教育に悪影響なんだ、特撮ってのは。こいつの被つ

てる帽子のマーク、これがレッドってやつだっけ？ バツタみてえな顔してゐるな。

「まもる、おんぶ・・・」

さつきからうるさ？！ おんぶおんぶ！ 後でしてあげるから待つてくれよ！ 状況考えて！

「くらえっ！ とどめのスーパーハイパー・メガアルティメットウルトラサンダーファイアード・サイツ！ キーーーーーーツツツツツツツツクウ！」

「は、お前まつ・・・！」

気付けばまた目の前に、靴の裏が見えた。ちなみに女子だからつて、ゆうこはご覧の通り短パンなのでパンツが見える心配は・・・づあつ!!

意識が深い海の底のように、暗闇に包まれていた。不意におぼろ気に、遠くから声が聞こえた気がした。気がしただけだった。わけでは無かった。

縫い付けられたように重い目蓋。どうにかこうにか、そのうんともすんとも言わなそうな、力の入らない目蓋を抉じ開ける。

一番最初に目に入ったのは、どこまでも突き抜ける青い空。つまりオレは横になつていることになる。背中に触れるものはベッドのよう柔らかなくて、固い。寝心地が悪い。まあやっぱり、家では無さそうだ。

眠っていた場所は、木製のベンチだった。公園のベンチだった。

慌てて起き上ると、腹筋とか上半身とは関係の無い顔が痛む。凄いダメージ。多分これ靴痕残つてるよな。めちゃくちゃ痛い。

顔を押さえていると、近くから爆音が聞こえた。もんの凄く響いた。空気が震えたんだけど！ なに？ 近くでダイナマイトでも誰か使つた？！

「うおーーーーすっげえ!!」

「んつふつふ。これが根性だ!!」

音源の方へと顔を向ける。指の隙間から見えたのは、喜色満面と

いつた顔のゆうこ、遠巻きに様子を眺めて困惑しているガキども。そ

して、白ラン。白い学ラン男だ。ハチマキも巻いてやがる。

あー、この街にあの男の他にもあんな奇抜な格好をするやつがいるんだな。世界には三人似てる人がいるつつーし、そういう偶然もあるんだなあ・・・

・・・削板?! なんでここに!?

まずい、あれは御坂に負けず劣らずのトラブルメイカー！ 関わつたら口クなことがねえ！ アイツはナナだけど！

ここは気付かれないうちに逃げるしか！ 脱兎！ 兎よりも早く

！ つて、アイツは音速じやん！ バレてる！ もう前に来てやがる！

「よう、起きたか？」

「・・・いや、まだ寝てるぞ。オレはこう見えて夢遊病なんだ。ぐうぐう・・・」

「へえそりや初耳だぜ。寝てもランニングか、根性あるなあ佐天」
ぐうぐう・・・ここは寝た振りで過ごすしか・・・はい、無理つすよねえ。流石に根性バカの昭和からタイムスリップマンのコイツ相手にも、それは無理があるわ。

「佐天!! オレといつちよ根性比べしねえか？」

「すまん。オレはこう見えて忙しいんだ。これからおんぶとか、鬼ごっことかおままごととか、するからな。」

咄嗟に方向転換、削板とは顔を合わせないようにして、オレはさつきまで遊んでいたガキたちの方に行く。うんうん、これでフェードアウト出来るはず・・・

「のんのん!! それならもうオレが終わらせといたぜ！」

マ・ジ・で?!

はつ、確かによく見たら皆目が疲れきってるし。いや、ゆうこだけめちゃくちゃ輝いてるけど。これはなんつーハードな鬼ごっこをさせられたんだ?! 死屍累々じやねーか！

「ま、まもる・・・あ・・・あんなのにげきれっこねえよ・・・」

「りこんちょうてい……いしやりよーセいきゅー……」

「うぶ……はきそう……」

どんなおままごと?! てが、大丈夫か?! ジェットコースターでも乗つてきた!? ドドンパ?! 高飛車?! S O G I I T A !? ええじゃないか?! いやよくねえよ!!

「うわっ、ソギー！ カいじんだ！ カいじんがめをきましたぞ！」
おいコイツヒーローごっこしようとしてるぞ！ やめろ、このバカを巻き込むな！ オレが死ぬってえーの！

「何だと!? なんて根性のあるヤロウだ！ ブツ飛ばす!!」

ヤメ口。拳を握るな、その手は人と人との繋ぐためのものだ!!
てか勝てるわけねえつ！ コイツとは相性が悪すぎる！ ノーマルタイプがかくとうに勝てるわけが無いんだ！

「削板、戦うのはこの際いいけどな。こんなトコでオレたちがバトル見て見ろよ。弱つちいコイツらが巻き込まれて、死んじまうかもしないえぞ？ 子どもを巻き込む根性なし、そんなのにオレはなりたくねえーな」

「……だな！」

D A · N A !? いやまあいい。バトルが避けられたなら、これで良し。ふう、良かつた良かつた。根性とかで責めれば、コイツが退きやすいのはよく知っている。オレの作戦勝ち、だな。

フツ、と得意気な顔で公園からフェードアウトを試みたオレ。

「じゃあこれはどうだ？ ベエースボール!!!」

しかしやはり、逃げれない。グローブとバット。野球？ 悪い予感しかしねえんだけど？

「まもる……かたきをとつてくれ！」

「あなた……わたしがわるかつたわ……いつしゆんのきのまよいだったの……」

「おぼつ……うえ……」

昼ドラマ展開まだ続いてた!? なに、浮気の設定だったの？ てかお

前はもうトイレ行つてこい！ まともなの一人しかいねえ！

「三打席対決だ！ いくぞ、佐天!!」

「がんばれーっ！」

「ソギー!
かいじんぶつたおせえ!!
おらあつ!!」

— १ —

流れるままにいつの間にかヘルメットを被つているオレがいる。手にはバット。ボールを見せ付けてくる削板。オレと対照的に乗り気である。客のヤジが少しうるさい。いや、一人だけだけど。

う オ オ お お お お お お お お お お
お つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ つ
ト ノ ニ エ エ エ リ ト オ !!
!!!!!!
す ご い ツ ——————
ス

「おアートホールドヒーリング！」

なんつり
気合の入れようで……で!
マシか!
発光して

ない？！あてか見えうおつ

おれ——おれ——！

よしやあ!!
ストライクだな!!

音速を簡単に超える球速。その余波

れるだろう爆発が起きた。ボールは哀れにも木つ端微塵。 グローブも。そしてバットはベコベコ。オレはボロボロ。

いつの間にか削板がボールの行方を塞ぐように、立っていたので被害はオレだけにとどまつた。不幸中の幸い、ってやつ？　いや、オレに幸いが無いんだけど・・・

「お、オレの負けでいいから・・・もう終わりにしようぜ・・・
「なに言つてんだ佐天!! そんな根性なしになつちまうのか!! 途中
ではい、終わりなんて男らしくねえぞ!!」

「そうだ、そうだーー！！イタリアなんてらしく

それはリタイアだゆうこ。もうツツコミする気力も失せてきた。
のまま気絶でもして・・・

「ワンストライク!! 二球目いくぞ!!」

そしてオレは最後まで巻き込まれ、台風の中の野良犬のようなずたぼろの状態で、家に帰った。入学してからまだ一ヶ月にも満たない程度。制服の新調をする手続き中、少し涙が出ていた気がした。根性よりも、今生の間はもうアイツには会いたくねえ!!

オレこと佐天眞守は今現在、超絶怒濤の勇猛果敢にスペシャルなミッショングを遂行している所である。そんな忙しく多忙なオレに向かって、背後から悪びれもせず声を掛けてくる存在がいた。

「嫌ですよ。オレにメリット無いじゃないっすか」

「まあまあそう言わずに、ね？」

腕に緑の腕章を備え、眼鏡を掛けた年上の女性。つーか、固法先輩その人である。

「ていうかオレとジャッジメントもう関わり無いつすよね？」 どうに

やめたはずなんすけど

「大丈夫、そこは心配しないで。まだ籍はあるわよ」

「嬉しくねえっす」

何よりも優先すべきミッショングの途中なので、多少素つ氣ないのは勘弁して欲しい。オレはミッショングに集中したい。しかしおれにも目上の人間にに対する礼儀はある。固法先輩の表情は分からぬが、声だけでもちやんと返してくるオレは優しい男だ。

つーか、ジャッジメントだかハラスメントだか知らないけどさあ？

そんなんさあ、オレが戻らなくても余裕だろ。何故つて？ そりや

あ

「そもそもチンピラなんて白井がいりや充分でしようが。オレがわざわざ手伝わなくとも、アイツならその程度の仕事は完璧つすよ。ちょいのちょいのお茶の子さいさいですつて」

「それはそうかもしれないけど

固法先輩の話はよく聞いていないが、チンピラだか何かがここ最近暴行事件を起こしていると言っていた気がする。確かにそれは怖いな。しかしチンピラに成り下がる奴らは精々いつてもレベル3が関の山。だから、白井がいりや充分なのはガキでも分かる話だ。

「じゃつもうこの話は終わりで。オレ忙しつすから」

キッパリと言い切つてやつたぜ。よし、これにてもうこれは閉廷。さてさてズームを・・・

「佐天くん。．．．ひとつ聞いてもいいかしら？」

「なんすか？」

「何だよお、いいとこだつづーのにさあ．．．KYが固法先輩は。何してるの？」

何してるだあ？ そんなん決まつてるだろうが！

オレは双眼鏡から目を離し、ここで遂に固法先輩の方を向き「地に舞い降りた天使を見守つてんすよ。俗世の穢れにでも触れられたら困りますからね」

フツ、とオレは肩を竦め、何を言つてるんだ…常識だろうが。そう言いたげに固法さんに持論を、いや！ 世論を述べたツ！

きつと今のオレの顔は、アカデミー賞を受賞・・・いや、総ナメできそうなほどの迫真顔に違いない。主演男優賞は言わずもがな、主演女優賞もいけそうだぜ！ いやそれは無理か!! だつて涙子ちゃんが総ナメするだろうしな!! 主演女神賞的なやつを!!

「連行するわね」

「な、冤罪だ?!」

固法さんは抑揚のない口調で、淡々と平坦にオレにそう言つてきたので、オレは抗議の声を上げる。

冤罪だー！ エンザイダー!! おつ、何かヒーローっぽくなつた！ 無職戦隊エンザイダーミたいな！ うわつまんなそう。主役が不当な罪でリストラされたおつさんっぽい。

「現行犯。目の前で犯罪行為やられてるのに、冤罪も免罪も無いわよ」 そんな夏休みの受かれた小学生でも考えないだらうことを考えていたオレ。固法さんは可哀想な人を見るような目で、可哀想なオレを見ていた気がした。

オレが風紀委員在任中に見たどんな犯罪者にも向けていなかつた、そんな目な気がした。可哀想な人を見る目、というには今思えば哀愁が強すぎる気がした。僕は悲しくなつた。

「．．．そう言えばレベルは幾つなの？」

文学的にモノローグを語つていると、固法さんは不意にそう尋ねてきた。

「涙子ちゃんつすか？ オフレコで頼みますよ？ 実はここだけの話なんすけど・・・」

オレは一度周囲に誰も居ないかを確認してから、それに答えるべく固法さんに近付き、内緒話をするように耳元に顔を寄せ

「・・・レベル6なんすよね。可愛さの」

そう囁いた。

「そう」

国家機密を話すくらいの気持ちと面持ちでオレが伝えたと言うに、固法さんは一言でそれを一蹴した。これが世に言う返し刀である。違うか。

「聞いといてなんなんすか。もういいっすよね？ 僕集中しますから」

拗ねた。せめてえー、そうなの?! とか！ ワオ!! とかのリアクションがあつてくれてもいいじゃないか。しかしそんな子供じみた感情を固法さんにぶつけるわけにもいかないので、オレは手元の双眼鏡に逃げることにした。

因みに現在地は公園の茂みの中である。マイエンジエルは滑り台付近にいて、楽しそうに公園内の遊びを謳歌している。いやー、世界平和の極致だなこの光景。

「（）最近頻発する高位能力者によると見られる暴行事件。被害者はその大半がレベル0、もしくはレベル1。佐天くんの妹さんも、ターゲットになりうるわね。本当に物騒な話よ」

未来永劫、涙子ちゃんの平和が続きますように・・・と祈りを捧げていたオレの耳に聞こえてきたのは、聞き逃せない言葉だった。ピシッ、と何かにヒビの入る音が響いた。

「詳しく」

それは双眼鏡の悲鳴だった

涙子ちゃんをトウアーレゲットウオ?! 暴行オ?! んだとコラ!

殺しますよホント！ 影も形も無くすぞゴラア!!

「内容、一切聞いてなかつたのかしら？ 私結構頑張つて説明してたんだけど」

すまん、ついで程度にしか聞いてなかつた！　だつてエンジエル
ウォツチングだぜ？！　だぜ？！　そりやそつち見るでしょ聞くでしょ

！　耳をすませばでしょ！　遠くの声拾うために！！

「聞いたか聞いてないかの二択で言えば、涙子ちゃん見てましたね。
はい」

「三択じやないの？」

「そうとも言う。

「で、固法さん。何でしたつけ？　どこのゴミが国家遺産。いや銀河
遺産に手をかけようとしてるんでしたつけ？　そんな不届きもんは
オレが消しますからハリーアップ！」

「無能力者狩り、良くある話よ。でも、一週間に23件。最近、格段に
増えているのよね」

「誰の女神が無能だつて??!!」

「落ち着きなさい」

こんなのは落ち着けつかあ！　マジでシメるから覚悟しろよ犯人！
どうせ大方開発に行き詰まつた、レベル3相応のやさぐれエリート
の仕業に決まつてら！　抵抗できない丸腰の相手をターゲットにす
るシャバ僧にや、オレが必ず正義の鉄槌を下したる！」

「佐天くんそれ

「何すか？　あつ」

気付けば双眼鏡が冥土ヘンキヤンゼラに送られてやがっていた。これはさしもの
冥土返ヘンキヤンゼラしも返してこれない逝きっぷり。ほほほほ持つところはひしや
げて粉になつてるし。

「方針のほうは、あの子も混ぜて支部で話しましょう」

「あの子？」

「白井さん」

手のひらを叩き、粉を落としていると固法さんが悪魔の名前を告げ
た。鏡はないが、自分でも渋い顔をしているだろうと分かるそんな表
情にオレは変わり、唇を尖らせる。

「一人で充分つすよ。涙子ちゃんの為ですから一人で」

「いいじやない。昔はよく一緒に仕事してたんだから。名コンビ復活

よ、復活」

「そんときやまだまだ可愛げがあつたつすつからねえ・・・」

まだ多少の愛嬌があつた昔の白井を思い出す。溜め息が漏れた。身長も今より小さく、高飛車の片鱗はあつたがそれもガキの特徴かと長い目で見れて見逃せたあの時代が懐かしい。

女の成長は早いと聞くが、早すぎるだろ。いや涙子ちゃんは常に可愛いけどな？ 小学生の時も今も変わらず。

「まあ確かにそうよね。佐天くんの後をちょこちょこ追いかけてたトコとか」

「時の流れは無情だと改めて実感しますよね」

白井がまだ風紀委員でなく志願生であつた時の思い出を振り返りながら、しみじみとオレは呟いた。

公園からは甲高い声が響いていた。オレは名残惜しげにその声に背中を向け、声の主である女神の安全な学校生活の障害になりうるチンピラ共を打ち倒すべく、この前ぶりの風紀委員の支部に向けて魔法先輩と共に歩き始めた。

上を向くと、空は青かった。

力タカタカタ、とキーボードを叩く音が響くこの場所は、言わずと知れた学園都市治安維持の砦である風紀委員の支部である。都市外の方々に馴染みある言い方で言うと、警察署もしくは交番みたいなもんだ。そして俺の前の職場だ。

因みに力タカタ音の原因はフシギバナ。あいつインテリ系だつたのか。エスパータイプかよ。何でも凄腕のハツカーラしい。見た目で判断するなの極致だな。

高速でキーボードを叩く指、普段とは全くもつて真逆だな。のんびりしてるやつに見えて、やる時はやるらしい。オレと同じだな。視線を少し上に向ける。

代わる代わる様々なウインドウを写し出す画面。オレはそれを退屈そうに眺める。今現在、オレは暴行事件とやらの予習中。どこどこで起きたとか、何時に起きたとか、そういう情報を見てている。というか見させられている。

「一番近い時間帯ですと、今から一時間くらい後に、この辺りで良く起きていますね」

「なら、その時間帯に……」

真面目な顔をした白井が、真面目な話を真面目にしてやがる。てつきり悪態をねちねちつかれるかと思つていたが、仕事とプライベートは分けるタチらしい。オレと同じだな。あれ、デジヤブが。

二人の女子中学生の会話に年長者であり、男であるオレが入り込む余地は無く、その会話をBGMに机に置いてある湯呑みを手にオレは茶を飲み始めた。これで話しをしないで済む大義名分を得た。

すずす、とお茶を啜る。横で話す二人を尻目にティータイムを満喫。たまに画面に目を写す。オレと白井に挟まれて座っているフシギバナ、もとい初春。初春の向こう側にいる白井は視界に入れない。

あー、暇だ……

やることが無い。暇だ。お茶は美味しい。それだけだ。

昔からパトロールは好きだつたが、こういう捜査前の会議とか話し

合いはマジで苦手だつた。デスクワークには向いてないと改め実感。居心地悪いな若干。二人の会話は圧巻。そんなオレはアカン。オウイエー！

暇すぎて脳内でラッパーになつてしまつたな。全く。綿密に計画なんざ立てなくとも、しらみつぶしに悪そうなやつを即殺すればいいだろ。だつてこの都市の不良は大体ロリコンだし。全員涙子ちゃんの敵だ。

身体を反らし、背凭れに凭れる。凭れるというレベルじゃないくらい、後ろに体重をかけた。視界が逆さまになる。固法さんが仕事してるのが見えた。

「ちよつと、ちゃんと聞いてますの？」

視線を横にスライドすると、じつとりとした目でオレを見ている白井が見えた。

「ますの」

「ブチ殺しますわよ」

「あはは・・・」

ひでえ、罵倒が返つてきたぜ。初春も先輩にそんなこと言つちゃ駄目ですよ、とか擁護してくれよ。何つー模範的な苦笑いしてやがる。「聞いてるつづーの、聞きまくつてら。アレだろ、アレ。ロダンの有名な彫刻である考える人は、実は考えてない人らしいな。アレは見てる人らしいぞ」

「何の話ですかそれ・・・」

「初春、その猿から離れてくださいまし。わたくしがブチ殺しますわ

」

白井の目が本気と書いてマジ。わよ、じゃなくて、わ、になつてるし。あのジョークみたいな矢に指掛けてやがる。つかそれ装着する位置ミスつてんだろ。見たくもないパンツがあわや見えそうだし。しゃあねえな、無為にバトルのは面倒だから真面目モードになりますか。あと、血がのぼつて頭が回らなくなりそうだし。

そう考え、オレは姿勢を正した。そして二の方を向く。

「ジョークだよ、ジョーク。JJK」

「じえーじえーけー？」

「ジャッジメント・ジョーク。おいおい研修期間で習わなかつたのか

? 風紀委員にやユーモアも必要なんだぜ」

「ほへえ・・・白井さん、そうなんですか?」

「そんな男の話は、ばか正直に聞かなくていいですわ初春」

おーこええ。男子三日会わざれば刮目して見よとは言うが、女子月日経てば反抗期に入るとも言うべきだろ。オレへの当たりが強い。せつかく固い空気を緩和させる役割を演じてやつたつーに。

「冗談はさておき・・・決まつたか? やりかた」

「ええ、どこの誰かが静かにしていてくれたお陰で、すんなりと決まりましたわ」

「よせやい。そんな褒められると照れちまうよ。オレのお陰じやない・・・他でもないお前らの功績さ」

「やつぱりブチ殺しますわ!」

「し、白井さんっ! 落ち着いてください!!」

葉巻でもありやハードボイルドに決められたのに、湯呑みじやしまらねえな。白井はわんわんうるせえし。

「ハーッ・・・ハーッ・・・」

「うう・・・板挟みにされてる中間管理職の人の気持ちが分かりました・・・」

さすがにふざけすぎたか。反省。この事件は涙子ちゃんの身の安全にも関わるし・・・真面目にいこう。えーっと、これがプリントした書類か。えつと? ふむふむ。

「・・・もういいですわ。真面目に対応するだけ無駄ですの。わたくしはもう要点しか言いませんわ。いいですか? 方法は――」

「今から約一時間十分後、この路地・・・だろ?」

「わわつ、ちゃんと聞いてくれてたんですか?」

書類を見る限り、一連の事件とは無関係に見える地点を指で示す。初春は驚いたような顔でオレを見た。白井は言わずもがな、渡柿を干さずに生で食べた顔だ。

「まあオレは、こう見えて、風紀委員トップの業績を上げたスーパーメ

ントだからな」

「それジヤツジ省略する必要ありますか？」

「佐天くん、その言い方だと会社員みたいになつてるわよ」

「あ、いつの間に」

不意に聞こえてきた声に振り向く、そこには何を隠そう固法さんが立っていた。

「……で、何でそこになると思つたんですの？」

「そりや、こういうことさ。つまりは」

ギロリと射殺さんばかりにオレに向けられた白井の視線。説明しろ、と言つてくる。なに簡単なことさ、そう言わんばかりにオレは地形図をトントンと指で叩いた。

そしてペラペラと説明する。ペラペーラペラペーラ。その内容は省略する。書くには余白が少なすぎるし、腱鞘炎になりそうだ。べ、別に面倒臭いとかじやないんだからね！

「おー、凄いです！」

「さすがね」

「く・・・認めたくありませんが・・・」

「この短時間でそこに至るとは・・・やはり天才か・・・」

「そんなこと思つてませんの！」

「佐天くん、そういうのは自分で言わないの」

称賛の嵐、まるで主人公みたいだな。ここで言うべきは、え、オレ何かやつちやいました？ だつたか？ 白井を弄つてる場合じやなかつたぜ。

「ならもう作戦はバツチリね」

「はい、もうバツチリです！」

「ま、俺一人でも充分なんすけどね・・・」

「それはわたくしの台詞ですわ！」

茶を啜り、憤る白井を無視して室内に備えられた時計を見る。まだ作戦までは時間が空いている。なら、思い出話に水を与える花を咲かせますか。

「なんですか・・・気持ち悪い顔をして」

おつと、これから起ころうだろう愉快なことに対する気分の高揚が顔に出ていたか。しかし白井、オレを怒らせていいのか？

「初春、これを何と心得る？」

どこからかオレは紙をピツ、と人差し指と中指で挟んで取り出す。その紙は写真だ。とびつきりの写真だ。初春へと差し出した。

「へ、何ですか・・・か、可愛い！」

「どれどれ・・・本当ね」

予想通りのリアクションありがとうございます。くつく、これが白井を責めるのに最適な方法だろうな。

「二人で何を見てるんです・・・のつ?!」

「白井スペシャルエディション、小五編。まだまだあるぞ」

「いつの間に撮つてたんですか!? ちよつ、やめてくださいまし!」

写真に写っているのは研修中の白井、つまりは二年ほど前だ。カルガモ時代だ。訓練で疲れ、居眠り中のところを撮つた写真だ。そしてまだまだあるぞ。

「み、見せてください！」

「しようがねえな。ほらよ」

「ほらよ、じゃありませんの！ 肖像権の侵害ですわ!!」

小判をばらまく石川五右衛門の如く、オレは写真をばらまいた。歩く白井に走る白井、オレの後を追い掛ける白井、どれもこれも悪魔に大ダメージを与える、破魔札だ。

特にこのオレに頭を撫でられてるのなんて、今では屈辱以外の何者でもねえだろうし。はは、ざまあ！

そして作戦時間、目的地へと向かう時には白井はどんよりと疲れ切つていた。どう見てもオレの勝ちだな。あつはつはー！

人通りの多い道を歩く。

人口密度の高い、赤みがかつた夕暮れ時の道。

部活帰り、夕飯の買い出し、友と語らいながら店探し、などの様々な目的で歩く学生たちを尻目にオレと白井の一人は目的地へ歩いていた。

二人は歩いていたと言つても、仲良く隣同士なんてことは当然ながら全くもつて無い。

涙子ちゃんに彼氏が出来るレベルであり得ないのだ。

いや待て、この例えは適切じやないな。みんな分かつてるとと思うが涙子ちゃんは可愛い。とても可愛い。生まれる時代が違ければ十字教に代わり、涙子教が今の世界を席巻してたに違いない程度には可愛い。いや十字教なんて比にならない。対抗勢力ゼロの世界どこの国に置いても、人種関わらず涙子教に入ってるくらい可愛い。

だからこそオレがさつき言つた彼氏が出来ないとは、涙子ちゃんがモテないとかでは無く、高貴すぎて最高嶺の花的な意味で手を出せない存在と言う意味だ。

涙子ちゃんがモテないとか可愛いとか、そういう意味で捉えたやつは即殺対象なので宜しくウ。

さて、長々と語ったわけだが

つまり正しい例えで言うと

涙子ちゃんに告白しようなんて考える自身の低俗さと立ち位置と不釣り合いさを知らない不届きな男が現れ、そんなゴミ屑をこのオレが涙子ちゃんに想いを告げようなんて不敬な行動をする前に即殺しないレベルにあり得ない、になる。

つまりは万に一つ、億に一つ、無量大数に一つにあり得ないので。

それくらい、オレと白井が仲良く談笑しながら寄り添い歩くのはあり得ない。

少し前に白井の背中がある。それを不本意ながら追いかける。そうやつて目的地まで無言で歩く。

さて、何故だろうか。普通ならすれ違う人と肩がぶつかりそうになる程度に人の多いこの時間帯なのに、誰ともぶつからない。その理由は一つ、きっと白井から滲み出る謎の威圧感だ。

周りがオレたちを避けている。白井はモーゼだつたのかよ。チラチラと向けられる視線は、カツアゲされてる最中にも似てるな。

通報するべきか？

どうしよ。

気の毒に。

関わらないどこ。

くわばらくわばら。

みたいな色々な意味合いのこもつた視線たち。いや似てるだけでもつと違う意味での視線だろうけど、戦々恐々的な感じの。

そんな物々しい雰囲気の中で、多数の視線の中で、白井の後をひたすらに追うこの状況。

オレを堂々としたストーカーと勘違いする人間も出そうな絵面だが、腕につけていた腕章のお陰でそんな不名誉はどうにか手に入れずに済んでいる。

これ常人なら胃が裏返つてゐるだろうな、陸で溺れそうなくらいに重苦しい。あの百獣の王ライオンをもつとしても、脱毛症になるんじやないかつつーレベルのストレス。心なしか周りの奴らの顔色が悪い気がする。

ん、あれ？

気付くと目の前の白井の背中が無くなっていた。視線を右往左往と動かす。白井の髪だけが視界の端で見えた。

あ、いつの間に。もう着いてたか。

目的地の路地。そこへと向かう小さな空間が建物と建物の間にぽつん、と空いている。正規ルートでは無い裏道。そこを歩く白井の背中が見えた。

当然ながらオレも同じように、その狭い道に入つた。健康的な男子高校生の体格にはその道は合わず、壁に肩が擦れる。

当たり前だがこんな場所をご丁寧に掃除する機械も、用務員もいな

いので、埃だらけの道に足を取られそうになり

「——づあつ！ つ！ つ！ いちー···」

そしてどうやら鉄パイプ的なものが地面に転がっていたらしく、甲高い音が裏道に響き、爪先に鋭い痛みが響いた。つまりは派手に蹴つた。

オレはその場でぴょんぴょん、と片足を押さえながら跳ね、痛む指先、というより靴の先をさすりながらそこに息を吹き掛ける。そうしていると前方から謎の威圧感が。

霞み潤む視界を頼りにそちらを向くと、白井がそれはもう虫を見るかのような目で、オレを睨んでいるのが見えた。

「少しは静かにしていただけませんの？」

「···不可抗力だ。オレが進む道を阻んだほうが悪い」

「注意力が足りてませんわね。足元がお留守ですわ。いえ、頭の方もお留守の間違いでしたわ」

こ、この女は···

目の前で痛みを耐えてる人間に對して容赦なく毒舌での追い討ちを掛けたなんて、悪魔じやねえのかコイツ。風紀を守る前に人道を守れよこんなにやろう。涙子ちゃんみたいに慈しみと慈悲の心を覚えろつづーの···

しかし、このまま言われっぱなしで終わるオレでは無い。少し先进むと更に狭くなる道。今までのよう普通に歩けるスペースでは無く、横向きになつて歩く必要のある窮屈な狭さ。

それでもスタッタ、と先に進む白井。オレはここで反撃に転じる。返事をせず、黙つていた口を開いた。

「悪いな。お前みたいなチビと違つて、この道は俺にや狭すぎるんだわ。すげえなお前。なあ、白井。良くこんな狭い道を何不自由なく歩けるよ。つつかえがねえんだもん、当然か」

「···喧嘩売つてますの？」

ギロリ、と鋭い視線が刺さる。

「まさか、一時的つつても天下のふーキーーんだぜ？ A^{ダブルエー}A^{ダブルエー}ガンダム。喧嘩なんざ買うことも売ることもねえさ」

「うふふ、そーですわよね。わたくしも遺憾ながら同じですわ、類人猿」

」

「あつはつは・・・」

「うふふ・・・」

互いに笑い始める。狭い道に笑い声が大きく響く。どこまでも行き渡りそうな二人の笑い声。

「あつはつは・・・あははつ・・・！」

「うふふ・・・うふふつ・・・！」

・・・・・・・

『 ぶちコロす（しますわ）ツツ!! 』

目の前から一瞬にして消え、そして上から聞こえてくる声。能力を使つた白井。

オレは盛大に迎え撃つように拳を突き出し——

「ビン・・・ツ！」

「ゴツ・・・ですの！」

——白井の手を握つた。

シユンツ！ ピシユンツ！

刹那、奥深くから風を切り、こちらに向かつてくる何か、それが暗闇に光る。

それらはオレに当たらず路地を通り抜けていく。打つて変わつて広々とした視界。瞬間移動。俯瞰的に路地を見下ろす。一瞬にして左右の建物から逃れ、上に避難してやつた。

表通りに被害がいかないよう、勢い良く進むそれらに強い重力をかけた。中規模の爆発が起きる。件の高位能力者たちのものだらう攻撃。オレたちを生意氣にも狙つてたみてえだが、残念ながら地面とキスで終わつたな。

オレたちはそのまま屋上に着地し、下の様子を眺めるように見下ろす。暗いのもあつて、避けたのを見られてはいないらしい。数人の男たちの嬉々とした声が微かに聞こえてくる。

「とりあえず作戦

「成功、ですわね」

まさにとらぬ狸の皮算用と言える眼下の光景。仕留めた獲物を確認するように狭い路地に入つていく男たち。白井は屋上の端に腰掛け、脚を揺らしながらその様子を見ている。

オレは呆れながら、白井はつまらなさそうに「こんなに引っかかるとは」

「まだまだですわ

自分から動きの制限される場所へと入つていく姿は、酷く滑稽につる。罠にかかるとは知らず、哀れなもんだ。

「いやあ、入念に撒き餌を放つた甲斐があつたな」

「ですの」

これまでの行動を思い返す。

わざと人目につくように、表通りを歩いていたのも

「にしても風紀委員つてえのもザルだな。まさか計画が筒抜けとは思つてねえだろ」

「ああ。しかも、あんな目立つように歩いてりや対策もなおさら楽だしよ」

「あの方向じやこのルートしか無いもんな」

狭い裏道を通つたのも

「この狭さ。身動きも満足にどれやしねえ。しかもあの状況じや回避のしようがねえし」

「全員でおもつきり撃つたしな。死んでなきやいーけど」

「ま、大丈夫だろ。なにせ天下の常磐台生だぜ？」

その狭い道で喧嘩をしたのも

「てか俺たちすげえよ！ 常磐台の風紀委員ブツ倒したんだぜ！ あの有名なテレポーターを！」

「勝手におつ始めてくれて幸運だつたな。あれなら避けれれる筈がないぜ」

「油断大敵つつーやつだ！ くつくつく！」

「しかもあれ、もう一人つてあいつだろ？ 最強の大能力者だつけ？」

「俺たち有名人になれるな！ ただの風紀委員じゃなくてめちゃくちゃ強いやつらブツ倒してやつたんだ！」

全てこの状況にするための布石。

「面白いくらいに上手くいきましたわね」

「あーいう輩の行動パターンは読めつからな。おおかた、無能力者ばかりターゲットにした卑怯ものって言われてる現状に、不満があつたんだろ。高位能力者つてのは大抵プライドが高え奴らだからよ。こらで有名な奴を倒して名を上げてやる、つて思考に陥り易いのは目に見えてら」

まあ、ここまで上手く釣れたのは驚きだ。我ながら自分の演技力の高さに笑いが止まらないな。すでに自分たちが上手く身動き出来なくなつてるじやねえか。油断しきつてなんあ。獲物を仕留めた後だ

し、弛緩しちまうのはしようがねえけど。

携帯片手に煙の上がってる場所へ向かう男たち。倒れてるだろう
オレたちを撮影して、SNSで拡散でもするつもりか?
つたく。しようがねえ奴らだ。

コキ、コキ、とオレは首を二度鳴らす。

「さてと、そんじやま・・・お掃除のほうでも、始めていきますか
」

「さてと、そんじやま……お仕事のほうでも始めていきますか」
コキ、コキ、と二度首を鳴らしてから、氣怠げにそう呟いた。眼下の男たちが驚異になりうる可能性は殆どゼロからもう、ゼロに変わっている。ミジンコ並の敵だ。秒で仕留められる。

しかし、念のため、行動する前に改めて人数の確認でもしておくか。一人でも漏らしたら恥だし。

「ひーふー、みー・・・、フオー、ファイ・・・」

えーっと・・・六人か。ぬるいな。

「しら 「言われなくとも分かつてますわ」

・・・最後まで言わせろよ。せめて名前くらい。そんな食いぎみに被せてくんじやねえっての。

全く可愛げがねえ。涙子ちゃんをすこしゃあ見習えよ。

オレは溜め息をつきながら、頭をガシガシと搔き回した。すると、何らかの違和感が身体を巡る。なんだ?

・・・良く見ると白井がチラチラ、とオレを見ていた。暗に何か伝えようとしてつけど、コイツテレパス念話使いじやねえから良く分からん。中身の無いむず痒さと違和感だけが、白井の視線から生じている。ハツキリ言うと、居心地が悪い。

白井をガキの頃から知っているからこそ、こいつの性格からして、このまま無視を続けてもこの状況が進展しないのは、明白に分かり切っている。気乗りしねえが、オレから切り出すしか無いか……

「何だよ」

「手を出さないでくださいまし。わたくし一人で終わらせますわ」

何を言うかと思えば、今さらそれか。そりやオレの台詞だつづりの。オレなら秒殺できるし。

「わたくしは風紀委員ですの」

「んなの知つてら。わがまま言うなよ。それならオレだつて一人で出来る」

「そんなのわたくしも知つてますわ」

「じゃあ何だつ 「ここ」で見ていろつて言つてんですの!!」

な、何だよ？ 情緒不安定かよ？ いきなり大声出して・・・下に聞こえてねえか？ バレたら意味ねえぞ・・・

ホツ・・・バレてはねえみたいだ。にしても、何を怒つて・・・

「わたくしは風紀委員ですの」

「さつき聞いたつて」

「あなたは『元』風紀委員。いわば部外者ですの」

「どうあーかーらー、何で今さら？ それならもつと最初の段階で言えよ固法さんに」

ほら、こんなこと言い争つてる間にもう少しで爆心地着きそうだぞ アイツら。さつさと始め・・・

「わたくしはもう、昔のわたくしじゃありませんわ」

飛び降りようとした瞬間、聞こえてきた言葉。何らかの決意を込めた力強い二つの瞳がオレへと向けられる。途端に金縛りにあつたよう、ピタッとオレの身体は動かなくなつた。いや、動けなくなつた。

「白井・・・？」

「あの頃のように・・・、無いんですけど」

自分の口腔内に言葉を留めるように、モゴモゴと話す白井。不明瞭だ。途中の声が良く聞こえない。だけど、『何て言つた？』なんてそんな、追及することは出来ずにいた。

今のは白井にそう聞き返すのは、何故だか憚られる。

何か秘めたるものが、譲れないものもあるのか。オレはそれが分からぬほど馬鹿じや無いし、それを聞くほどデリカシーが無いわけでも無い。

「・・・はあ」

仕方ない、花持たせてやつか・・・初春じやないけど。

「やれよ、一人で。良くわかんねえけど、やりたいんだろう？ じゃあやれよ。俺は物理的にも、日本語的にも、立場的にも、ここで高みの見物しててやつからよ」

「ええ、やらせてもらいますわ」

オレは座る。落下防止のための柵を背凭れに、まるで自宅のソファ

のようになりラックスしながら、高所恐怖症なら足がすくんで汗がだらだらになりかねない場所で、難なく座る。

隣で白井が飛び降りた。この都市以外でなら自殺志願者と見紛われる勢いで、屋上から飛び降りた。

スカイダイビングもかくや、降下中の白井の背中をぼんやりと眺める。すると、パツとその姿がオレの視界から消えた。

『テレポート瞬間移動』

とんだチート能力だと改めて思う。瞬間移動とかずるくね？ 脳に釘とか、どんな小さいモンでもテレポートされたら終わりじゃん。その場でお陀仏じやん、くわばらくわばら。

「なつ？ んだこりや!?」

「げつ、まさか?!」

最後尾とその一個前。未だ狭い路地でもたもたと動いていた無防備なウスノロたち。紙を画鋲で固定するかのように、昆虫の標本のように、その二人の袖や裾が金属の矢によつて、壁にガツチリと縫い付けられる。身動き一つ取れない様子だ。自慢の能力も満足に行使できないらしい。

「な、なんだよ！？ どうかしたか！？」

後ろから聞こえた仲間の声に、やつと異常に気付いた男たち。爆心地に背中を向ける形でその場で四人は振り返ると、手を突き出すように構えた。その手はすぐに光る。

「くらえつ！」

『オラあああツツツ!!』

恐怖心にかられたのか仲間も気にせず、ただそこにあるだろう驚異を排除しようと能力をブツ放つ男たち。これを見る限り、発火や念動みたいな感じのが使えるみたいだな。

一般人ならひとたまりもないだろう複数の力が混ざった奔流が、グングンと路地を直進している。

白井は余裕で避けられるだろうけど、白井にやられた二人はそもそもいない。重傷者を出すのは面倒だ。しゃーねえな。これは手伝うに入るか？ まあいいや。おらよ。

「おおおおおい!! まつて!!」

「バカヤロー!! 死ぬううう!!」

情けなく泣きわめく声がやかましい。さつきと同じように当たる直前で、圧を掛けた。落ちすぎるフォーカスに似た軌道で、地面上に激突、奔流は砂埃を上げて爆発を起こす。

埃や鉄屑はかかっけど、まあ直撃するよりマシだろ?

そう思つたが、当人たちには恐怖から、それを感じる間も無く既に意識を失つているようだ。口からは蟹のように、泡を吹いている。

や一つぱレベルが高くて、自分より弱いもんを虐める目的にしかそれを使えないチキンどもだな。やられる側になれば、こんな簡単に氣絶するとは。

無様な屍を見て呆れている間にも、状況は着々と進行しているらしい。戦いの余波とも言える騒音を現在進行形で奏でている方向へ、オレは視線を向けた。

そこでは白井が舞つていた。そんな風に見えるほど優雅に、そして圧倒的に、躊躇している。小学生のガキ v.s 虫レベルの争い・・・むしろ争いにもなっていない。負けるビジョンが見えねえ。むしろ相手側に対しての慈しみの心さえ芽生えそう。

オレが風紀委員を抜けてから、更に強くなつてら。てか、強くなりすぎじゃね? スライムがスライムナイトになつたくらいの変わり様なんだけど。

「クソッ、ちよこまかと!!」

「こんなん当たるわきやねえ、どうすりやいい!!?」

「当たらねえなら、当てるだけだ!! うおおおおお!!」

いくら火球を飛ばしても掠りもしない事に苛立ちが募つたのか、男は拳に火炎を纏わせ「ファイアーパンチッ!!」と何の捻りも無いネーミングセンスの必殺技を繰り出した。

しかし、当然ながら、全くもつて当たるわけが無い。だつて、物理的に距離が足りてねえし。

宙に浮かび、テレポートを行うケーシイに対して単純な拳による打撃は

こうかが ない みたいだ

「うおおおおおおおおツツツツツツツツ!!!!」

「キーキー やかましいですわ」

「ぶごーつ?!?」

うわっ、痛そ。パンチってやっぱ隙が大きいな。当たらなきや無防備になるだけだ。

にしても、・・・顔面にドロップキックはどうよ？ 顔に足跡ついでつし・・・鼻が折れてないの祈つとく。

「挟み撃ちなら一発は当たんだろ!!」

「その顔に消えない傷跡つけてやる!!」

「あ、待て！ そいつテレポーターだから、忘れてんの!?」

蹴られぐつたりと地面に倒れ込んだ男の傍らに、ほぼ同時に着地する白井。前と後ろを挟まれている。やっと静止した白井を見て、油断したのだと勘違いしたらしく、同時に攻撃を行う。

それが当たる寸前に白井の姿が彼らを嘲笑うように消え去り、結果として同士討ちを誘発した。

「あ、わりい。俺死んだ――――」

「のああああ?! ごふつ・・・!」

「このバカッ!!」

一人には念動力で飛ばされた鉄の塊が盛大に直撃し、もう一人はアイキヤンフライと空を飛ぶ。エアロショーダー 風力使いか？ あ、てか痛そ。受け身取らずにコンクリートに落下とか、大丈夫か？

「後はあなた一人ですわね。痛い目見たくないのなら、速やかな投降をオススメしますわ」

「・・・甘く見てもらつたら困る。俺とてレベル3のはしぐれ。誇りはある。戦わずして、負けは有り得ぬのだ」

何か急に強キャラ感出してきたぞアイツ。口調迷子か。何だそのファイティングポーズ。お前さつきまでの見る限り肉体強化系では無かつたる。

白井は白井でそんな心底うざつたそうな顔してやんなよ。もつと真摯に対峙してやれよ。もとい退治してやれよ。

「ぬあああああ!!!!」

自分を鼓舞する雄叫びを上げ、顔の前で両手を合わせ、そいつが何かしている。何かは分からん。

白井は興味無さそうに、ふあさつと一度だけ髪をなびかせる。そして、脚に触れた。

カンツ、と火花を散らせながら甲高い音が路地に響く。

その音は男の足元からだつた。正確には爪先の、ほんの少し手前。チョークにも似た金属の矢が、コンクリートに突き刺さっていた。もし白井がガチだつたら、指が焼き鳥みたいに串刺しになつたに違ひない。

「お繩につかせて頂きます！　どうぞ!!」

途端に両手を差し出し、自ら手首を晒して手錠を掛けやすいようにしたのは、今の今まで雄叫びを上げていた輩だ。

諦めはやつ。おい、誇りはどうした。埃の間違いかよ。

「ええ、それでいいんですの。」

白井が手錠を掛けるとこを見てから、オレはスマホを取り出す。まあ、既に解決済みとは向こうに伝わってると思うけど。

「終わつたぞ」

『はい、もう知つてます。いま警備員の方々がそつちに向かつてるはずです』

「あ、そう。仕事はえーな」

『それにしても・・・良かつたです。私てつきり白井さんと本気で喧嘩してるとかと思つて・・・心配しちゃいましたよ』

「アツハツハ、演技力の高さには自信があつからな・・・つと、まあ心配かけてわりいわりい

ホントは最初の予定とは全然違つたけど、熱の入りようとか・・・白井普通にオレ罵倒してきたし。てか足いつてえ。あの高さから飛んだら当たり前か・・・

「もう少しで来るつてよ」

「分かつてますの」

スマホを前に突き出しつつ、全員の拘束を終えて手持ち無沙汰な白井へと話し掛ける。

『ふう、白井さんも人が悪いですね。あんなチクチクした雰囲気は、そこに居なくても胃が痛くなりそうでしたよお』

初春は明確に安堵の思いを込めた声色で、深い息を吐きながらそんなことを言う。

「敵を欺くにもまず味方から、と言いますのよ。初春」

『良かつた。本当の本当に、ただの演技だつたんですね』

また初春が深く息をついた。

「ああ、モチ。そりや演技に決まってるじやねえか。な？」

「ええ、勿論ですわ。決してわたくしはこの男をノータリンと何て、万に一つも思つていませんの」

「おう、オレも決してこいつを高慢ちきで一部が貧しい女とは思つてないぜ」

「奇遇ですね、類人猿」

「ホントだなAA」

・・・・・

『あの・・・本当に演技だつたんですよね・・・？』

嵐の前の静けさの後、か細い声がスマホから聞こえてくる。それに毒氣を抜かれたように、身構えようとした手を収める。白井も同じだ。

「純度100の演技だつてえの。純然たり明白で分かり切つた演技だ。さて、もうお巡りさんも来たことだしオレは帰るぞ。もう切るぞ、さいなら」

少し遠くから足音が聞こえた。一人や二人でなく多数の足音だ。オレは通話を停止しようとスマホに手を伸ばす。

『あ、はいっ！　お疲れさまでした！　また今度！』

「またも今度もねえよ。そんなひよいひよいボランティアなんてしてられつか。何よりも優先したい天命があんのに」

『佐天さんのスト』

「愛の守護者、だ！」

忌々しいその単語を聞くより前に、勢い良くスマホを指で突いた。初春の声はパツと聞こえなくなつた。

「そんじや、後は任せたぞ」

「・・・」

くるつと方向を転換し、足音の方へと歩いていく。つまりは大通りの方向だ。何歩か歩いてから、いやに背後からの視線を感じる。無視は別に気にしないが、この違和感はなんだ。

まさか・・・闇討ちか？

「おい、何か言いたいことあんの？」

すぐに振り返ると、俯く白井が見えた。オレは声をかけた。

「別に・・・何もありませんわ」

「嘘つけ」

はあ・・・何だ？ 一体なんだつてんだ・・・

いや、待てよ。この状況には既視感が・・・

一、二時間ほど前の会話を思い返す。初春に見せた写真。白井の研修時代。まだ可愛いげがあつた時期だ。

それを思い出すと、途端に目の前の白井とその時期の白井が重なつた。フラツシユバツクつてやつだ。低い身長がもつと低く見える。しゃーねえ。白井の頭へと手を伸ばす。

「良くやつた。ナイスファイト」

くしゃ、と少し乱雑に髪を撫でる。多分この状況は、あの写真とぴつたり一致するだろうな。

「見ないうちにお前も立派なジャッジメント」

「ふんっ！」

労いの言葉をかけようとした瞬間に目の前にはためくスカートと、靴底が見えた。そこでオレの視界は暗転する。

「淑女の髪に許可も得ず触れるなんて、万死に値しますわ」

遠くでそんな声が聞こえた気がした。

意識も暗転してきた。もう何も考えられない。

ただオレがハツキリと分かるのは、顔面にドロップキックを受けた

ということだけだった。

オレの目の前では現在、不可思議な光景が繰り広げられている。なんと、花がパフェを食べているんだ。不思議なこともあるもんだな。学園都市のマッドなサイエンティストに、是非ともこの件を研究して貰いたいもんだぜ。

「あの・・・なんですかその目」

すると唐突に花が話しかけてきた。これまた不思議なこともあるもんだな。植物なんだから、光合成で一生を終えればいいのに。

「なにかすぐ・・・わたしの尊厳を奪われてる気がします」

スプーンを咥えながら、花の根っこ部分がオレを不満げに見つめてくる。にしてもこの花は、パラスみたいな構造になつてんだなあ。可哀想に。きっとこの下の部分はいずれバラセクトみたいに、死んだ目に変わつてしまふに違ひない。寄生されたばつかりにな。お悔やみ申し上げます。合掌。

「本当になんなんですかあ・・・なんで急に手を合わせたんですか？ 敬られてるんでしょうか？」

「哀れんでんだよ」

「なんですか!? なんでそんな不機嫌なんです？」

「何でだと思う？」

「えーっと・・・」

オレの質問に目の前の花、もとい初春はパフェを弄りながら首を傾げる。何度も考へてもぴんと来ないらしい。オレはレストランに良くあるあの筒から、紙を取つた。それを初春に見せつける。

「これを見る。なんでオレがお前に奢らなきやならねーんだよ。せめて一步譲つてこつちの料金で払うべきだろ」

「それ全然譲つてくれてないじやないですか。一応、高位能力者なんですからたんまりと奨学金とか出てますよね」

「あつても涙子ちゃん以外に奢る金があるか」

紙の下の方の文字をオレは示す。その紙、いわゆる伝票。その中の割り勘としての金額を見ながら、初春はそんなことを言つた。こいつ

黒い、黒いぞ。

「まあ、もうその話はいいです」

「いやオレにとつてはまだ良くないからな」

「白井さんについて聞きたいんですけど」

「おい、オレの声届いてるか」

「なにかしたんですか?」

「ああ、したな。てか、されたな」

「え、なにをですか?」

「おもつきりドロップキックされたな。しかも顔面に」

オレは自分の顔を指差す。すぐに初春は深いため息をついた。パフエを一口食べてから、またオレの方へ向き直る。次はじつとりとした目線で。

「そういうことじやないですよ。こう・・・男女的な意味でのなにかをですね」

「オレがあいつとなにかすると思う? 今度は一步も譲らねえぞ。オレの誇りと尊厳の問題だ」

「ですよね。それならいつたい、なにが原因なんでしょうーか・・・」

「ちよつとドリンクバー行つてくる」

「ちよつと待つてください! 普通、なにがあつたんだい? みたいに聞いてくる展開ですよね!?

「その展開をブチ殺す」

「意味がわからないです!」

つたく、白井よりジユースの方が大事だつての。涙子ちゃんの話なら、断食も辞さないけど。しうがねえ、聞いてやるか。微塵の興味もないが。

「んで、何があつたんだ?」

「あの日、白井さんの様子がおかしかつたんです」

「常におかしいだろ」

「その言葉そつくりそのまま返します」

「オレのどこがおかしいんだよ」

「話続けますね。なんというか、白井さんが気持ち悪かつたんです」

「白井に聞かれてたら、お前消されるぞ」「

「いませんから大丈夫です」

「ふーん・・・だつてよ、白井」

「へっ!」

意味ありげな笑みを浮かべて、オレは初春の後ろを指差す。顔を青くして、初春はチーターもビックリの速度で振り向いた。だけどまあ、誰もいないんだが。

「やつぱりいないじやないですか!」

「アニメだつたらいるパターンだつたんだけどな。やつぱ現実では無理か」

「もう、びっくりさせないでくださいよお・・・寿命が縮みました・・・」

「もともと花の寿命は短いから、誤差だろ」「わたし人間です!」

初春が白熱の議論中の国会もかくやの勢いで、机を叩く。じやあその花はなんなんだよ。アクセサリーの域じやねえだろ。しかしそれは言わないでおいた。

「そのですね・・・凄い嬉しそうな顔をしてたんですね」

「それのどこが気持ち悪いんだよ」

「喜怒哀楽の喜のカテゴリーに置くには、ためらうレベルだつたんですよ!」

「へえ」

「お兄さんが佐天さんを見るような目の気持ち悪さでした・・・すいません。それはさすがに言い過ぎました」

「何気なく失敬だな、おい」

ナチュラルに流れるように、罵倒が会話に入る。こいつまじで枯らしてやろうか・・・刈つてやろうか、こんにやろう。

怨恨を込めた視線を送ろうかと思つた時、唐突に初春が口を押さえた。さつきよりも顔青くね。

「うふつ・・・ちよつと、具合悪くなつてきました・・・トイレ・・・」

「それパフェの食い過ぎだよな!? オレの気持ち悪さじやないよな?」

—

「たぶんつ・・・うつ、・・・です」

「多分なんだよ、どつちだよ!?」

気になる答えだけは聞こえず、初春の背中は遠くに消えた。一人残されたオレはこのまま帰つてあいつに勘定の全てを任せた。なんて考えも浮かんだが、やめておいた。

「一気に暇になつたな」

ドリンクバーに行き、わざとどれにしようか迷う振りをしてジュー
スを入れて戻つてくるも、初春はまだいなかつた。どすんつ、と強めに座る。

永遠とも思える無駄なこの時間、何をするわけでなく、頬杖をつきメニューを眺める。暇潰しにとガキ用の間違い探しをしてしまう始末だ。しかもこれが案外、難易度高いし。

白熱熱中、二つのイラストを見比べて長い時間うんうんと唸つてい
ると、ポケットから振動が。何だ?

スマホを取りだし、某SNSを開く。グラサンシンコン変態野郎
だつた。何やら妹の自慢話だつたので、高速で長文を打ちオレも正々堂々とそれに受けて立つた。

また通知が来た。青髪オール変態野郎だつた。どうでもいい内容だつた。性癖を暴露されても困る。とりあえず妹の良さを長文で送つた。

また通知が来た。上条だつた。何やら女に絡まれているらしい。
助けてくれ、と言われてもな。とりあえず妹の良さを長文で送つた。
また通知が来た。湾内さんだつた。とりあえず妹の良さを長文で送つ・・・りかけた。すんでで止めた。何気ない世間話をした。遊ぶ約束もした。断れる流れでは無かつた。

通知が来ない。オレは間違い探しの答えを得ようと、ググろうとし
た。

その途中で、

また通知が来た。腹黒フシギバナだつた。間違い探しの答えが書かれていた。腹いせに妹の良さを長文で送つた。

スマホをしまい前を向くと、やつぱりいつの間にか初春が戻つていた。

「何てことしゃがる」

「それ結構難しいですよね」

オレは怒りに歯を食い縛つた。初春は反省の色も見せず、悪びれた様子も見せず、オレの手元のイラストを指差しながらそんなことを宣^{のたま}つた。

「分かつてるなら邪魔すんなよ」

「スマホ見てましたよね」

「もう少しでいけたつついに」

「絶対嘘ですね。j o s e p h, s 間違い探し で検索しようとしました」

「な、見てたのか！」

「バレバレですよ。あとこれ、なんなんですか？」

初春がスマホの画面を向ける。そこには、オレの送った涙子教の聖典が写っていた。

「なんだかんだと聞かれたら」

「答えてください、情けない」

「答えてあげるが世の情けだろ」

邪悪な改変しやがつて、ロケット団に謝れよ。悪の組織より悪だろこのフシギバナ。

「そんなことより、白井さんですよ！」

「そんなにオレがドロップキックされた話を掘り返したいのか？」

「ドロップキックではあの顔とつじつまがあいません。他になにかありますよね？」

「とは言われてもなあ・・・後なんかあつたとしたら、ちょっと撫でちまつたくらいだし」

「ん、今なんて」

「いやだから、こう・・・労いの意味を込めて、昔みたいに撫でた。そ

したらマジギレされて顔面を蹴られたって話だよ 」

「あー、謎は解けました 」

「嘘だろ 」

え、なにこいつ名探偵？ あのパソコン使いこなす能力といい、哀ちゃん的な感じ？

「やつぱあれか？ 憎きオレを蹴飛ばしたから、スッキリして喜んでたとか？ グヘヘ、つて悪い笑顔で喜んでたのな？ そんなんだな？」

」

「ああもう、それでいいですよ 」

「おいぜつてえ違えだろ 」

「そうとわかれば、こうしてはいられません 」

「被害者のはずのオレはどうも分かつてねえんだけど 」

「パフェ、ありがとうございました 」

「奢るつて言つてねえんだけど 」

自己完結を終えた初春、オレに頭を下げてから席を立つて歩き始める。ジュースを飲んでから伝票を持ち、その背中を追いかけ、レジへと向かつた。

「佐天さんには優しいお兄さんつて、伝えておきますね 」

「ははっ、気にすんなよ。安いもんさ、このくらい 」

「扱いかたがよくわかりました 」

「え、今なんて 」

「いえ、なにも 」

爽やかな笑顔で、初春の分まで会計を済ませる。途中で何か聞こえた気がしたけど、気のせいだつたか？

「あ、また暇なときはぜひ支部に来てくださいね！」

「気が向いたらな 」

「絶対ですよ！ 」

店を出てきて帰るかと思つたら、初春がそんなことを別れ際に言つてきたので、オレは行けたら行くレベルで便利な言葉を返した。去つていく初春の背中を眺め、オレは思つた。

最近、涙子ちゃん成分足りてねえつ！

ああ、西日が目に染みる。学校終わりのハイテンションな雑踏が煩わしい。目の前を通る人、人、人の圧巻と言うべき光景がもう、紫外線よりも目に痛い。

さて・・・現状を説明するか。

オレは今、うざつたいほど混雜している放課後の繁華街にいる。歩いてはいない。近くにあつたビルの脇に立っている。詳しく言うと、人を待っているんだ。

お察しの通り、その相手は何を隠そう湾内さんだ。あれやあれや、いつの間にか前回の話で遊ぶ約束をしていた、あの湾内さんだ。ん、いま普通に言つたけど、前回つてなんだ？ まあいいや。

あの後断ろうと思つたんだけど、何か忍びなかつた。と言うより、やつぱ無理な雰囲気だつた。てことで、待ち合わせ場所に決めたこの場所にて、オレは今現在、湾内さんを一人暇しながら待つているところだ。

届いたメールによると、常磐台は終わるのがオレの学校よりも少し遅かつたらしい。心からの謝罪の気持ちのこもつた文字の羅列。そんな湾内さんからのメールを眺めつつ、オレは今日のプランを今更ながら練る。

そして思つたんだけどさ・・・

今時の中学生つて何して遊んでんだ？ 全く持つて分からん。しかもお嬢様相手だし、生まれも育ちも平民、小市民なオレが満足のゆくエスコートを出来る気がしない。

率直に言うと帰りたい。もう猛烈に帰りたい。しかしながら誠意のこもつた謝罪のメールを読んだ手前、『帰ります』なんてメールをオレ側から送るわけにはいかない。だつてもんすごく良心が痛むし。はあ、どうしたものか。適当に近くの店とか調べてつけど、あんまめぼしい場所もねえし。

もう公園でいいか？ オレの缶蹴りテクでも見せる？ 相手が小坊の鼻つ垂れなら、それでオッケーなのになあ・・・流石に中学生に

はなあ・・・

深い深い溜め息が漏れる。オレは頭を抱えた。良案が思い付かない。オレは諸葛孔明になれないのか。こんな難題をどうしろつてんだ。まだ白井と喧嘩してた方がラクつてもんだ。

つーかさ、つーかよ？ 前提から覆してわりいけど、花の女子中学生がオレなんかと遊んで楽しいのか？ わつかんねえなあ、お嬢様の考えることは。

紅茶の造詣に深そうで、日傘が似合いそうで、花に優しく話しかけてそんな典型的お嬢様が、オレみたいな道端の小石と遊ぶ意義が分からん。お礼なら別に、前でので済んでるし。

「も、申し訳ございません！」

うんうんと思考回路をフル活用している途中、息の切れた荒い呼吸、焦りを含んだ悲痛な声、つまるところ誰かの謝罪がオレの思考を中断させた。

十中八九、湾内さんだ。十中一の大穴で、白井かもしれない。今までの行いをオレに謝りに来たのかも。・・すまん、ありえないな。妄想でもありえない。まず声も違うし。

オレは顔を上げると、出来る限りの爽やかな笑顔を作った。いちおう高位能力者だし、研究所に住み込みしてたつづー強キヤラ的な過去のあるオレ。笑顔には自信があるぜ。この笑顔で修羅場を生き抜いたことだつてあるんだ。キラツ。キリツ。

「誘つた手前、佐天様をお待たせしてしまって・・・っ」

「いや、湾内さんは悪くないって。それに・・待つてる時間も、デートの内つて言うだろ？ ゆっくり来てくれてよかつたのに、わざわざ急がせちゃつてゴメンな」

潤んだ瞳に乱れた髪、滝のような汗。今にも額を地面に擦り付けそうな勢いの湾内さんがそこにはいたので、それはもう優しくオレは語りかけた。某ヒロインの名言もついでに言つとこつと。

・・やべつ。漫画そのまま引用したから、デートつつつちました。これぜつてえ引かれるだろ。

「あつ、今のは」

慌てて元ネタでも説明をしようとすると、言葉は続かない。

なぜかと言うと

「で、でーつ・・・あう・・・つ」

湾内さんがぶつ倒れそうになつていたからだ。アスファルトに受け身なしで転倒させるわけにはいかねえから、背中に手を回し、どうにかこれを支える。めちゃくちゃ熱い。顔なんて、溶鉱炉みたいに真っ赤だ。心なしか湯気が出てる気もする。

ね、熱中症か!? 脱水症状!?

「湾内さん!? 大丈夫か!? すぐ病院に——ツ！」

「だ、だいじよ、で・・・つ!?」

スマホを取り出し、119を入力しようとすると、不意に腕の中の湾内さんと目が合つた。まつげの本数も数えられそうな至近距離で。やつぱり顔が赤すぎる。

容態を確認するため、まじまじと湾内さんの表情を眺める。さらに顔は赤くなつていく。溶鉱炉どころか、太陽に錯覚するレベルだ。丈夫という単語さえ、切れ切れた。

声さえ届いてるのか不安になる。オレは更に距離を詰めた。さつきよりもなお、顔が近くなる。

すると、湾内さんが

「△〒▲ヰ▲・△#※%?」

たぶん日本語では無い、聞き取れない言語を発すると共に、爆発した。例えとか比喩表現でなく、そのまんま爆発した。もしくは噴火した。

それを最後に腕の中でくつたりと、湾内さんは力無く項垂れる。電源の切れた口ボットのようだ。

「わ、湾内さん!? おい、おおーーいッ!!」

オレは必死に語りかけるも、ついぞ湾内さんが起きることはなかつた。

ところ変わつて現在地、のんびりな雰囲気の流れる公園に、オレは

今いる。

人通りの多い繁華街では、ジロジロと痛いほどの視線がオレを射ぬいていた。通報までしようとする人もいたくらいだ。

まあ、しやーない。あの辺は強引なナンパスポットでもあるしな。常盤台の制服を着た湾内さんを、ガクガクと揺さぶるオレが傍目には不審者に見えたのもいた仕方ない話だ。

そういうわけで、避難する目的と介抱する目的もあつて、オレは湾内さんをかついで公園に走った。

ベンチに座り、さすがに硬いところに寝かせるわけにもいかず、誰得だと思うが湾内さんに膝枕をした。風紀委員は元より、警備員に見られたら逮捕は免れない状況だったと思う。

そして今さつき、湾内さんが起きたところだ。起きたと言うより、飛び跳ねたつづー感じだつたけど。

「もう大丈夫そ？」

「は、はい・・・」

幸運にも熱中症では無かつたようで、今は顔色がそうでもない。つつても赤いことには赤いけど、しつかり返事ができるまでに回復してる。

「申し訳ございません・・・ご迷惑をおかけして・・・」

しかし沈痛の面持ちをしているのが、眞面目な湾内さん故だろう。ずーん、という擬音さえ聞こえそうだ。

この状態じや、下手な慰めをしてもな・・・

なら

「うしつ、遊ぶか！ どこ行く？ オレあんま落ち着いた場所とか知らないでさ。湾内さんオススメの場所とかあつたら、聞きたいんだけど」

「当初の約束通り遊ぶだけだ。

突然立ち上がり、唐突な提案をするオレに面を食らつたらしい。湾内さんは目をパチクリさせている。

「オレが選ぶとゲーセンみたいに、ふぜい おもむき みやび 風情も趣も雅つぽさもねえ場所になりそудだし。そういうトコ、あんまだろ？」

まあでもやつぱり、お嬢様を連れていくには、場違いな場所しかオレは思い浮かばない。なので、いつそのこと湾内さんに丸投げしそう。茶道教室でもオペラでもどこでも甘んじて受け入れる覚悟だ。

「い、いえっ・・・そんなこと・・・ない、ですっ！」

しかし、湾内さんはそんなオレに気を遣っているのか、普段のか細い声とは違う、はつきりと意思のこもった声で否定をした。

「さ、佐天様が・・・お選びになつたのなら・・・ど、どこでも・・・な、なんてええ子なんだ・・・オレなんかにそんな気遣いしてくれることない。白井に少しでも真似してもらいたいもんだ。本当に同じ学校なのか？」

しかしこうまで言われて、年下に言わせといて、丸投げするほどオレはへたれじゃない。なら、やつぱりオレがエスコートしよう・・・「わかった。湾内さんの期待に応えられるかは分からぬけど、オレに任せてくれ。じゃあ、行こうか――」

いざ行かん！

「――ゲーセンへ――」

しゃーない。ゲーセンしかやっぱ思い浮かばなかつた。

ゲーセンつづーのは、言つてしまえば俗物のメルティングポッドだ。

彼女連れでのんびりイチャイチャしながらゲームに励んでいる奴もいれば、キレッキレの動きで何か舞つてる奴もいるし、何かめつちや絶叫してる奴もいるし、自分の腕の無さをゲームにぶつけ暴れる奴もいれば、それを止める店員も当然ながらいて、もうなんつーかアレだ。

ケイオスな空間だ。

オレ同伴ならまだしも穢れを知らない涙子ちゃんには、付近10キロ範囲にも近付いて欲しくない。誠心誠意、全うに穢れ切った濾み深い空間だ。

チャンチャンチャカチャンチャカ響いているBGMと言うには主張が強すぎる電子音たちには、耳がめちゃくちゃ痛くなる。

さてさて、言わんでも分かると思うが・・・こんな風情の欠片も無い場所には似合わないが過ぎるのが、オレが不覚にも今日案内してしまった湾内さんだ。そう例えるなら、ドブの中に綺麗な花が一輪咲き誇っているような、とんでもない違和感。

オレは早くも後悔した。こんな犬畜生にも劣るスラム街に連れてくるくらいなら、その辺の寂れたコンビニの方が遥かにマシだ。襲い来る自責の念に思わず頭を抱えそうになるオレを許してくれ。

ちらりと前を歩く湾内さんの様子を伺う。まるで上京したての地方人のように、店内を興味津々に、不思議そうに、おろおろと見渡している湾内さん。目を離したら簡単に迷子にでもなりそうな、ふらついた足取り。

よし、こんなトコはとつと出よう。そしてオペラ座に行こう。湾内さんにはその方がずっと似合う。

そう考えたオレは目の前の背中に向け、ゲーセンから出る旨を伝えようとした・・・しかし、そんな次の瞬間、湾内さんはゆっくりとオレの方に振り返った。そのまま、湾内さんはとある方向を指差す。

「あの・・・佐天様、あちらは一体何でしょう・・・？」

湾内さんの白くか細い指が示す先、その延長線上にずでん、とふてぶてしく居座つていたのは、真四角の物体だった。

「ああ、ありやクレーンゲームだよ」

そこ行く百人に『ゲーセンと言えば?』とでも聞けば、九十人は真っ先に上げるだろうゲーセンの花形、それがそうともクレーンゲーム。因みに英語ではクローケーレーンつて呼ぶらしいぞ。これはどうでもいいな。

「くれえんげいむ・・・？」

湾内さんは不思議そうに首を傾げた。

「そ。あの上からぶら下がつてるクレーンで景品を取んのさ」

「景品をとる・・・」

にしても、クレーンゲームを知らねえなんてやつぱり筋金入りのお嬢様なんだなあ・・・住んでる世界がダンチだ。オレなんて物心ついた時にや知つてたからな。

すまん、ちよつと誇張した。でも小学生の時には絶対知つてたな。

「なんか欲しい物ある?」

「い、いえつそんなことは・・・」

オレに遠慮でもしているのか、小さく首を振る湾内さん。しかし目線はチラチラとゲームの方向に向けられてるのを見逃しはしない。クレーンゲームに近づき、ケースの中に敷き詰められている無数のぬいぐるみを指差しながら

「こ、こういうのとか、けつこー良いんじやないか?」

湾内さんに向かつて、首を捻る。

無数のぬいぐるみの内訳、メジャーなので言えば犬猫やライオン、虎、その他諸々。

マイナーなので言うと、なんだろうこいつは・・・んー、ナマコ?

うん多分、ナマコ。いや誰が取んだよ、こいつだけ異質すぎんだろ。もつと海の生物のいるケースに放つてやれよ。鯨とか、イルカとか、そういうトコに。それでも誰も取らないだろうが。

「は、はいっ・・・とても可愛らしいと思いますっ!」

「なんか好きなやついる？」

「・・・っ!? さ、佐天さ・・・！」

「いや、オレにんげんウーハー!!」

「え、なに？ 湾内さんの中でもオレは動物カテゴリーに入ってるの？ もしかしてナマコみたいに思われてんのか？」

そんな物凄い寂しさを覚えながらも、オレはツツコミを入れる。その悲しさをおくびにも出さない努めて明るい口調で、ナマコのオレはツツコミを入れた。いや誰がナマコやねん！

「す、すみません！ 申し訳ございません！ 今のは・・・っ！」

「あはは・・・気にしてねーって」

湾内さんは真っ赤な顔で、おきあがりこぼしもビックリの早さで、頭を大袈裟に何度も何度も下げている。それを見ながらオレは、これからは動物ではなくて人間的な行動を徹底することを決意した。いや別に、今まで動物みたいに生きてたつもりは全く無いし、むしろ人間としての大きな自負はあつたんだけども。

「で、どれがいいの？ やっぱ犬？ 猫？ あえてのライオンとか？」

「え、えっと・・・さ、佐天様が選んでくれたものなら・・・な、なんでもいいですっ！」

なぜか思い詰めたような目で俺を見詰めてくる湾内さん。なんかオレの拙い審美眼ごときをいやにこの子信頼してんな。

くそつ、これは責任重大・・・湾内さんに似合うのは、やっぱえーっと・・・

「・・・んー、湾内さんに似合うのは、ここには無いイルカとかだと思うんだけど・・・ほら水泳部だし、可愛いし」

「かかっ、かわっ・・・!?」

でもな、このケースン中は陸上の動物しかねえし、唯一の海洋生物はなぜかナマコだし。ホントなぜだよ。まだタコとかの方が納得できたよ。なんならクリオネでだつて納得できたださ。ホントなんでさ。そうだ、クレーンゲームなら他にもあつたよな。隣のは・・・えつ？ 何このカエルの遺棄場は・・・？ ゲコ太？ 気持ち悪っ、誰が

こんなのが好むんだよ。ナマコこつちに一緒に詰め込んでけよ。地獄の様相になりそうだけど、その方が良かつたろ。

「湾内さん、向こうの・・・」

もう一つクレーンゲームをあっちに見つけたからそつち見に行こうぜ、と湾内さんの方を向いてみるも、そこにあつたのは火山だつた。湾内さんでなく、活火山だつた。デジヤブを感じる。

「わ、湾内さん!? なしたん!?

「か、かわいつ・・・かわつ・・・」

「川井?! 川井さんになんかされたのか!? 白井じゃなくてか!?

いつの間にかただ、かわ、だか、かわい、だけを壊れたカセットテープのように繰り返すだけの存在になつていた湾内さん。正確には川なのか皮なのか、川井なのか白井なのか分からぬが、白井説をオレは推す。

きつとあの性悪ケーシイの事だから、オレの友人までターゲットにしたに違いない。くそつ、オレがゲボ太だかゲロ太だかに気を取られてる間に・・・不覚ツ!!

「大丈夫か!? いつたんここを出て」

「だ、だだだつ、だだだだいじょうぶです・・・つ!」

「いや微塵も大丈夫に見えねえって!」

「ほ、本当にだつ、大丈夫です・・・つ・・・!!」

ほ、ホントに大丈夫なのか・・・? まあ確かにさつきよりは呂律と『だ』の数が減つてゐるけども、さつき一回噴火してゐるから慣れて復活が早くなつたと、考えていいのか。なら、大丈夫と考えよう。

「そつか。じゃあ氣い取り直して、あつち見に行かね?」

「は、はいつ」

そして少し遠くのを湾内さんと見に行くと、そのクレーンゲームは幸運にも海の動物担当だつたらしい。意氣揚々とオレは自慢のテクを使つて、500円以内でイルカのぬいぐるみを手に入れることに成功した。

それを湾内さんに渡すと、オレが思つていたよりも断然喜んでくれ

た。

その後は適当に中をぶらぶらして遊んだ。店を出る時、さっきのクレーンゲームを通りすぎる最中、オレは思った。
あのカエル、誰が好むんだよ。マジで。

そんなこんなでゲーセンを出たオレと湾内さん。まだ外は明るいし、常盤台の方の門限は大丈夫そうだな。よし、ならこの辺で余裕を持つてお開きにでもして・・・

「じゃあ、湾内さんまた今度」

そう言つて片手を上げ、爽やかに立ち去ろうとしたのも束の間、「あれ、アンタ何してんのよ? こんなところで」

なんて、唐突に背後から聞こえてきた声は、良い思い出が一つもないヤツのものだつた。

「み、御坂様・・・っ!?

湾内さんが、聞きたくもないその名前を声に出す。だよなあ、やっぱリアイツか・・・

ま、まさか・・・み、みさか・・・とでも、オレ言うべきかよ。こんなちくしょう。神がいるならブツ飛ばすぞ。その座を早く涙子ちゃんにやれよ。全世界涙子ちゃんの慈愛の威光に晒されろよ。世界平和実現唯一の方法だぞ。

しかし、ここは大人のオレ。くるりとその場で振り返る。

「そつちこそ、こんなどこで何してんだ?」

御坂の機嫌を損なわないようにと嫌そうな表情一つせず、質問のみを無難に投げ返すファインプレーを披露。これによつて湾内さんの安全も確保だ。無駄に電撃を飛ばされることは無いはず。

「私は・・・つて、フーン・・・へえ・・・?」

「何だよその顔は」

さて、その作戦自体は成功したものの、御坂はオレの傍らにいる湾内さんを見て、何か凄いムカつく顔になつた。

あらお邪魔しちやつたかしら、みたいな。私何でもお見通しよ、みたいな。噂と井戸端会議大好きなおばさんみたいな、そんな顔。

女子供じやなければ、老若男女の中の若男だつたのなら、絶対おもつきり躊躇せず顔面ド真ん中ぶち殴つてんのは言うまでもない。「湾内さん、ちよつといい?」

「は、はいっ」

御坂がひよいひよい、と手招きをした。そのジェスチャーを示す相手は当然ながらオレでは無くて、隣にいる湾内さん。常盤台の先輩ということも相まってだろうか、御坂の元へと結構な早足で駆け寄つていく湾内さんの背中をぼんやりと眺める。

そして、オレの前で堂々と始まつた密談。

・・・なに話してんだ？　あんな耳元で。

湾内さんに何かを囁いている御坂。頭を横に振つたりと、リアクション豊かな湾内さん。抱えているイルカさんも一緒に揺れてら。そこで、それをぽつんと一人で見つけるのがオレ。もはや不審者。にしても・・・驚くほどのかやの外だから、めつちや手持ち無沙汰だな。もう帰つていーか？　御坂いるし、お二人で一緒に寮に帰つていただいてめでたしめでたしつつーことで・・・オレは細々とフェードアウトを・・・

そう思い立ち、踵を返そとした途端、それを予期してたかのように湾内さんから離れ、オレの方に歩み寄つて来る御坂。にげられない！

その顔はニヤニヤと言うよりニタニタ？　絶対なんか誤解しているよコイツ。

「アンタも中々いいとこあるじゃない！」

バシンッ、と勢い良く肩を叩かれた。いつつ・・・よく分からんけど、おつさんの勞い方じやねーかよ。雷パンチじやなかつたのは一安心だけど、一体なんだつてんだ。

「今さらかよ。もつと早く気付いとけ、どう見てもいいとこしか無いだろこんな好青年」

「うわ・・・自分で好青年とか言つたら台無しじゃない」

「アホ言え、明確な事実を言つただけだつての」

いくら勝負挑まれようとも電撃ぶつ放されようとも、キレたりしていないオレはどう見たつて好青年だ。むしろその恩恵にあずかつてお前こそ気付いとけよ。

「アンタねえ・・そういうのアレよ？　ナルシストつて言うのよ？」

「失敬だな。事実を言つていいだけなんだから、リアリストって言えよ」

「はあ・・・湾内さんも大変ねえ・・・」

目の前で盛大に溜め息をついた御坂。いやいや、湾内さんにはもつと眞面目に、眞摯に、静肅に対応してゐるに決まつてるだろ。お前や白井じやねーんだからよ。なあ？ 湾内さん。眞摯で紳士だつてえの。「わ、わたくしは佐天様とゞ一緒にできるだけで・・・」

オレの眞摯なアイコンタクトが通じたのか、湾内さんは抱えているイルカをキツく抱き締めつつ、オレの弁護をうつ向きながらもはつきりと聞こえる声量でやつてくれた。ありがとう！ 今度なんか奢つちやうぞ！

「アンタと湾内さん、ホント仲いいのねえ・・・？」

「当たり前だろ。オレと湾内さんは心で通じ合つてるからな。こうやつて目と目を合わせるだけで何を考えてるのかだつて筒抜け・・・」

そう言つて顔を動かすと、ふらふらと今にも倒れそうな病人みたいな平衡感覚で、顔を真つ赤にしている湾内さんの姿を視認する。オレは慌てながらも颯爽と湾内さんを支えた。

「わ、湾内さん!? 大丈夫か!?」

「ね、熱か!? やつぱり熱中症とかだつたのか!?」

「何にも通じ合つてないじゃない」

「後輩の危機に何をそんな落ち着いてんだ、早く119を！」

「救急車を・・・つて、あつつ！ 肩とかめつちや熱い！ やつぱりこれ絶対病気だ！」

「はいはい、とりあえず離れなさいつて」

一人だけ涼しい顔をしている御坂が、オレから湾内さんを奪う。なんかこの言い方だとドロドロの蜃ドラみたいだな。てか何だ、電気ショックでもする気か。AEDの出番のある症状には見えねーぞ。

御坂が湾内さんの背中をさすつたりしてゐる。それで治るとは思えないといとオレは思つていたんだが、次第に湾内さんの顔色は赤から普通に戻つてきていた。こ、これが電気マッサージなのか・・・？

「にしてもアンタ、いつもこんな感じなの？」

「なにがだよ？」

「はあ・・・湾内さんも大変ねえ・・・」

今さつき聞いた覚えがあんぞ。しかもそん時よりも断然深い溜め息だし。何だつてんだ、釈然としねえぞ。オレが何かしたのか？ いや、全然思い当たらん。

「自分で考えることね。それでこれ、アンタがあげたのよね？」

「ああ、そうだけど」

御坂がぬいぐるみを指差しながら、オレを見てきた。特に隠す必要も無いし、すぐに答える。オレに向けられた質問のためか湾内さんは答えないものの、コクコクと頷いているのは見えた。

「クレーンゲーム？」

「おう」

ゲーセンの方に視線を一度向け、そしてまたオレを見る御坂。

「得意なの？」

「はつ、愚問だな。ゲーセン荒らしのセンちゃんとは言わずと知れたオレの事よ」

「その異名だと、アンタの要素どこにも無いじゃない」

まあ確かに嘘はついたが、オレの腕に嘘は無い。狙った獲物は中の配置によるが、千円以内には取れると断言出来る。

「湾内さん、ちょっとだけコイツ借りていいかしら？」

「さ、佐天様がよろしければわたくしは・・・」

「御坂、オレのことは真っ先にオレに聞けよ」

つたく、人を物みたいに扱いやがつて。にしても何だ？ 欲しいもんでもあるのか？ そんなら恩を売る目的でやつてやるものやぶさかではねえけど。

「で、なにして欲しいんだ？」

「あら、やけに聞き分けがいいじやない」

「どうせやらされる未来しか見えねえから、とつとと終わらせた方が得だろ」

「それはそうね」

少しは否定しろよ。何がそれはそうね、だ。潔いにも程があんだけ
ろ。お前は侍か。

「湾内さん、先帰つても

「い、いえっ。わたくしも『一緒にさせていただきます！』」

「そ、そう？」

やけに食い気味だ。何だろう、ゲーセン気に入つたのか？ だとしたら今日湾内さんをここに連れてきたのは、人生最大級の過ちだつたと言つても過言じやねえぞ。

まあでもそういう訳で、湾内さんと御坂と共にまたゲーセンの中に足を進める。

「いやーホント良かつたわ。私だけじやちよつとね」

「オレも良かつたわ。電氣で台パンとかされても困るし」

「そんなことしないわよ！」

いや絶対するよこいつ、どつかの公園で自販機蹴つてゐたことあるし。あまりに取れなくて怒りをゲームにぶつけ、放電して、ゲーセン内のゲーム全部ぶつ壊し、最悪閉店まで見える。ああ恐ろしや。そんなことを考えていると、気付けばクレーンゲームのコーナーに辿り着いていた。御坂の方を見る。

「んで、なにが欲しいんだよ。湾内さんの持つてるようなやつ？」

「いや、違うわよ」

湾内さんの抱えるイルカを指差すと、御坂は横に首を振った。

じゃあ、どれが欲しいんだよ。周りに目を向けていれば、御坂がある筐体きょうたいに近付いていくのが見えた。その中に敷き詰められていたのは――

「ま、まさか……それか……？」

「なによ、可愛いでしょ？」

―― ゲボ太

「ゲコ太よ！」

「な、何だよ急に大声出して」

「なんか言わなきやいけない気がしたのよ!!」

こ、こいつ人の脳内まで読めるようになつたのか？ だとしたらレ

だとしたらレ

ベル6の候補に名乗り上げたことになんぞ。

にしても、ええ・まさか、身近にこいつを好む存在がいたとは……
灯台もと暗しと言うべきか……なんと言うか……特異な美的感覚
をしてるな。さすがレベル5、クレイジーだぜ。

まあ、オレが手に入れる訳じやねーし……

「とにかく、取ればイーんだな？」

「ええ、任せたわよ」

難易度自体はそうでもない。むしろ取り易い部類かも。変な見た目はしてつけど、変な形をしてるわけではねーし。

御坂から軍資金を受けとる。それを入れて、ゲームスタート。
巧みなクレーン捌き、首の辺りを挟んでゲボ太を持ち上げる。見た目はもう、首吊りだ。ぶらんぶらん体が揺れて、控えめにいつて超気持ち悪い。湾内さんには見せたくないレベル。

「ごどつ、そのまま穴に落としてゲームセット。感触としては谷底に落とした感じ。

「ほらよ。これでいいのか？」

取り出し口に手を入れ、ゲボ太を取つ捕まえると、御坂に差し出す。
「ゲコ太あつ！」

しゅばつ、目にも止まらない速度でひつたくられた。猫か、おい。
頬擦りまでしてるし……そんなにいいのか？ 最近の中学生つてのはこういうのが好みなのか……？ 涙子ちゃんも実は好きだったり……？

湾内さんの方を見ると、そんな顔はしてなかつた。じやあやつぱり御坂だけの特性か。

「ま……まあ、そんなに喜んでくれて良かつたぜ。じゃーな。ほら、
湾内さん行こつか」

やることはやつたわけだし、御坂は放つておいて帰ろう。湾内さんを手招きし、歩き始める。

「え、なに言つてんのよ？ まだ終わつてないわよ？」
後ろから、そんな声が聞こえた。

「なんだよ、取つてやつたる？」

オレは振り向き様にそう言う。

「アンタそれ本気で言つてるわけ？　まだピヨン子とケロヨンがいるじゃない」

御坂は聞き馴染みの無い名前とともに、あつけらかんとそう答えた。ぴよ、ピヨン吉？　クレヨン？

「ほら、良く見なさいよ」

オレは不本意にもクレーンゲームに近づく。確かに、なんか違うのがいるような・・・いないような。いややつぱり、いないよな。

「アンタねえ・・・ぜんつぜん！　違うでしょーが！」

「湾内さん、わかる？」

「は、はい・・・」

そう答えた湾内さんの言葉の最後尾に『うつすら』と言う単語が付け足されていたのを、オレは聞き逃さなかつた。

「よく見なさいよ、素人にも分かるようになりボンとか付いてるでしょーが！　これがピヨン子よ！」

「あー、確かに・・・」

そう言われると、そうだな。でも待てよ、クレヨンはいなくないか？　クレヨンはいなだろ。ゲボ太とピヨン吉だけだろ。

「ゲコ太とピヨン子とケロヨン!!」

「な、なんだよ」

「なんかまた言わなきやいけない気がしたのよ!!」

やつぱこいつテレパシーも習得したんじやないのか？

「アンタ、相貌失認そうぼうしつにんつてやつじやないの？　病院行つた方がいいわよ

」

「余計なお世話だ」

人と人同士で、他人の顔が覚えられない、見分けられないのが相貌失認だつづーの。人がゲテモノの顔を見分けられないのは普通だ。

「じゃあその、そいつらも取ればいいんだろ？　わーつたよ」

「ええ、お願ひ」

御坂との口論には端から勝てる気はしないから、オレは大人しく観念して、後の二種類をとつと取ることにした。

それはゲコ太よ！とか、それはナマコでしょ！とか、御坂のオペレーショングームを聞きつつ、オレは奮闘した。

クレーンゲームには順序があり、本当に取りたいものがあれば周りを取つたりして、取り易くしたりとかの戦術もある。つまり、余分な力エルたちも取ることになった。

保存用、観賞用、予備。ゲボ太フアンの総称らしいゲコラードある御坂に渡しても、手に余つた。

なので湾内さんにもあげたし、オレも貰うことになつた。ふざけろ、いらねーよ。

ゲーセンの前でルンルン気分で帰つていく御坂の背中を眺め、湾内さんを見送つている最中、深い溜め息がひとりでに漏れた。

帰宅途中に上条に遭遇したので、厚意であげた。開運のお守りなんだぜ、だから持ち歩けば不幸からおさらばだ、とか適当に言いくるめてやつた。

後日、上条から感謝された。なんか、絡んできた女がそれを見た途端に態度が軟化したらしい。その日は、追いかけられたりとかしなかつたらしい。

御坂以外にも、物好きなやつはいるんだなー・・・上条の話を聞きながら、オレはそう思つた。

最初に言つとくか、今日のオレはウキウキワクワクだ。踏み出す足も自然にスキップになつてしまふくらいには、ウキウキだ。この気分を分かりやすく例えるなら、そう・・・ずっと待つていたゲームの発売日、これに尽きる。

いや、すまん。遙かにそれ以上だつたわ。

さて、なぜオレがこんなにエキサイトしているのか知りたいか？その理由は単純明快。口にする必要もない程度に、単純明快だ。まあ、だが皆にもオレの幸せを共有してやる目的で教えてやる。

なんとなんとなんと!! 今日はツ!! 涙子ちゃんとのドゥエートオツの日だからだッ!!

いやー、なんだろうな。言い様のない笑いが止まりまへんな。常に口角があがつちまう。今のオレは不審者と思われても、弁解の余地はねえレベル。

そんぐらいホント幸せだなあ・・・なあ・・・おい・・・それなのにどうして、どーして、お前がここにいるんだ？ 教えてくれよ、初春さんよお・・・！

「まあまあ、別にいいじやないですか」

隣を歩く花畠をオレは鋭い視線で睨みつけた。当の花畠は何の非も無いですよ、そう言わんばかりで、オレの視線をものともせず、そんなことを悪びれもせず言いやがる。

いやマジで、なんでお前がいんだよ。あれか？ デリカシーすらその花の栄養にされちまつたのか？ 普通さ、家族水入らずの邪魔はないだろ？ その花には水がいるのかもしんねえけどさあ・・・オレと涙子ちゃんの間には水も油もいらねーんだよこんなにやろう。

「それに佐天さんから誘われたんですよ、わたし。そんなこと言われてもしようがないじゃないですか」

「オレ佐天だけど、お前誘つた記憶ねーんだけど

「揚げ足とりはやめましょうね。お兄さん」

「はあ・・・」

涙子ちゃんがしたことだし、オレからはもう何も言えねえ。ため息をつくことしかできねえ。てかこいつマウントだけ取りやがつて。オレだつて涙子ちゃんから誘われてえつつーに・・・

羨ましいとは言いたくねえけど、めっちゃ羨ましい！ もはや怨めしい！

靈丸ブツぱなししてやろーか！

初春をまた睨みつけ、指を銃のよう構えようとしたところで、「おーい！ 初春！ まも兄！ なにやつてんのー？ 遅いよー！」

と、前の方から祝福を告げる福音が聞こえた。その声を聞くとなぜだか心のわだかまりは全部消え去り、オレは穏やかな気持ちだけになつていく。

きっと、世界はかくあるべきなんだなつて・・・アラソイ、ヨクナイ。セカイヘイワ。ミンナ、シアワセ。

「ああ、ごめんごめん。ちつとばかし世間話をしててさ」

小走りで天使兼女神である涙子ちゃんへと距離を詰めていくと、それだけで深い後光によりオレは浄化されそうになる。近づくことすら難しい、まさに太陽なんだなー。つくづくオレはそう思つた。

「へえ・・・そつかあ。もしかして、あたし邪魔だつたりしちゃうかなー？」

「天地がひつくり返つてもそれはないぞ!! 涙子ちゃん!!」

隣に並んだタイミングで、涙子ちゃんがそんなことを言うので、即座にオレはそれを声高々に否定する。むしろ邪魔なのはあの花畠に尽きるぜ！ このデパートのどつかにある花屋で、あいつ売つてやろうかな。

あ、そういうや言い忘れてたつけ？ 今日のデートは、デパートでショッピングつて感じだ。どうだ、羨ましいだろ。涙子ちゃんと買い物だぜ！ だははのだつはつはーーーー!!!!

「今日もまも兄は、やつぱりまも兄なんだなあ・・・」

「ですね・・・目線が痛いですよ・・・」

あつと、いつの間にかオレの心の幸福が漏れ出てやがつた。でもまあ、しゃーないな。涙子ちゃんとデートだからな。少しくらいは許してくれ。むしろ幸福のおすそわけと思つてくれ。だつはつ

は―――！」

「あつ、そういうえばまも兄
ん、どした？」

「立ち直るの早すぎませんか？」

ピタツ、と口角の向きを戻す。常春だか青春だかが何かを言つてゐ
が、それは無視しどこつと。

で、涙子ちゃんはオレに何の用だろうか？　お兄ちゃん、全財産で
も全能力使つても涙子ちゃんの頼みごとだけは達成する所存だぜ
！

「まも兄つて服とかもつてたつけ？」

「もつてる、もつてる。Tシャツとか」

「へー、何着？」

「3枚くらい」

「すくなつ！」

学園都市つて殆ど制服で過ごせつから、外に比べりや全然服とかい
らねんだよな。下に着るインナーさえ数枚あれば、ローテーションで
回せるし。まあそれ差し引いても、オレは少ないほうだとは思ふけ
ど。

「デートの時とかどうすんの!?」

「涙子ちゃん以外としないしな」

「まも兄はシスコンこじらせすぎだつて！」

「あはは・・・」

そう言われても事実だしなー。上条とかじやあるまいし。

「初春、これはもうあれだね。あたしらでまも兄をコーディネートし
てあげなきやダメだね」

「そうですね」

なんだつて？　涙子ちゃんのコーディネート？　おいおい、最高
じゃねーか！　よつしやーー！　服だけに文字通り肌身離さず常日
頃、年がら年中それだけ着て生きてやるぜ！

頭に花咲かせてる前衛的すぎるファッションセンスを持つやつに
はコーディネートされる筋合いねーけど、まあ涙子ちゃんに免じて、

その辺は許しといてやろう。

オレのいく末をあれやこれやと話し合っている涙子ちゃんと初春。その少し後ろをオレは歩いて、日当ての服屋へと向かう。あんの花畠め、ズルいぞ。

「よし、ついたついた」

初春の背中に向けて陰陽師さながらに呪詛を唱えてたら、いつの間にか服屋の前に辿り着いていたらしい。涙子ちゃんの天女の調べみたいなその声で、オレは我に返る。そして、こう、思うんだ。この声を目覚ましにしたいってな。

「まも兄…よく分かんないけど、やめてね。なんか気持ち悪いよ」「がはっ…！」

そんな心のうちも一切声には出していなかつたはずなのに、涙子ちゃんは眉を潜め、なんとも言いがたい視線をオレに向いている。それと同時に飛んできたのは、オレの心を切り裂く斬撃。

御坂の電撃とか、白井のドロツップキックとか、削板のストレートとか、そんなチヤチなもんとは比べ物になんねえ…
足に力が入らない。崩れ落ちそうだ。ガクガクと全身が悲鳴を上げている。そんで心中はどうしゃ降りだ…雨というか特大の雹が降つてきてる…

「佐天さん、前もこんなことありませんでした？」

「まも兄はこりないからねえ…」

「あ、でも今回は倒れてませんね」

もうオレは駄目だ…涙子ちゃんに気持ち悪がられたら、この先の人生、オレに生きる意味ねーぞ…

「あの、佐天さん？　お兄さん真っ白になつてきてませんか？」

燃え尽きたよ…真っ白にな…

「あーもう！　まも兄！　うそだから！　さつきのはうそだから、さつさと起きて！　ほら、はやく！　そうじやなきや、ほんとにまも兄が気持ち悪くなつちやうよ！」

「ふつかーつ!!　よし、涙子ちゃん！　服を見に行こう！」

「立ち直るの早すぎませんか？」

いやー、みんな！ 空つてのはこんなに青いもんなんだよ！ 人生つて素晴らしい！ ビバ人生、ビバ涙子ちゃん！ 迎春だか立春だかが何かを言つてるが、それは無視しどこつど。

「さてさて、どうしたものかにやー」

「佐天さん、男性用はあつちの方ですよ」

そういうや、いつぶりだつけなー。 こういうとこに来んの。 高校の入学前に少し準備しに来たくらいで、それ以降は縁が無かつたつけ。 にしてもさ。 服屋つてのはどうしてこんなに、疲れるんだろうな。 ここだと普段の何倍も足に負担が来る気がすんぞ。 なんかそういう装置付けられてんじやねーか？ AIMジャマー的なやつ。

数歩で椅子に座りたくなるぜ。 だがしかし、今日はいつもと違うところがある。 涙子ちゃんがいることだ！ オレのために服を選んでる姿を見ると、視界が滲んでくるぜ・・・くーっ！

ビデオカメラでも回して、アルバムにこの素晴らしい光景を保存しておきたかったな・・・くそ、オレのバツキヤロー！ なんで持つてこなかつたんだ！ アカシックレコードをみすみす逃しやがって！ くそ、かくなる上は網膜に焼き付けるしか！

「あの、佐天さん

「どしたの初春？」

「あれ大丈夫ですか？」

「あー、大丈夫大丈夫。 それよりこれなんてどうよ？」

邪魔だ、花！ うちのホームビデオだぞ！ かけっこ撮つてる時に

画面に写り込む他の児童の親かお前は！

「まも兄」

「ん、どした？」

「これ着てみて」

服を選び終えたのかオレの前に歩いてくる涙子ちゃん。 異論なんて当然ながら根本的に存在しない。 渡された服に即座に、着替えに向かう。

「ふむふむ、我ながらけつこーいいセンスしてるよねー」

「馬子にも衣装・・・つてやつですねー」

涙子ちゃんは頷きながらそう言い、初春はそんなことを言つている。狭い試着室の中、オレは促されるままに着替え続けた。

女児のバービー人形レベルで、着せ替えを続けた。もうなんか、目的違つて来てないか？ まあ涙子ちゃんが楽しんでんなら、オレはいーんだけどさ。

そう思いつつ、渡される色んな服を着こなすオレ。まあ涙子ちゃんつづーキング・オブ・女神と同じ血が通つてゐるわけだから、オレも中々のイケてるメンズなんだよなーこれが。

「おー・・・まも兄は口さえ開かなきや、かつこいーし尊敬できるんだけどなあ・・・」

「ですね・・・」

なんでだい！ 普段のオレも愛のガーディアンをしてるかつくいー紳士だよ涙子ちゃん!! もはや騎士だよ、騎士！ 初春はお前あとで覚えとけよ！

そんで、どれだけ着替えたのか覚えてねーけど、ひたすらその後もオレは着替え続けた。ここパリコレ会場だつけ？ そう思えるくらい。

やつとのことでオレの服を選び終えれば、次は本題である涙子ちゃんの番だ。

「涙子ちゃん、かあいいなあ！」

「・・・ほんとにそう思つてる？ まも兄さあ・・・全部、そう言つてない？」

いやだつてさ、何着ても似合つてんだからしやーない。元が良すぎるんだよなー！ 女神には何着せても女神なのよ！ これマジで！！

そんなこんなで涙子ちゃんの服も選び終えると、オレは初春の方を見た。

「あれ、初春。お前いーのか？」

「え、わたしですか？ わたしは大丈夫ですよ。あんまりお金もありませんし」

「おいおい、んなの気にすんなよ。俺が払つてやるよ」

「お兄さん・・・」

「んで、あつちの花屋でいいか？」

「わたし花じゃありませんよ!!!」

え、違ったの？ キヨトンとした顔で初春を見返すと、更にメロスは激怒したので、しゃーねえな・・・オレは花の根っこに機嫌取りを伺うこととした。

怒る初春とそれを見て笑っている涙子ちゃん。その光景を見ながら、オレは思った。

白井とか御坂がいなけりや、平和でいいなー！

「はあ・・・どうしてこうなんだよ。俺はただ涙子ちゃんと一家団欒の時を過ごしたかつただけだつつーに・・・」

喧騒の中、オレは一人深い愚痴を溢す。それに呼応するようになにか

「奇遇ですわね、わたくしもですの。初春や佐天さんならまだしも・・・こんな男にお姉様との時間を邪魔されるなんて、最悪ですわ」

と、オレの前から聞こえる声。その声の方へと目を向ければ、そこにはいるのは皆さんご存じ性悪ツインテールこと、白井。はあ・・・やっぱり幻じやなさそうだ。

そしてその白井の隣には

「なによアンタ。こんな可愛い娘たちに囲まれてんだから、少しは嬉しそうにしなさいよ。ホント失礼なヤツね」

皆さんご存じ暴れピカチュウこと、御坂。

オレ的一番会いたくないランキングの二大巨頭が勢揃いしてやがる。頭はデカくても、一部は慎ましいけどな。それに倣つて態度も少しは慎ましくなってくれよ。

「オレだつてさつきまでは嬉しそうにしてたつづーの。涙子ちゃんという女神が近くにいてもなおこんな気分はオレだつて初めてだわ。驚きだよバツキヤロー」

「うわ・・・アンタつてマジでシスコンだつたのね。引くわあ・・・」

「うつせ、世のお兄ちゃんは皆シスコンだ」

「なわけないでしょ」

いやいや絶対そりだろ。先に産まれるつてことは、後に産まれてくる妹とか弟を全力で守るべきつて神の思し召しなんだからよ。なあ、涙子ちゃん!

「まも兄、あたしを見ないでよ。それに絶対ちがうと思うし」

「すまん御坂、お前の言うとおりだ。なわけないな」

「少しは自分の意見持ちなさいよ」

「涙子ちゃんの言うことが間違ってるわけないからな」

「・・・あ、そう」

何とも表現しづらい目でオレを見る御坂。なんだよ、オレ何か間違つたこと言つたか？人間ごときが女神の言うことを否定するなんて、不敬にもほどがあるだろ。

「お姉様。こんなのは放つておいて、わたくしと親睦を深めますのっ！」

「だーーツ!! こつちもうつとおいしいわね!! だから私はアンタの姉でも何でも無いつて言つてるでしょーがあつ!!!」

「ああん、お姉様のいけずうううう!!!」

オレの目の前で繰り広げられる醜い争い。御坂は抱き付こうとしてくる白井を引きはがすように手で顔を押しているため、白井の顔は酷いもんだ。

オレはそんな光景を直視していたくなくて、視線を横に向けた。そこには花畠が広がっている。

「・・・なあ、前にお前の言つてた意味がわかつたよ。あれは確かに気持ち悪いな」

「いえ、・・・あれはこれとは無関係ですけど・・・同感です」

初めてオレとフシギバナの心が重なった気がした。なつき度上がつた？ てか、あれは確かに喜怒哀楽のカテゴリーに入れたくねえな。ああなつたら人間おしまいな気がするぜ。

「白井さんがまも兄みたいになつちゃつてる・・・」

「ですね・・・」

「えっ!?」

いや待つて涙子ちゃん?! 誰が誰になつてるの!? さすがに涙子ちゃんの言うことでも結構受け入れがたいよそれは!! こんなのと一緒にしないでくれ!!

「佐天さん。とりあえず私たちは選んでましょーか」

「そだね。そうしよつかー」

そう言つてメニューを広げ、料理を選び始める涙子ちゃんと初春。

あ、そうか言い忘れてたな。今オレたちはショッピングモール内にある、レストランに来てんだ。

目の前の席には白井と御坂、そこでオレの座る方には涙子ちゃんと

初春。なぜか真ん中には初春が座つてゐる。空氣読めよ、こんにやろう。そこが涙子ちゃんの席であるべきだろうに。むしろオレの膝の上でも良かつたけど！

ついでに今に至るまでの説明でも簡単にしてやろう。感謝しろよな。

あの後に服屋での買い物を終えたオレたちは、ランチをしようとの店に来た。そこまではまだ良かつた。白井と御坂が現れるまではな。

『あれ、何よアンタ。いいご身分ね。二人も女の子連れて、両手に花つてわけ？ 湾内さんは呼ばなくていいの？』

『なんだ御坂か。違うな、全身に女神だ。確かに現実的に花もいるけどよ。てか何でそこで湾内さんが出てくんだ？』

『そんなの決まつてるじやない。理由は言わないけど』

『お姉様！ やつと見つけましたわ！ こんな所にいらしたんですね!!』

『げつ・・・何でアンタがここに・・・』

『ひとえに愛ですわっ!!』

『公共の場で変なこと言つてんじやないわよ!!』

『よし、涙子ちゃん。初春。違う場所で飯でも』

『・・・あなたもいらしたんですね。お姉様こんな男と話してはいけませんわ。変態がうつりますの』

『それならとつくにアンタはうつってんじやないの・・・』

『さてもうこの辺でいいか、回想は・・・あまり思い出したくなえし。まあこんな感じで今に至るつてのだけ、分かってくれたならそれでいい。』

今日のオレの気分的には御坂単体、もしくは白井単体ならまだウキウキモードを継続できた。なのに二人で来るとか、聞いてねえよそんなの・・・説明書に記載しといてくれよ。

まあ唯一良かつたことと言えば、涙子ちゃんが御坂に尊敬の視線とかを向けなかつたことだ。ついでに見る限り白井の株も下がつてゐるしな。やつたぜ！

「なんでガツツポーズしてるんですか？」

「漁夫の利つてのを知れそудよ」

「たぶん他が下がつてもお兄さんの株は上がらないだだだだっ！」

』

「こらこら駄目だろ？ 頭にサラダ乗つけてたら、盗み食いと思われたらどうすんだ」

「思われないですよ！ ゼッたい！」

いやいや思われるだろ。オレならなに頭にうちのサラダ乗せてんだ！ 食い逃げかあ？ つってブツ飛ばしてやるね。

「うう、ひどいです・・・」

頭を抱えながら細い声でそんなことを言つている初春。その隣で涙子ちゃんがニヤニヤしているのが見えた。やばい超可愛い。引き伸ばしてポスターにしたい。

「いやあ、ほんとにまも兄と初春つて仲良いよね。もしかしてあたしに隠れて付き合つてたりする？」

『涙子ちゃん（佐天さん）それは無いぞ（です）ツ!!』

そんな不名誉すぎる言葉にオレはすぐに首を振る。頭を抱えていたはずの初春もオレと同じように、食いぎみに首を振つているのが見えた。

「ほら息ピッタリじゃん！」

オレと初春を目を輝かせながら指差す涙子ちゃん。やばい超可愛い。銅像にして後世まで残したい。語り継がせたい。

「いやあでもよかつたわー。初春ならまも兄を安心して任せられるね

』

「だから違いますよ！ 佐天さん！」

「仕方ないな。涙子ちゃんがそう言うんなら、初春。オレたち付き合つても

「少しほ自分の意見もちましようよ!! ぶつとばしますよつ!!」

「冗談だよ、そんな怒るなつて」

修羅もかくやの顔をした初春。そんなにオレが嫌か。オレつてナイスガイでイケメンで家族想いで涙子ちゃん大好きの好物件だと自

分では思つてゐるんだけどな。

「えーあたしはいいと思うんだけどなー」

「オレは涙子ちゃんがいればそれでいいよ」

「普通に気持ち悪いよ、まも兄」

「がはつ・・・」

ズコンツ、勢い良く机に突つ伏すオレ。額が痛いし顔中痛いが、一番痛むのはオレの心だ。もう駄目だ死のう。そして風になるんだ。涙子ちゃんの生きる酸素になるんや・・・

「なんかもうこの光景に慣れてきましたね」

「さつきも言つたけど、まも兄はこりないからねえ・・・」

白井、御坂。今ならオレはお前らに焼かれようとも蹴飛ばされようとも、甘んじて全て受け入れる。だから頼む、介錯を頼む・・・「でも佐天さん。ずっとこのままでいられると・・・隣に座る私としてはちよつとあれですね」

「だね。ほらまも兄起きて。冗談だから」

「涙子ちゃん。初春。どれにするんだ？ オレが出すから、気にせず好きなもん頼みな」

「やつぱり立ち直るの早すぎませんか？」

メニューを眺めるオレを眺める初春。このストレス社会ではいかに早く立ち直れるかが鍵だぞ。覚えておけ、ワトソンくん。

「あら、ホント？ アンタも気が利くじゃない」

「お前に奢るとは言つてねえよ」

「まあ当然ですわね。わたくしとお姉様のような淑女に出させるなんて、男が廃りますもの」

「淑女の意味を今すぐ調べてこい」

つたく、奢るのはこの際構わないけどよ。奢られる側の態度が気に入らねえぜ。てか最近は奢つてばつかじやないか、オレ。涙子ちゃんの場合は奢りと言うカテゴリーには入らない。だがしかし、他のヤツに払つてばっかりな気がする。

「今調べましたわ。お姉様とわたくしと出てきましたの」

「教えるその検索サイト。今すぐブツ壊してやる。てか何だよ、さつ

きからお前。お姉様だのお陰様だの、遂に頭がおかしくなつちまつたのか？ テレポートしすぎて脳ミソだけ宇宙に飛んじまつたのか？」

「気持ち悪い目と顔で妹を見ている輩だけには言われたくありませんわ」

「よし、表に出ろ。人生の先輩として礼儀を享受してやつから」「望むところですわ」

ゴキゴキ、指の骨を鳴らす。こいつには教育が必要みたいだな。風紀委員に相応しい健全な心と精神を教えてやる。

「まあまあ、落ち着きなさいよアンタたち」

「そうですよ。お店の中ですよ」

「まも兄」

視線がオレと白井に刺さる。涙子ちゃんに言われたら、しゃーないな。白井の方を見ても大人しく座り直しているし。

「んで……疑問には思つてたから、改めて聞くけどよ。お前らいつの間にそんな仲良くなつたの？」

「別に仲良くなつてないわよ。勝手にこいつが付きまとつてきてるだけで」

「そんなの決まつていますわ。お姉様という雷イカズチがわたくしのカラダを突き抜けて、身も心も恋焦ハラガがされてしまつたというだけですの」「ハハッ、気持ちわりいや」

「ぶち殺しますわよ」

体を抱き抱え、くねくねと動く白井は目に毒だ。文字通りの意味で目に毒だ。率直に言つて気持ち悪い。あ、声に出ちまつてたか。白井が鋭い目で睨んできてやがる。

「あの、大変そうですね」

「あなたも大変そうよね。佐天さん？ アイツの妹だからそうよね」

「は、はいつ。そうです。御坂さんと呼んでも大丈夫ですか……？」

「ええ、もちろんいいわよ」

オレと白井を他所に親睦を深め始めている涙子ちゃんと御坂。ま

「ずい、このままではオレの立つ瀬が！」

「でも、安心しました。あたしレベル5の人は変な人が多いとなぜか思っちゃつてて……」

「あー……まあ、そうなるわよね。身近にいるのがあれだと」

「あはは！」

いや待て、まず第一にオレはレベル5じゃないぞ。確かに涙子ちゃんといふ時に削板に会った事とかあつたから、その認識になるのは間違つてないけどさ。と言うよりその認識通りレベル5つて頭おかしい奴らの集まりだしさ。

てか何笑つてんだ花。お前はこういう時は苦笑いするのが捷だろうが！

「はあ……どうしてこうなんだよ。俺はただ涙子ちゃんと一家団欒の時を過ごしたかつただけだつつーに……」

「それは一字一句さつき聞きましたわ」

また愚痴を溢すと、白井が鬱陶しそうにそう言つた。

「んで、お前はなに頼むの？」

「何ですの急に」

「ファミレスなんだから飯を食う場所だろ。話す場所じゃねえよ。御坂もほら、とつとつ決める。涙子ちゃんはゆつくり決めてくれ。むしろ端から端まで頼むまである」

白井と御坂にメニューを渡し、というより押し付ける。涙子ちゃんには笑顔を向けた。初春お前は早急に決める。

「うわ、ホントやつぱシスコンね」

「変な力エル好きよりはマシだ」

「変な力エルじゃない、ゲコ太よ!!」

「変な力エルじやねーか」

いま思い返してもやつぱあれは変な力エルだろ。あれを好きになれつてもはや何かの刑だよ、刑。

「アンタね、ゲコラーは結構多いのよ？ この前はアンタと同じ男でもスマホにつけてるヤツいたんだから！」

「へえ」

「私そいつ少し見直しちゃつたわよ！」

そんな奇特なやつもいるもんなんだな。なんか似たようなエピソードをどつかで聞いた気がするけど、どこだつたかは思い出せないな。

「初春、メニュー見せてくれ」

「ちよつと聞いてんの？」

「はいはい。ゲコラーは多いですよ、多いです。ちまたで噂つす」

「信じてないでしょアンタあ・・・！」

初春の持っていたメニューを覗き込みながら、オレは適当に話に合わせる。よいしょしたはずなのに、なんで怒つてんだか。

まあそれは気にしないで、オレは食うものを選んだ。

涙子ちゃんと二人きりでのショッピングは叶わず、三人の邪魔者が入った今日。

オレを置いて会話をする女性陣を見ながら、これはこれで悪くないな、そうオレは思つた。てかそう思わなきややつてらんねえし。

そこで最後に言えることは、涙子ちゃんはやっぱ女神!!

「はい、おしまい・・・つと」

パンパンッと二度手を叩きながら、オレは改めて周囲を眺める。映る光景は死屍累々、と言つたとこか？ オレの目の前には現代アートと言われたら信じちやいそうな感じで、壁にめり込んでる二人の男。

昔テレビでやつてた迫つてくる壁の隙間の形に合わせて、同じポーズをして避けるみたいなヤツを連想してくれ。アレの愉快なポーズで壁にめり込んでる感じだ。ピラミッドとかの壁画に書かれてそう。そして足元には男と女が一人ずつ。どつちも意識は完全に失つてる。てか、死んでないか少し心配になつてきてるレベルで地面をベッドにぐつすりだ。

他に周囲には人影無し。ついでに今の現在地を言うと、薄暗い路地裏つてトコだ。

「おお、すげえな。コイツら生きてんのか？」

訂正、周囲に人影はあつたらしいぞ。オレは声の聞こえた方に顔を向けた。

そこにいたのは、どう見ても優等生じやないチンピラつて見た目をしたヤツだった。不幸にも知つたツラだったので、ブツ飛ばすのはやめておいた。

「なんだ、馬面か」

オレは目の前の男の名前を口にする。

「浜面だよ俺は!? 失礼な間違い方だな!!」

あ、そうだつたつけ？ わりいわりい、久しぶりだからすっかり忘れてた。

「冗談だよ。何でお前がここにいんだ？ 駒場さんは？」

見た目から分かると思うけど、浜面はスキルアウトだ。そりや路地裏は繩張りみたいなもんだけよ。

「別に俺がここにいたつていいだろ。そんで駒場さんはいつもの拠点の方だ」

「へえ」

「おい、聞いといて失礼だな!! もつと興味持てよ！」

いや、聞いといて何だけど全く興味なかつたわ。感想は涙子ちゃんに会いたいしか出てこねえ。

「にしても派手にやつたな」

「ああ、もつとド派手にしてやろうか？ 芸術的にはまだモノ足りないからな。特に下の二人だ、コイツらにや十二分に改善の余地があるぜ。頭からコンクリに植え付けて、文字通りの生け花にするつてのも悪かなさそうだと思わねえか？」馬鹿

足元に倒れている二人を眺めながら顎に指を添え、真っ白なキンバグスを前にこれから書く絵の構図を考えている芸術家のように考え込む。

「おいおい、大概ワルの自覚がある俺でも流石に引くぜ……華道じやなくて外道つてか？ そんで俺の片鱗が残つてねえだろその呼び方は!? それだとただの馬鹿じやねえか!?」

そうやって浜面が何かを喚いているが、オレは全く意に介さない。「おい、聞いてんのか!?」

「効いてるよ、効いてる……これはパンチが効いてるぜ……早速取り掛かろう。そこで写真に収めてネットで拡散すれば、新たな現代アートの金字塔は間違いなしだな。後世に名を残すにちがえねえ。作品名は更地の花園がいいな」

「怖い、怖いよこの男!? 僕たちスキルアウトなんて足元にも及ばねえナニかだよコイツは!!」

まずは無重力状態にして、軽くしてから引っ張り上げて地面に垂直に・・・

「おい、待て！ 本気かよ!! 本気だつたの!? 片方は女だぜ!!」

「池面、イイことを教えてやるよ。オレが容赦すんのは学園都市では二人だけだ。都市外では三人増えるけどな」

「それお前の家族だけだろ!? それと何だよ、その呼び方!? ちょっと嬉しくなってる俺がいるよ!!」

つたく、しゃーねえ。やめといてやるか。ま、教育は出来たる。路

地裏がトラウマになる程度にや。

「ほつ・・・何で俺が胸を撫で下ろしてんだろうな・・・」

下から横に視線を戻すと、浜面はどこか遠い目をしていた。オレはその言葉を聞いて、涙子ちゃん撫でてえ・・・そう思つた。

さて、こんなもんでも前座は程々にしておいて・・・

「なあ、お前がここに来たのは無能力者狩りの件つてコトでイーよな？」

「なんだよ藪から棒に。てかれ、それ言つたつけ？」

「言わなくとも分かる、オレ天才だから。能力者による一般人狩り、最近酷くなつてんだろ？ 風紀委員の方でも似たような案件をちょっと前にやつたんだわ」

少し前の記憶を掘り起こし、逆に堀り進めすぎたせいか、顔が少し痛んだ。

「お前がそこまで分かつてくれてんなら、心強いぜ。今にも沈みそうな泥の小船から豪華客船に早変わりだ」

「清廉潔白な一般人にやそれでいいけど、お前の乗る船はタイタニックな。一等級の豪華客船だ、よかつたじやねえか」

「それ沈むやつじやねえか！」

「沈まねえよ。むしろ昇るんだ」

「真つ当たり昇天してんじやねえか？ 僕も普通の船に乗せてくれよ！」

」

何でだよ、お前は別に氷山に頭ぶつけてもオレは悲しまねえよ。むしろ一番爆笑してやつてもいい。手を叩きながら笑つてやる。

「もとを正せばお前らが原因なんだろ？ ま、その辺はどうでもいいけどよ。オレの妹に何かあつたら、辞世の句を考えこつたな」

色々と調べてみたが、やっぱこの無能力者狩りの発端はコイツラスキルアウト側にもあるらしい。ヤンキーチンピラ紛いのことしてりや、それはそうなるとは多少は思うぜ。

けど『正当な報復』つつて、それを無関係の一般人にぶつけんのは間違つてるけどな。分かったかーお前ら？ あ、気絶してるから聞いてねえや。

「駒場さんもこの件に關して色々と考えてるぜ。それこそ物騒なことまでよ」

「オレの目の届かない場所、オレの付近、そこでやんきや大概は許してやるよ。けど……」

「けど、何だよ？」

「あんま変な氣を起_こすのはやめた方がいいっすよ、そう駒場さんに伝えておきな」

だつてこのまま物事をスタコラ進めさせたら、それこそ取り返しおつかないことになつちまう予感がビンビンすんだよな。実験対象として貴重な能力者を無能力者が狩るなんて、ココの頭のネジが一本も無いお_{かみ}上が許すとは思えねえし。

「ああ、言つといてやるよ。にしても、俺と駒場さんに対する態度が全然違くねえか？」

「たりめえだろ。この学園都市で、駒場さんは尊敬出来る人だとオレは思つてるかんな」

「ほほう、それは何故_{なにゆえ}？」

「色々とあつけど、一つの芯が通つてるやつをオレは嫌いになれねえよ」

あの人見た目は厳ついし口下手だけど、中身は今時珍しい情に厚い漢_{おとこ}だぜ。この街に必要だとオレは思つてる。

「なら俺も尊敬しろよ」

「え、お前に芯あんの？」

「俺を何だと思つてんだよ!?」

「手癖の悪いチンピラ」

「うおおおオオオ!! 間違つてねえと言い切れねえのがツラいっ!!」

」

ほら合つてるじやねえか。てかやめとけ、壁叩くのは。手が痛くなるぞ。

「まだあの女の子とも親交は続けてるんだろう？ 1月だかの事件のやつ」

「ああ、あの船来つて駒場さんが呼んでる娘か？ よく懷いてるよ」

「だつたらそれこそ、やめとかせろよ。命あつての物种だ。下手に危ないこと考えてたら、その女の子にまで危害が及ぶかもしんねえし。それは本意じやないだろ？」

「分かつた。伝えといでやるよ」

絶対伝えとけよ。学園都市の闇は、こんな表面化した浅瀬とは全然違うんだからよ。生きるか死ぬか、もしくは死ぬ以上に目も当てらんねえコトになる可能性だつて大いにある。

「ま、そなな・・・もう一個だけ、伝言頼むわ伝書浜でんしょばま」

「誰が伝書浜だ！ 最後の文字はトだろ普通！ いやトでも良くなえけどよ！」

確かに良くなかったな。鳩に失礼だつたぜ。

ま、それは置いといて話の続きだ。

「どうしようも無くなつたら、オレに言つてくれ。レベル5が相手じゃなけりや、大抵のヤツには負けねえよ」

「お前が勝てないレベル5つて、どんだけ常軌を逸してんだよ・・・人として逸してるヤツばっかだよ、ホント。そう考えると御坂はまだ・・・マトモだな。削板も、まあ・・・マトモか。

「んじゃ、オレは行くぜ。やることあるし」

「おう。あ、おい佐天」

「んだよ。お前に割く時間は今日の分はもう使い切つたんだけど。閉店のシャッター下ろしたんだけど」

「俺に割ける時間短いな!? まだ5分も経つてねえだろ!」

もう5分も経ちそうの間違いだろ。秒数に変えたら300秒だぜ？ オレ換算だとそのまま300分に相応するよこれは。

「で？」

「助かつたぜ。コイツら無能力者狩りの奴らだろ？ ありがとな」

そう言つて、珍しく頭を下げる浜面。オレは周囲を一度ぐるりと見渡してから、肩を竦める。

「妹の為だ。感謝されることじやねえよ。襲われたのがお前だつたら、パイプ椅子でも持つてきてポップコーンとコーラ片手に高みの見物キメてるし」

「おい、俺でも助けるよ!? スプラッターものの映画になつたらどうすんだ!?」

「嫌いじやねえぜ、スプラッター系」

「映画の好みの話はしてねんだよ!!」

「雰囲気作りにサングラスも掛けとくか」

「いつちよまえに3Dで堪能してんじやねえよ!?」

「馬鹿言えよ。血しぶきまで飛んでくるんだぜ」

「4DX!?」

つたく、うるせえな。狭い路地だから声が反響すんだよ。さつきから。

わめく浜面に背中を向け、オレは明るい路地の方へと歩き出す。片手をダルそうに上げて2、3度横に振った。

「駒場さんにも小太郎にも、よろしく言つといてくれや。浜面さん」「いや半蔵な」

典型的な学校のチャイムがキーンコーンカーンコーン、と鳴った教室にて、オレは鞄に教科書を詰めて帰り支度を整えていた。

さあーて、今日も涙子ちゃんに会いに行くぞー！ なんてことを考えて内心ウキウキになつていたせいで、背後から迫る気配に気づくのが遅れた。

「まもりん、まもりん！ ちょっとええ？」

・・・チツ、何だよ。学校に拘束されてる時間ならまだしも、放課後の涙子ちゃんタイムにお前に費やす時間は残つてねーつての。

「んだよ、手短に頼むぞ。はい、スタート。3、2」

「まもりん！ それは手短にもほどがあるんよ！ せめてそういうのつて5秒はくれるもんやないの？！」

いやいや、3秒も費やせるなんてオレも進歩したと思うぜ？ 何が悲しくて放課後なんてフリータイムの5秒以上を青ピに費やすなきやいかんのだ。明日コイツが死ぬとしたつてゴメンだつづーの。

「んで・・・何の用だよ？ オレは忙しいんだ。上条とか土御門じゅや駄目なん？ オレは多分お前の期待に応えられないぜ？ うん、だろ？ ああ、分かればいいんだ。じゃあ、さいなら」

「何を勝手に一人で話を進めとるん？ まもりん、ひどいやんか！ ボクとキミの仲やないの!!」

片手を上げて背中を向け、ゆっくりと教室の扉に向かつて歩く道中で、喧しい声が聞こえてくる。

はあ・・・しゃーねえ。一応、話は聞いといてやるか。聞いとくだけだけど。何もするつもりはねーけど。

「下らない話なら、即帰るからな」

「さつすがまもりん！ そう言つてくれると思つてたでえ！」

「で、何？」

席の方へと戻り、椅子にまた座り直す。そして頬杖をついて、それはもう興味無さそうに青ピの方を見ながら、一応そやつて質問を投げる。いやもうホントに全く興味はないんだけど。

「まもりんに女の子を紹介して欲しいんよ！」

「よし、さようなら。二度とオレに話しかけないでくれ」

オレはすぐに立ち上がり、多分研究所時代にも中々したことが無かつたろうゴミ虫を見るような目で青ピを睨む。

だつてそれはつまり、そういうことだろ？

女の子とかぼかして言つてるが、この変態はオレの涙子ちゃんに目をつけてやがったんだ！ これを許してられつかあ？！ 確かに涙子ちゃんは天使だ！ 男なら知り合いになりたいのかも知んねえけど、ブツ殺すぞこの野郎!!

「ひつ！ ち、違うんよ！ きっと誤解してるんよ！ まもりん！ 別にボクはまもりんの妹をどうこうとか思つてへんから！」

握り締めていた拳を振りかぶろうとする寸前、青ピが髪と同じように真つ青な顔をしながら首をブンブンと左右に振つているのが見えた。咄嗟にオレは目の前の敵を殴るのを止めた。

「じゃあ、何だよ？ 何で急にそんなこと藪から棒に聞いてきてんだ？」

涙子ちゃんに手を出すつもりは無いと言うんなら、まあ別に怒る理由はないか。仕方なく会話の続きを進めることに決めた。

「この前、ショッピングモールでボクは見たんよ！ まもりんが女の子たちを侍らせてご飯を食べてる羨ましいところを！ 他にもゲームセンターでデートしてるところ！」

あー、そんなこともあつたな。侍らせてたつて失礼だなコイツ。そんなに誰かいたつけ？ 涙子ちゃんとのランチしか記憶に残つてねえんだけども。二人きりじゃなかつたつけ？

いや待てっ！ だとしたらやつぱりこの野郎は涙子ちゃん目当てじやねーか！ その青髪をぶち殺すつ！

「まもりん待つて！ また目が血走つとるんよ！」

「誰の女神と人生を走りたいってえ！」

「そんなこと一言も言うてないんよ！」

やつぱりコイツは敵だ！ ずっと変態だとか思つてはいたけど、ここまで放置してきたオレが間違いだつた！ 夏が来る前に抹消しなけ

れば！

「違う、違うんよ！ 誤解なんやて！ボクは常盤台の女の子の方を紹介して欲しいんよ！」

「常盤台い・・・？ お前、趣味が広いとは思つてたけど・・・悪い方にも広いのな」

青ピは白井と御坂に興味があるのか？ おいおい、ストライクゾーンがデッドボールじやねえかよ。あんな奴らのどこがいいんだ？ まあ、殴る蹴る大歓迎とかの趣味の人にはいいのかもしんねえけど。「分かった。紹介したつていいけど、何でこんな急に？」

「まもりんほんま!? 昨日の夜みたテレビで、ごつつい美少女のお嬢様ヒロインが出てたんよ！お嬢様と言えばやつぱり常盤台やん？ まもりんなら常盤台の女の子と知り合いやつて思い出してなー！」

つまりはテレビの影響か。まあ、そういうのもあるよな。て、待て？ お嬢様ならあの二人は該当しねーや。あれは前時代的な暴力系ヒロインだし。そういうのも青ピなら大丈夫そうだけどよ。

んー・・・それに当たるなら、湾内さんか？ 美少女だし穏やかなお嬢様。うん、湾内さんならピツタリだな。

「どしたん？ そんなにボクのことじろじろ見たりして？」

けど湾内さんに紹介するには・・・コイツは、ちょっとキツいな。トラウマになりかねない。よし、やつぱ無しで。

「スマン、やつぱ無しで」

「え、なんでなん?!」

「自分の胸に聞け」

てことで今回の議題はこれにて終了で解散でお開きで。さ、涙子ちゃんに会いに行こつと！

「まもりん、そんな殺生なあ！ 期待を持たせてから落とすのはひどいんよ！」

「お嬢様とお前は水と油だ。月とすっぽんだ。まずは性格を直してこい。そしたら紹介してやつから」

「そんなこと言わんといてよー！」

鞄を持つて、よし帰ろう。

「別にボクはまもりんのハーレムを崩そうなんて万に一つも思つてないでー?! ほんまやつて!」

「誰が誰のハーレムだよ。そんな夢みたいな話はアニメの世界だけだつての。オレもお前と同じで彼女いない仲間だ。ウイーアーフレンズ」

「まもりんがそんな言うても説得力が無いんよ! 全然ボクらと遊んでもくれないやんか! 女の子とばつかイチャついてるの知つてるんやで!」

放課後は涙子ちゃんの時間なんだから遊べないのは仕方ないだろ。だから学校ではこうやつて話してやつてるつつーに。オレの優しい優しい好意が伝わつてなかつたのか。

「ボクはただ! まもりんの友達の友達を紹介して欲しいだけなんやでー! まもりんばっかりずるいんよー!」

「・・・はあ・・・」

同年代の同性の身長も同じくらいの男の駄々をこねる姿は見苦しいこのこの上ない。目頭を押さえ、オレはため息をつく。

「分かつた、わーったよ。わーりましたよ。わーりましたとも。ちよつと聞いてみつから、待つてろ」

「それでこそボクの親友なんよ!」

「現金なやつめ」

スマホを取り出して、連絡先を眺める。

えーっと、湾内さん。湾内さんと・・・ああ、いたいた。

でも何て言えばいいんだ? 急に友達を紹介して欲しいとか、図々しくないか? 友達作りのアドバイスをしておいて、こつちは近道をしてるようで悪い気がする。んー・・・

「まもりんはほんまいい男やなあ」

「お前に言われても一切嬉しくないからな。ちよつと静かにしててくれ。3年間ぐらい」

「それもう卒業するまでなんよ!」

送るメッセージを考えている最中、おだてるような青ピの言葉を制するように一蹴する。やかましいわ。

友達を紹介してほしい、だと男の友達になる場合もあるよな？んー、女の子の友達を紹介してくれ、みたいな感じで送るとしても……どんな文章がいいのやら。これはちょっとミスつたら変態扱いされかねないぞ。

学園都市でも多分トップの方には入るだろうオレの頭脳を駆使するんだ。さあ、どうするか。考えろ、考えるんだ……！

そうだ、こういう場合は普通の会話から流れでそういうパターンに……！

『湾内さん、いま学校？』

ま、とりあえずは今暇なのかを知る必要があるよな。オレと同じく学校だと都合がいいんだけどなー。話題の広げ方的に。

とは言つてもすぐに返事が来るかも分からんし、教室にこうやつているのもあれだよな。スマホで連絡とれるんだし、今日紹介してほしいわけでも無いから家に帰つてからとかでも別に……

『佐天様、こんにちは。はい、今は学校にいます』

と思つていたら、案外早く通知が来た。ちょうどスマホでも弄つてたみたいだな、ラツキーラツキー。

『オレも今学校。奇遇だね』

まあ、この時間なら学園都市の半数ぐらいの生徒はまだ学校にいそうだし、奇遇でもないけど。オレみたいに学校が終わつたら早く帰りたいやつは別として。

『はい、奇遇ですね』

にしても思つたより湾内さんの返信が早いんだよな。前のファミレスの時も思つたけど。マメだなー。ホントいい子だ。確實に青ビに紹介したら駄目なタイプ。

『そう言えば常盤台で友達とか出来た？』

『はい。佐天様のお陰でどうにか出来ました』

あー、良かつた良かつた。あんまりこういう話はしてなかつたからな。世間話とかばつかで。友達が出来てたんなら、オレは安心だ。それを青ビに紹介させようとしている自分がとつても恥ずかしいけど。よし、こつからは本題に入ろう……なるようになれ。怒られても

仕方ないが！

『一つお願ひがあるんだけど……大丈夫？』

『勿論です。佐天様のためにわたくしが出来ることがありましたら、何でも言つて頂きたいです』

ぐあつ・・・！ 心が痛む！ いいのかオレ？ こんないい子が頑張つて作つた友達を、こんなやつに紹介させようとして・・・！ 「まもりん・・・目がまた怖くなつてゐるでえ・・・？」

別にコイツに借りがあるわけでもないんだ。むしろ貸してゐるまであるし・・・く、けど紹介するつて言つちまつたしな・・・ 紹介してくれないなら、それが一番いいんだけどなあ。とりあえず、送るか・・・

『これは全然断つてくれていいんだけどさ。良かつたら湾内さんの女の子のお友達を紹介して欲しいんだ』

く、送つちまつた。ゴメン、湾内さん。後で詫びは入れるよ。してもしてくれなくとも、どつちでも。

既読はついたけど・・・返信がさつきより遅いな。これは断つてくれるやつか？ それがいいぞ！

『それはその・・・佐天様に、でしようか・・・？』

あ、来た。既読無視までは許容範囲だつたのに。

これはあれだな、疑われてるな。オレのことを口リコンの変態だと思つてゐる可能性がある。こんな変態のせいでオレの名誉の危機だ。ここは明確にしておこう。

『いや、オレじゃないよ。オレの友達になんだけど』

『佐天様のお友達の方ですか？ 安心しました・・・』

オレもだよ、オレも安心した。誤解は溶けたみたいだ。良かつた良かった。けどあれだな、もう少しふオローしとくか。湾内さんのお友達を狙つてる最低な変態と思われないようにな。

『もちろん。オレは湾内さんだけで充分だからさ』

よし、これでいいだろ。これならどう考えたつて、卑劣な男には思われないはず。オツケー、オツケー。

後は紹介してくれようとくれまいとも、どつちでもいいや。形だけ

でも青ピの頼みは聞いたし。

さてさて、返信は・・・あれ、来ない・・・？

その後は湾内さんからの返事は中々来ず、スマホに通知が来ていたのは、涙子ちゃんに会いに行つたりと諸々を済ませた夕方頃、寮に着いた辺りだった。

因みに紹介はしてくれるらしい。マジかよ。菓子折りとか用意しどこ・・・

「う、嘘だよな・・・？」

決めていた待ち合わせ場所にて目の前に現れた男を一目見て、口から漏れた第一声。それは自分でも驚く程度にか細く震えた声だった。春から夏へと向かう微睡みそうな陽気の中、頬を伝ったのはガタガタと震えそうになるぐらいに冷氣を帶びた滴。純度百パーの冷や汗だ。

オレをそんな精神状態にした元凶が、食つて掛かるように口を開く、

「それはこっちの台詞やよ！ まもりんなんやねんその格好は?! 何で今日に限つてそんなに気合い入つてん！ ボクのヒロインも奪る気なん！ それは強欲にもほどがあるんやないの?!」

それはオレに思いつきり唾が掛かりそうな心からの叫びだつた。身振り手振りの大袈裟な喋り方だから、手に持つている薔薇の花束が散りそうになつてるし。

つーか何だよ薔薇の花束つて!? 真っ赤な薔薇だし！ しかもその前に格好どうなつてんだ!? コイツ白いタキシード着てるんですけど⁈ 白いタキシードに赤い薔薇つてドラマでしか見ないコンビネーションですね！？ ここ日本だよな??

青い髪も相まつてコイツ目立ちすぎだ！ 待ち合わせ場所を繁華街にしたのは間違いだつた！ 周りの視線が痛い！

「いや待て、まずオレのターンにしてくんない？ 何なお前？ 初対面で何をする気なの？」

「何つて挨拶やないの！ 女の子に会う時のマナーayan！ それに相手はお嬢様なんやから！」

「どこの国のマナーだよ・・・イタリアの男でも多分そこまでしねえぞ・・・」

オレは頭を抱えそうになる。てか抱えてる。青ピがこんなにアホとは思つていなかつた。常盤台にどんなイメージ持つてんだ。

湾内さんゴメン！ まだ見ぬ友人さんもゴメン！ オレが悪かつた！

ドタキヤンしてくれ！ 頼む！

「……はあ……」

「溜め息つきたいのはこつちやで!? その格好ほんまになんやねん?! まもりんのアホー！」

青ピがオレを指差して何か喚いている。元気だなコイツ……自分を客観視しろよ。ヒロイン（）からドン引きされるの確實なんだから。目の前にいる天文学的な馬鹿から現実逃避がしたくて横を見た。何かの店の窓に反射する自分の姿が見える。涙子ちゃんに選んで貰つたオシャレな服を着たオレが。

まあハツキリ言うと、めつつつつつつちやカツコいい。涙子ちゃんが女神だから、血的にそれは当然なんだけど。家で鏡を見た時に、色々なポーズを決めたくなった程度にはカツコいい。まあそれは決めたんだけど。

都市外には涙子ちゃんと同じく最愛の弟がオレにはいるが、成長したらオレ以上のイケメンになるのは間違いないと鏡を見ながら思つた！ その未来に鼻が高い！

「何つて妹に選んでもらつた服だよ。間違つてもお前触んなよ？」

ブツ飛ばすぞ

「こんなのがひどいやんかー!? どう考えたってボク引き立て役にしかならんやないのおー！ まもりんは悪魔やーっつ！」

「そんな格好で着た時点でピエロは確定だろ……」

キワモノ丸出しの格好で激しい動きで大きな声でほぼ泣きそうになりながら叫んでる青ピは完全に不審者だ。ホントに周りの目が痛い。

ごめんなさい、皆さん。誰かが迷惑かけて。コイツは友人じやないんです。たまたま予定してた待ち合わせ場所が被つた知らない人なんです。

オレは周囲をぐるりと見渡し、申し訳なさそうな目を辺りに向ける。こっちの様子を伺っていたうちの数人と目が合つた。全員女子だつた。こんな不審者に警戒するのは当然だよな。マジですんません。

「キヤーッ！ わたし今あの人と目が合つたよ！」

「えーっ！ ほんとお？！」

そしたら何か呼ばれた。

え、オレも不審者の括りに入っちゃつてます？！ んなアホな？！ それは違うよ！ 誠に遺憾だよそんなの？！

「お前のせいでオレも変なやつだと思われてるんだけど」

「今までそう思うのはまもりんだけやー！！ やつぱりハーレム主人公やないのー！！ 不公平やー！！」

いやどう見たつてそうだろ？ 叫ばれてんだよ？ いま傷付いてるからな、オレ。見る限り顔を真っ赤にするぐらい怒りに染めちゃつてんだぜ？ お前はこういうのに慣れてるかもしないけど、オレは慣れてねんだよ！

「神様こんなのがんまりやよー・・・！」

ひたすら不平不満やらを高々と叫ぶ青ピを横目に、オレは肩を落とす。完全に仲間だと認識されてる。もうお天道様に顔向けできねー！

どんなツラで明日からここを歩けんだ？！

・・・つーか、よく考えたら今日はやけに声を掛けられた気がする。いや、掛けられた。ここに来るまでに何人ものこれまた女の子から。もしかして、オレって普通に不審者なのか・・・？

聞いたことがあるぞ。小学生とかは怪しい人には先制攻撃の挨拶をするつて・・・それと同じなのかな？ オレって・・・コイツと同類なの・・・ツ？

「何でそないに悲痛そうな目でボクを見るんよー!? まもりん!?」

」

不審者だったのか・・・オレは・・・湾内さんに悪いな・・・そのお友達にも・・・オレとコイツといいる場所なんて見られたら、末代までの恥になりかねない・・・常盤台でのイジメに繋がるかも・・・こはもう帰ろう・・・詫びの連絡を入れて・・・

自分の立ち位置を理解したオレは濁つた瞳でスマホを取り出した。連絡先をスライドして名前を探している最中に、

「さ、佐天様つ・・・！」

「…」

という声が聞こえた。遅かつたか。ちくしちゃう。

「…」

オレはほんの少しだけ、顔を上げる。

赤い顔をした湾内さんがいた。その近くには常盤台の制服を着た友人らしき黒髪ロングの女の子も。湾内さんと同じように清い心の雰囲気を感じる。心が重くなる。

こんな善良な娘たちを不審者の一派と思わせるなんて、オレはなんて最悪な人間なんだ…

「ゴメン…」

伏し目がちに謝罪の言葉が口から自然に出た。湾内さん、オレは早く謝るべきだつたんだ。青ピバつかり棚に上げてたけど、オレも同類だつたんだから。そんなのと交流を続けてくれた慈悲深さに感謝しかない。

今のおれは窓も鏡も見なくて分かる。暗い顔をしてるつてことが。言い方を変えれば物憂げか…青ピ、お前も俺と一緒に謝罪をしよう。そして菓子折を渡して素直に帰ろうぜ…

「あ、っ…う…！」

湾内さんの声は続かない。嗚咽らしき何かは聞こえるけど…声も出せないぐらいに不審者なんだろうな、オレたちが。でも事実から逃げちやいけないよな。怖いけど、湾内さんの顔をちゃんと見よう。受け止めよう。自分の立ち位置を…

改めてちゃんと顔を上げた。トマトみたいな顔色で倒れそうになつている湾内さんが見えた。前回もこんなのがつたつけ。あの時もきつと、周りの女の子達みたいに怒りに耐えてくれてたんだな…：「湾内さん、今までホントに…」

これまでの感謝を込めて、最後に別れを告げようとオレは意を決した。けれどその言葉は続かなかつた。

なぜなら、

「わ、湾内さん！　お気をしつかり！」

「まもりん！　今の顔はズルいで！　あかんてそんなん！」

他ならぬ周りの二人によつて。

湾内さんの友人が、バランスをいつ崩しかねない湾内さんを支えている。

青ピがオレの胸ぐらを掴んでいる。おい待て、涙子ちゃんの選んでくれた服に触んな！ というかなんだよ！ オレの一世一代の別れの言葉だぞ！ 邪魔すんな！

「な、何だよ？ 青ピ、オレはただこの菓子折と感謝の言葉を最後に伝えようと思つて」

「鈍感系はもう古いて！ まもりん！」

だから鈍感だつたけど気づいたろうが！ オレは不審者なんだ！

お前と同じ女の敵だつたんだ！ それに気付いたんだよ！

「大丈夫でしたか・・・・？」落ち着きましたか・・・・？」

「は、はい・・・・泡浮さん、申し訳ございません・・・・」

湾内さんの友人は泡浮さんと言うらしい。今は背中を擦つている。湾内さんも落ち着いてきたのか、顔色が少し赤いぐらいになつていた。

「おい、離せ。けじめを付ける」

「まもりん？ けじめつて何の?!」

青ピの手を離させると、オレは二人へと歩を進める。手に持つていいる高級店で選んだ菓子折、青ピだけが迷惑なんて考えてオレを含んでいなかつたことに今さら自嘲しそうになるが、それを真剣な顔で差し出した。

「湾内さん・・・それと泡浮さん、だよね？ 今日はゴメン。これなんかじや足りないと思うけど、オレの気持ちなんだ。受け取つて欲しい

」

菓子折の内容は飴玉だ。キヤンディだ。異性に渡すのに縁起がいいと店員さんが言つていた。一番高いやつにした。けど、これで許して貰えるとは思つてない。

「さ、佐天様・・・ふあ・・・・」

「あ・・・ありがとう、ご・・・・ござります・・・・」

どうにか受け取つてはくれたから、ひと安心だ。湾内さんはもとより、泡浮さんの方も顔が赤くなっている。初対面で怒らせるなんて

やつぱり、オレは駄目なやつだ・・・

そう思つていたら、強い力で後ろに引っ張られる。ほぼ泣いている
ような顔の青ピが見えた。薔薇もほぼ散つてる。

「ボクのヒロインまで奪らんといてよおーー!! まもりんの鬼いー!!

」

青ピは良く分からぬことをほざいた。今のオレはそんなのに付
き合う気力も、ツッコむ元氣も無い。

「青ピ、もうやめよう。オレたちは仲間だ。女の子に迷惑しか掛けら
れねえ存在なんだよ。ほら、見ろよ。一人を」

二人とも見る限り泣きそうになつてゐる。赤い顔で涙の溜まつた瞳
なんてこんなのが怖い。恐怖を感じるとしか思えない。本当にごめん。
それしか言えねえよ。

「赤面して潤んだ瞳の美少女は眼福なんよ! ありがとうまもりん!
けどちやうねん!!」

何を言つてゐるんだコイツは。怯えてる少女を眼福とか不審者通り
越して犯罪者だつづーの。

「まもりんホンマいつか刺されるで!? ボクは美少女からの包丁も愛
として受け止められるけど!!」

刺されるほどオレって嫌われかねないのか・・・くそ、どうしたら
真人間になれるんだ。不審者から脱出出来るんだよ・・・っ!

先の見えない暗闇に気分がまた落ちる。

「青ピ、もうオレたちは帰ろう」

そう言つて踵を返そうとする寸前、視界の先の二人が姿勢を崩すの
が見えた。コンクリートの上で受け身も取らずに倒れたら、怪我は免
れない。

オレの行動は迅速だつた。嫌われるのもういい。けど、痛い目に
合うのは避けさせたい。

能力を使つた。二人を無重力状態にさせる。もうこれで倒れはし
ない、けど意識が薄れてるだろう状態でこれを維持させていたら、上
下左右のどこにでも飛びかねない。下手したら頭から地面に行く。
駆け寄つた。極力触れないように支えるしかなかつた。青ピに任

せても良かつたかもしないけど、変なところ触りそだだからそれはやめといた。

「本当にゴメン。すぐに離れるから、まずは意識をしつかりと…」
 湾内さんも泡浮さんもどんでもなく顔が赤い。この状態をすぐにやめなければオレは逮捕確定だ。

二人の顔を覗き込んだ。光が微かに灯っている不明瞭な瞳。寝起きのような状態のそれを眺め、二人に声をかけた辺りで、

「△〒▲‡▲・△#※%!？」

爆発した。

何か良く分からぬ言語で、本当に爆発した。
 デジヤブを感じた。